



Title	日本語の主題の位置付けについて : 形容詞文を中心に
Author(s)	Tuptim, Natthira
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博 士 論 文 (2008年度)

日本語の主題の位置付けについて

—形容詞文を中心に—

大阪大学大学院言語社会研究科

言語社会専攻

タップティム ナッティラー

大阪大学大学院言語社会研究科

博士論文

題目 日本語の主題の位置付けについて
—形容詞文を中心に—

提出年月 2009 年 3 月

氏名 タップティム ナッティラー

博士論文要旨

日本語の主題の位置づけについて

－形容詞文を中心に－

本稿は、修士論文に続き主題について考察を行うが、タイ語の主題を中心に考察した修士論文と異なり、本稿は日本語の主題を中心に考察する。日本語の研究において主題の研究は発展しており、高い成果を挙げているといえる。この成果をもとに、形容詞文における主題について考察する。

日本語においては主題を示す主題標識があり、それは「は」という形式が担う。日本語の主題は「は」でマークされることにより、様々な構文において同一のものとして扱われることが多い。しかし、本稿の分析した結論としては、主題文が同じ「は」でマークされても、形式の上では同一視することができるが、主題と後続命題¹の関係の観点では同一視ができない場合がある。これを前提に、本稿の分析を進める。

日本語の主題に関する研究は多大な実績を持っている。しかし、現実には主題に対する認識は統一的ではない。具体例を述べれば、「主題 - 解説」の関係の捉え方の相違が挙げられる。

「主題 - 解説」の関係は、「述べられる対象」と「(その対象について) 述べる内容」である。具体例を挙げて説明する。

(1) 魚は鯛がおいしい。

「主題 - 解説」の関係を広義的に捉えれば、(1) は「主題 - 解説」の関係が成り立つ文となる。だが「主題 - 解説」の関係を狭義的に捉えれば、(1) は「主題 - 解説」の関係に成り立たない文となる。

まず、本稿がいう狭義的な捉え方について説明する。「主題 - 解説」の関係を益岡(2004)を援用して説明すれば、「主題 - 解説」の関係の主題は、文の内部的成分であり、文内の要請により主題が与えられるのである。この「主題 - 解説」は属性叙述述語

¹ 後続命題とは述語部全体を指す。モダリティに対する命題の意味ではない。

文と密接な関係を持つ。すなわち、属性叙述述語文は主述関係を持つ文である。そして、これらの文の主語は通常主題という形で表れる。つまり、「主題 - 解説」の関係は主述関係によって保証される。(1) は本稿の分析した結論によれば、「魚」は「鯛がおいしい」の主語ではない。つまり、(1) は「主題 - 解説」の関係に成り立たない文であるといえる。

それに対して、(1) が「主題 - 解説」の関係に成り立つ文とする広義的な捉え方は、「主題 - 解説」の関係において「述べられる対象」と「(その対象について) 述べる内容」の定義にある、「について」を重視すると考えられる。本稿は、狭義的な捉え方を取るものとする。その結果、(1) のような文は本稿にとって「主題 - 解説」の関係を持つ文ではなく、(1) の主題は文の前提として最初から存在するものと捉えられる。さらに、述語とは意味的關係を成していないことから、こうした主題を純粹主題と名付ける。また、純粹主題は「主題 - 解説」の関係を持つ文の主題と異なり、文の冒頭で後続命題の内容を限定する。つまり、文の後部にある命題後続が生じる“場”を限定する。

文の後部の後続命題が生じる場を限定することは、状況成分を主題化する状況主題からも観察できる。状況主題は「格助詞+は」の形態を取っているが、対比の意味が感じられにくい。こうした状況主題はいかなる場を限定するかというと、後続命題の内容が成り立っている時間的・空間的な背景を示すのである。

純粹主題も状況主題も場を限定することにおいては同一の特徴を持つが、限定する場の意味は若干異なる。そのため同じ文の中に一緒に現れることがある。本稿では、一文に二つの異質の主題が表れることが可能であると主張する。その際、一文に二つの主題が表れる文を二重主題文とするが、この種の主題文は日本語と主題の研究の中で本格的に考察されてこなかった。

次に、本稿で「主題 - 解説」の関係に立つ文として挙げる文を見る。本稿は、狭義的な捉え方、つまり主題が主語的主題である立場を採用すると述べた。それを踏まえ、主語でありながら主題でもあるという現象について、本稿の分析により明確な考察を行う。

(2) 象は鼻が長い。

「象」は後続命題「YがZ」、つまり「鼻が長い」の主語であり、「鼻が長い」は「象」の性質や特徴を述べる述語である。この記述は新しいものではない。「鼻が長

い」が「象」の性質や特徴を述べる述語ということは、「鼻が長い」が叙述性を持つということを示す。さらに、「鼻が長い」は単純述語文の「PはQ」の「Q」と同様、一まとまり性を持つ。これによって、「YがZ」は「Q」と同様の扱いが可能となる。つまり、本稿ではこのような文は、従来表記されてきた [_S X-wa [_S Y-ga Z]] とせず、「YがZ」を [_{AP} Y-ga Z] のように表示する。この表記を採用することにより、「X」と「YがZ」との主述関係が明確に把握できる。さらに、「YがZ」で共起する「Y」は主語であるが、述語の一部になることは主語としての典型的な現れ方ではない。主語は一般的に文の成立にかかわり、文全体や述語に対して他の成分と異なった位置づけや関係を担う存在である（仁田 1997:171）。このような主語の特徴を踏まえれば、「Y」は主語として典型的な現れ方ではないことは妥当である。つまり、「Y」を含む「YがZ」は文として独立性が欠けており、「YがZ」は文「S」より形容詞句「AP」として捉えた方が適切である。

「X」つまり「象」が主語的主題であることにおいて、「X」は形容詞句（AP）が示す性質や特徴の持ち主として主語である。「X」は本稿のテストフレームとして挙げられる「そう（だ）」の代用表現に準じれば「X」は文末表現にかかっている。つまり具体的に述べれば、文末の「だ」にかかるのである。この記述も目新しいものではないが、主語的主題という名付けは明示的に示される。

ここで再度主張するが、本稿では主題文が同じ「は」でマークされても、形式の上では同一視することができるが、主題と後続命題の関係の観点では同一視することはできない。この主張が妥当であることは次のコト名詞句の主題文によっても証明される。

(3) ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい。

(4) 言葉が必要ないとき、言葉を発するのは、悲しい。

一見したところ、形式の上で (3) と (4) には違いがない。しかし、本稿では (3) と (4) は異なる意味解釈を持つと考える。日本語の「PはQ」においては、条件的解釈が可能である（三上 1960）。「PはQ」に条件的解釈があるのは、主題文の特徴から導かれると考える。すなわち、主題文の「PはQ」において、Pの主題はQの解説に先立って先行される部分である。つまり、PとQの間には生起の順序があるといえる。そして、「PはQ」に上記の特徴があるために、条件的解釈になる場合がある。本稿で

は「P は Q」が条件的解釈になるか否かは、2つの要因があるとまとめられることを提示する。一つは談話による要因（有田 1992）、もう一つは文の性質による要因（堀川 2006）である。だが、前者については本稿では取り上げないことにする。後者の文の性質による要因は、(3) と (4) の相違に重要な役割を果たすと考ええる。本稿では、P と Q の間には生起の順序があることを前提としている。その結果、(3) と (4) に戻ると、(3) には継起的関係が潜在しており、本稿のテストフレーム、つまりシテ形接続との置き換えによってこの継起的関係が強調される。さらに、(3) には P に立つコト名詞句の主題の事態と「さびしい」という感情形容詞の特徴から、因果強化読みという解釈が与えられる。だが、(4) はこのような意味解釈にはならず、属性描写文である。こうした (3) と (4) の違いの要因は、コト名詞句の主題の事態にあると考えられる。

(3) のコト名詞句の主題の事態は個別・一回的な読みが可能であるのに対し、(4) のコト名詞句の主題の事態は複数読みの方が可能である。つまり、(3) と (4) のような意味解釈の違いは、上の各文の性質によるものである。

この (3) と (4) の相違は、これらの文をタイ語に訳すと明確に示される。

- (5) ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい。

ตอนอยู่ ก็กวนประสาทดีเหลือเกิน แต่ไม่อยู่แล้ว ก็ชวนให้เหงา(เหงา ที่มันจะไม่อยู่)
 toonyuu koo kuan prasàat dii leuakœn tæ mâi yuu læo koo chuan hâi gǎo
 (gǎo thîi man cà mâi yuu)

- (6) 言葉が必要ないとき、言葉を発するのは、悲しい。

การพูดในเวลาที่ไม่ต้องการคำพูด ข้างหน้าเศร้า
kaan phûut nai weelaa thîi mâi tɔŋkaan khamphûut chāapnāasào

(5) では結果を表す語句 chuanhâi (ชวนให้) と括弧の中のような原因を表す thîi 節が共起し、文形式は主題文ではない。一方、(6) は名詞化接頭辞の kaan (การ) で名詞化される主題の文形式である。さらに、「悲しい」は価値や状態、属性を表すとき nāa をつけて形容詞の nāasào (น่าเศร้า) として表れる。つまり、(3) の日本語はタイ語において (5) のように因果を示す文となるが、(4) の日本語はタイ語において (6) のように属性描写文となる。

タイ語の主題については、日本語の主題に関する成果を生かして考察する。タイ語においては(6)のように主題標識が示されていない場合、「は」に似ている働きを持つ主題を表す形態的手段 *nà* と *nīi* が用いられる。さらに、タイ語の二重主語文、二重主題文及び状況主題文を概観すると、タイ語の主題のあり方は日本語の主題に非常に類似していると結論付けられる。本稿のタイ語の主題分析が、今後の主題分析の発展の契機になれば大変喜ばしいことである。

本稿は「は」は、後続命題の内容の範囲を設定するために存在することを明らかにした。主題の中に純粋主題、状況主題、主語的主题などという異質の主題があることは、主題が後続命題に対する関係によってもたらされることである。本稿ではこれらの主題について明確に考察できたと思われる。

Doctoral Dissertation Abstract

About placing Topic in Japanese In the point of adjectival sentences

In this paper I have chosen to concentrate on topic of an adjectival sentence in order to make an assertion that there are many types of Japanese topic from a perspective of the relation of the topic and its predication. In this paper the main function of topic marker WA is the setter of the scope for predication.

In many cases of Japanese topic, its form is similar but from the perspective of the relation of the topic and its predication, I analyzed it differs from each other in the meaning. I have chosen the following sentences to verify the above assertion.

- (1) sakana wa tai ga oishii.
- (2) zoo wa hana ga nagai.
- (3) chotto shinkeishitu na gorira datta ga, inakunaruno wa sabishii.
- (4) kotoba ga hituyounaitoki, kotoba wo hassuruno wa kanashii.

I named (1) Junsuishudai or Pure Topic in the meaning of Takeishi (1994). (2) is the one named Shugotekishudai (Subject Topic). (3) and (4) are Kotomeishikunoshudai (Koto-noun phrase Topic). Both of them take nominalizer 「no」. It is interesting that there is the difference in the meaning of them.

Topic in (1) is the setter of the scope of predication. This character is accordance with the character of WA, and I observed that topic in (1) has no any meanings with its predication. This conclusion is supported by the results from tests used in this paper. Another important issue to exhibit is that (2) is a topic-comment, but (1) is

not.

Turning to the difference between (3) and (4), I could observe a succession in (3), but not in (4). This difference is from the difference in character of Koto-noun phrase.

A last issue in this paper is to overview Thai topic. The Thai language is claimed as a topic language like Japanese. It could be observed that there is a likeness between two language topics.

目次

序章

1. 研究の目的及び方法.....	1
2. 本稿の構成.....	3

第1章 日本語の主題について

1. はじめに.....	4
2. 日本語の主題に対する従来の考え方—尾上（2004）に基づく—.....	6
2.1 主題を文の内部的成分とする考え方.....	7
2.2 主題を文の外側の成分とする考え方.....	8
3. 「PはQ」の間にある関係と意味解釈.....	10
3.1 主題 - 解説の関係.....	10
3.2 aboutness の関係.....	12
3.3 「は」と意味解釈.....	14
4. 主題の生成.....	16
5. まとめ.....	21

第2章 純粋主題

1. はじめに.....	22
2. 先行研究.....	22
2.1 野田（1988）.....	23
2.2 菊地（1995）.....	24
2.3 丹羽（2006）.....	26
2.4 言語学の場合.....	27
3. 文の外側とは.....	27
3.1 が格への変更不可能なこと.....	28
3.2 焦点化不可能.....	30
3.3 連体節化不可能.....	31
3.4 まとめ.....	32

4. 状況主題.....	33
4.1 状況成分.....	33
4.2 状況主題.....	36
5. 二重主題.....	38
5.1 主題研究と二重主題.....	38
5.2 状況主題と二重主題.....	41
6. 対比となる条件と純粹主題と状況主題の位置.....	44
6.1 対比についての先行研究.....	44
6.2 状況主題と純粹主題の位置関係.....	49
7. 純粹主題とは何か.....	53
7.1 状況主題と純粹主題が共存する文の意味解釈.....	53
7.2 西山（2003）の領域限定つきの指定文.....	54
8. まとめ.....	55

第3章 主語的主題

1. はじめに.....	56
2. 「そう（だ）」について.....	57
2.1 「そうす（る）」 / 「そう（だ）」の代用とテンス.....	59
2.2 主語と代用表現.....	59
3. 「そう（だ）」の代用から見られる述語の階層.....	61
3.1 複合述語（Complex predicate）.....	61
3.2 一まとまり性.....	63
4. 複合語と主語.....	65
4.1 動詞由来複合語と主語.....	66
4.2 名詞＋形容詞の複合語.....	66
4.3 複合述語の「主語」の特徴.....	68
5. 主語的主題.....	69
5.1 形容詞句としての「YがZ」.....	69
5.2 なぜ主語的主題なのか.....	70
6. まとめ.....	74

第4章 コト名詞句の主題

1. はじめに.....	76
2. 形式名詞としての「の」.....	77
2.1 「の」と「こと」の特徴.....	77
2.2 「の」「こと」と形容詞類.....	82
2.3 感情形容詞とことがら.....	84
3. コト名詞句の主題の意味解釈.....	86
3.1 コト名詞句の主題と継起的関係.....	89
3.2 因果強化読み.....	91
4. コト名詞句の内部構造の問題.....	92
5. まとめ.....	98

第5章 タイ語の主題

1. はじめに.....	99
2. タイ語と主題.....	99
3. タイ語で用いる主題を表現するためのその手段.....	102
3.1 タイ語の語順と主題.....	103
3.2 左方転位構文.....	105
3.3 主題を表す形態的手段の「nīi」と「nà」について.....	107
3.4 nīiとnàの機能と語類.....	109
3.4.1 nīi.....	109
3.4.2 nà.....	110
3.5 nàとnīiの現れる環境.....	112
3.5.1 現象文.....	112
3.5.2 nàとnīiが下接する名詞の特徴.....	113
3.6 nàとnīiと否定のスコープ.....	114
3.7 まとめ.....	117
4. 主題卓越型言語の特徴的な構文—二重主語文—.....	117
4.1 タイ語の二重主語文.....	119
4.2 いわゆる二重主語文において日本語とタイ語の違い.....	121

5. タイ語における話題設定の主題、状況主題、二重主題文について.....	123
5.1 話題設定の主題.....	123
5.2 状況主題.....	126
5.3 二重主題文.....	127
6. タイ語における日本語の「の」形式の主題について.....	130
7. まとめ.....	135
8. 凡例.....	136
結章.....	138
参考文献	

序章

1. 研究の目的及び方法

本稿は、形容詞文に現れる主題を中心な分析対象とする。また、後続命題の内容との関係により主題の中には異質の主題があること、さらに、それぞれの主題はいかなるものとして位置付けられるかを記述することを目的とするものである。

「は」は、後続命題の内容の範囲を設定するためにあるものとする。このように「は」の定義をすることにより、主題は後続命題の内容に対する関係が様々なものであっても、後続命題の内容の範囲を設定するという統一性により位置づけられる。

「P は Q」において「主題 - 解説」の関係という術語はよく目にする。「主題 - 解説」の関係は、「述べられる対象」と「(その対象について) 述べる内容」である。しかし、「P は Q」は必ずしも「主題 - 解説」の関係を成すわけではない。さらに、日本語の研究者の中で、「主題 - 解説」の関係に対する理解が同一ではないことは容易に予想されることである。

本稿の立場は、主題文が同じ「は」という形式でマークされても、形式の上では同一視することができるが、主題と後続命題の関係の観点では同一視することはできない場合があると捉えるものである。

本稿で分析対象とする主題の代表文は以下の4文である。

- (1) 魚は鯛がおいしい。
- (2) 象は鼻が長い。
- (3) ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい。
- (4) 言葉が必要ないとき、言葉を発するのは、悲しい。

上の4つの文は、いずれも「は」でマークされるため、文形式の区別がつかない。しかし、4つの文の主題の後続命題に対する関係により、4つの主題はそれぞれ異質な主題として位置付けられる。よって、4つの主題が異質のものであることを主張するため、各章ごとにテストフレームを設ける。

まず、(1) と (2) は形式の上では同じ主題文に見える。その (1) と (2) の相違については、従来の研究では (1) と (2) における「X」と「Y」の関係に分析が集中している。「X」と「Y」の関係において (1) と (2) は異なるが、両方とも「主題 - 解説」の関係にある文とされる (Li and Thompson 1976、丹羽 2006)。しかし、本稿では主題「X」と後続命題「YがZ」の関係に注目することにより、(2) は「主題 - 解説」の関係が成り立つが、(1) は「主題 - 解説」の関係が成り立たないことを主張する。以上の理由から、(1) と (2) に現れる主題を区別するために、次のテストフレームを設ける。

1. ガ格への変更不可能
2. 焦点化不可能
3. 連体節化不可能

結論として、(1) は全てのテストに不合格となるのに対して、(2) は全てのテストに合格となる。それゆえ、(1) の「X」の後続命題「YがZ」に対する関係と、(2) の「X」の後続命題「YがZ」に対する関係が異なることを明らかにすることができる。さらに、(2) の「X」は主語であり主題であることを具体的に立証するために、代用表現の「そう(だ)」のテストのもとに考察を行う。詳細は本論文で後述する。

次に、(3) と (4) について考察する。(3) と (4) は、いずれもコト名詞句の主題と、「さびしい」「悲しい」という感情形容詞で構成される主題文である。しかし、両者は形式の上では同じであるが、意味において異なると考えられる。(3) には事態の生起の順序、つまり継起的関係が存在するが、(4) にはそれがない。また、(3) の「さびしい」はコト名詞句の主題の事態に引き起こされる感情である。従って、(3) は因果強化読みとしての意味解釈が可能である。それに対して(4) は属性描写文であり、「悲しい」が主題にあるコト名詞句の性質や特徴づけを示す。この(3) と(4) の相違を区別するために、本稿ではシテ形接続のテストフレームを用いる。このテストのもとに、継起的関係を明らかにすることが可能となる。

最後に日本語の主題の観点から、筆者の母語であるタイ語の主題を考察する。長年の日本語の研究を経て得られた知識を援用して、タイ語の主題のあり方を明らかにする。

本稿におけるこのような分析方法は、具体的なテストのもとに実行されていることから、主張する項目が明確に記述できると考えられる。

2. 本稿の構成

本稿で扱う内容は次の通りである。

第1章では、様々な観点から行われてきた日本語の主題に関する先行研究を概観する。

第2章では、「魚は鯛がおいしい」のような文の主題が純粹主題であることを主張する。その際、後続命題とは意味的關係を成さない主題として、付加的な存在で文の外側にあることを明らかにする。さらに、文にとって付加的成分である状況成分は状況主題を構成し、格助詞を伴う形の「には」や「では」でも対比の意味を示さないことがあることを指摘する。さらに、一文に二つの主題が現れ得ること、つまり二重主題について考察を行う。その際、純粹主題と状況主題の位置関係や、後続命題に対するどのような働きを担うかを考察する。

第3章では、「象は鼻が長い」のような文の主題が主語的主题であることを主張する。このような文は複合述語を構成する文とされることから、「そう（だ）」の代用のテストフレームで複合述語のあり方を確認する。また、「そう（だ）」の代用により、「XはYがZ」の「Y」の主語のあり方や「X」の位置を考察する。

第4章では、従来考察されてこなかったコト名詞句の主題について考察を行う。すなわち、コト名詞句の主題文から事態の生起の順序、つまり継起的關係が捉えられることについて述べる。その際、コト名詞句の主題の意味解釈と構文分析についても考察する。

第5章では、修士論文に続き、タイ語の主題について考察を行う。第5章の前半では、タイ語の主題を表す手段について検討する。後半では、本章の第2章、第3章、第4章で考察した日本語の主題の考察の成果をもとに、タイ語の主題について概観する。

最後に、本稿で使われる例文について述べる。例文の後ろに出典が書かれているものは実例である。また、出典がない例文は作例である。

第1章 日本語の主題について

1. はじめに

日本語の主題に関する研究は年月と共に実績をあげながら、主題とは何かという結論にはまだ至らない状態である。主題に関する研究や分析は数多く存在し、本章で論じる主題の先行研究は、研究史の中で相互に直接的な関係がないものが多い。しかし、これらは次章以降の主題の分析の基礎になるものである。

主題は多くの研究者の中で談話の問題であって、文レベルには属さない問題である。つまり、主題は談話に大きく関与する問題とされてきた。それゆえ、「既定・未定」や「旧情報・新情報」という概念が主題の特徴として挙げられる。旧情報・新情報は久野（1973）が「既定・未定」を元に精密化した概念である。この旧情報が主題名詞に課せられ主題になりえるのは、すでに会話に登場した事物・ことがら、すなわち現在の会話の登場人物・事物リストに登場済みのものを指す名詞句である。いわば、文脈指示の名詞句のことである。

また、主題は文のレベルでも考えられる場合も多々ある。尾上（2004:29）が指摘した名詞句を表現の前提に、つまり主題に持ち出すことが自然となる条件の中に、文脈上の既定という条件のほかに、話し手、聞き手、表現行為のイマ、ココおよびそれらの関係項目という条件が関与する。この条件は談話には直接関与していない。本稿はこの点について賛同する。すなわち、イマ、ココという概念は言語の状況成分に当たるのである。そのため、状況成分由来の主題は文のレベルで起こりやすく、前の文脈なしで成り立つ主題である。主題に文のレベルの主題と談話の主題が二つあることを明確に示したのは、益岡（2004）である。益岡（2004）の「文内主題」と「談話・テキストの主題」は叙述の類型と密接に関係する。まず、「主題 - 解説」の構造は属性叙述に根ざすものである。主題は文の内部的な事情、つまりその属性を所有する対象の要請により付与されるものであり、文内主題である。一方、談話・テキストの主題は、「述語 - 項」の無題文の構造とする事象叙述に関与する。こうした事象叙述文は文の内部的な事情を持たないことから、主題の要請は文の外側にある。

主題のレベルは談話か文かということに留まらず、主題とその後の命題の関係でも重視されてきた。「PはQ」において、QはPについて述べる内容である。筆者は外国人

のため、日本語の母語話者ほどの言語的な直感がないが、以下の (1) と (2) は異質な文であることが感じ取れる。

- (1) 魚は動きが速い。
- (2) 魚は鯛がおいしい。

(1) は Q の「動きが速い」が P の「魚」について述べる内容としてはっきり分かるが、(2) は Q の「鯛がおいしい」が P の「魚」について述べる内容としては読み取れない。これについて母語話者の日本語研究者にも、筆者と同じ意見を表示する何人かいる。そこで、(1) は「主題 - 解説」の関係を持つとすれば、(2) の主題は何であろうかという疑問が浮上する。この (2) に関する分析は第 2 章で行う。

(1) と (2) の解釈の違いは、「主題 - 解説」の関係に対する理解が不統一であることを示す。「主題 - 解説」の関係の意味を広義的に捉える人にとっては、(1) と (2) は両方とも「主題 - 解説」の関係の文である。一方、狭義的に取る人には (1) だけが「主題 - 解説」の関係の文である。本稿では (1) だけを「主題 - 解説」の関係の文とする。

なお、主題の派生については、主題が基底生成するという考え方と、主題が移動して主題化するという考え方がある。主題はどちらの派生を経て主題として成り立つか、いまだに結論が付いていない。本章の 4 節ではこの二つの考え方の流れを紹介した上で、本稿の見解を述べる。

2. 日本語の主題に対する従来の考え方—尾上 (2004) に基づく—

筆者は修士論文の作成のときから、主題には文の内側と文の外側にあることを認識してきた。本稿にもその背景が大きく関わっている。タップティム (2005) ではタイ語の主題を中心に分析したが、本稿では日本語を中心に分析する形になる。日本語において、筆者の立場では、文の内側を代表する主題文と、文の外側を代表する主題文の二者を認める。よって、文の内側と文の外側という術語を説明する必要が生じてくる。この

点に関しては以下の 2.1 と 2.2 を通して説明する。これは主に尾上 (2004) に基づく考え方を参考しながら、文内主題と文外主題という二つの考え方を紹介する¹。

2.1 主題を文の内部的成分とする考え方

一つ目の立場は、主題が文の内部的成分であると考えた立場である。この考えの基盤は、文の基本を形容詞文としている。よく例として挙げられる「雪は白い」という文の場合、述語として働いているのは「白い」という「あり様」そのものではなく、「白い」の裏面にある意味としての存在詞である。そして、「雪は白い」というのは、雪が「白い」という「あり様」をもって存在することになる。つまり、「雪は白い」という文は雪の「あり方」を語る文である。

つまり、形容詞文は「モノ」－「あり方」の関係によって成立するというように理解される。形容詞文から動詞文への分析は、広義の存在承認の概念のもとで行われる。つまり、動詞文においての「モノ」－「あり方」は広義の存在承認である。対象が過去においてどのような「あり方」で存在したか、あるいは現在どのような「あり方」で存在するのか、あるいは未来においてどのような「あり方」で存在するかの描写報告を示す。

(3) 花子は先月入籍した。

(3) の花子は、存在の認識の下でどのようなあり方で存在するかを語るという「主題－解説」である。ここで述べる主題が文の内部的成分というのは、主題が主語の典型的なあり方という感覚で捉えているからである。いわば、「主題－解説」として明らかに二項対立に現れた場合に、「主語－述語」という関係の本質のあり方であるとされる。つまり、(3) の文は本来のあり方は、「主語－述語」という関係で成り立っている。

¹ 尾上 (2004) では大きく三つの考え方を分けている。本文で挙げた文内主題と文外主題、もう一つは格成分プラス α の主題を設定している。(例文は筆者が提示したものである)

(1) a. 太郎は山手線で出勤する。

b. 今夜使う材料は買って来ました。

a. の主題は「が」格成分、b. 主題は「を」格成分の主題化である。

2.2 主題を文の外側の成分とする考え方

二つ目の立場は、主題が文の外側の成分であるとする立場である。その代表としては松下大三郎（1928、1930）、生成文法などがある。これらの研究では、主題は状況語に近いものという感覚で捉えている。つまり、主題は話の範囲を限定する要素として、「ーについて言えば」というような話題を設定する働きを果すとしている。この主題の考え方は、主語が相対的にはことがらの中の一項目であり、主題がことがらの外にあるというものである。この考え方を徹底させれば、主題文の基本的構造は〔主題〕－〔主語－述語〕になるのであろう。つまり、主語は叙述部の中にある成分であるのに対し、主題は叙述部の外にあって叙述部と対立する成分である。例えば、(4)の例文「雪は白い」の文は、この考えに基づいて文の構造をつくれば、次のようになる。

(4) 〔雪_iは〔e_i 白い〕〕

(Shibatani1990:294)

Shibatani (1990)によると、上の構造では述語が変項(e)を含む場合には、その変項と主題を結び付けることによって、主題と述語を関係付けることが可能である。つまり、主題と変項の関係は、主題とその述語の関係が保証するという感覚で捉えられているのではないかと考えられる。このことについては、三原(1994)でも、当時の考え方として主題の位置について次のように述べられている。つまり、三原(1994:191)は主題に特別な統語的位置を与えるべきという見解の背後に、主題の後続文命題からの独立という直感があるからであると述べている。三原(1994)のこの特別な統語的位置はただ単なる認識の問題に過ぎず、文の位置に結び付くという意味にならない²。しかし、本稿はこの特別な統語位置というのは、Shibatani (1990)が主張する

〔〔雪_iは〔e_i 白い〕〕〕のような構造における主題「雪」が存在する文の外側の位置を指すと考えられる。

以上の二つの考えの差は結局、文において主題はどこの位置に置いて考えるべきかという出発点からできたのではないかと考えられる。すなわち、主題を文内的成分とする

² 三原健一先生からのご教授による。

考え方は、形容詞文の裏面にある意味としての存在詞が述語の本当の意味であるとし、「主題 - 解説」の本質のあり方は「主語 - 述語」であり、主題は文内的成分「主語」である。一方、主題を外側の成分とする考え方は、主題とその後続の文は基本的に aboutness 機能によって結びついているとする。上記の二つの論を検討した結果、主題は主語と異なる成分であることが容認される。このように、この二つの異なる考えを生み出す原因は、その二項の間の関係を「モノ」－「あり方」の関係で見るか、aboutness 関係で見るかによるものであろう。

日本語は主題マーカの「は」の存在によって、主題についての研究がたくさん行われてきた。よって、主題の研究分野において、日本語は他言語と比べ遥かに研究が進んでいると言える。しかし、その一方で、主題の規定については未だに決着がついていない。主題を文内的成分あるいは文外的成分と捉える二つの考えを生み出すのは、「は」の両義性によると考えることができる。このように相対する立場が日本語研究において存在することの一つの原因として、二つの考えの主題がともに「は」で標示されるためと考えられる。つまり、どちらの考えに基づく主題でも「は」で表現される限り、区別することは困難なことである。そもそも本質的に、この二つの考え方による主題は同じものを指すのか。それとも別のものであり、たまたま「は」で標示されるために、同じものと混同されるのだろうか。

しかし、第2章の純粹主題、第3章の主語的主題、または第4章のコト名詞句の主題を筆者なりに分析した結果のもとで考えると、「は」は話し手と聞き手がこれから話す内容の話題を設定する働きを担うと捉えるべきである。そして上の、主題を文内的成分あるいは文外的成分と捉える二つの考え方は、「は」に立つ主題と後続命題の関係のもとに形成されたのである。もう少し述べると、文内主題は主題が主語として述語と結び付くという関係が捉えられる主題であるため、文内主題と名付けられる。一方、文外主題は[主題] - [主語-述語]のように、主題が文としての[主語 - 述語]の外側にあるから、文外主題と名付けられる。よって、主題と後続命題の関係は、主題が文の中に現れる位置を反映する。すなわち、主題の位置は主題に現れる名詞句と、後続命題の関係によって定められると考えられる。その際、主題は後続命題に対して異なる機能を持つ。主題は後続命題に対して異なる機能を持つと述べたが、それは主題と後続命題の間の関

係という視点から出された分析である。「は」についていえば、「は」は基本的に話の範囲を設定するという機能を維持すると考えられる。こうした捉え方は、主題が文の外側の成分という考え方とほぼ同じである。しかし、話の範囲を設定することは、文の内部的成分としての主題についても当てはまると考えられる。さらに、「主題 - 解説」の関係に成り立たない主題文は多く存在するが、主題の「は」が話の範囲を設定するという機能に基づいて主題文の説明をすれば、一貫性が得られる。主題の「は」のこの基本的機能を支持する論は、古くから Iwasaki (1987)、外池 (1989)、佐治 (1991) に見られる。

Iwasaki (1987:128) は「は」について、「the unifying function of WA can be stated as setting the scope for predication」と述べている。外池 (1989:51-75) では、「は」が命題が真であるための変項の範を規定する副詞的付加部であるとしている。そして、佐治 (1991) は「は」がその統括するものを、それに続く叙述の前提として話の場に提示し、叙述範囲をそれに限定すると述べている。

以上のように、「は」の共通点は話の範囲を設定し、後続命題の内容の前提になることである。

3. 「P は Q」の間にある関係と意味解釈

P と Q の間の関係は、日本語学においては「主題 - 解説」の関係、言語学においては aboutness 関係という用語が用いられる。主題に対する他言語の研究では、相対的には英語の用語「topic-comment」を用いる。筆者は「主題 - 解説」は「topic-comment」の訳語であると理解している。

3.1 主題 - 解説の関係

尾上 (2004) において、主語は文を文として成立させる判断の構造に即していえば、述語と大きく対立して文を実現するものである。つまり、人間の判断は原理的に「知られるべき対象」対「知る内容ないし働き」という二項構造をなすものであり、それを言語的に実現するものが文の主語対述語という二項構造であって、そのような判断の二項的な構造を最も典型的に実現するのが、「P は Q」という「題目 - 解説」の姿である、

という見方である。もちろん「主語 - 述語」関係という論理的格関係は、常に「題目 - 解説」という大きく二分された断続関係をとるものではない。しかし、判断というもののあり方は上記のように大きく二項が対立するものであるから、「題目 - 解説」として顕著に二項対立的に現れた場合にこそ、主述という関係の本質的なあり方が見えやすい、とするものである。従って「PはQ」であれば、「Pが」よりも「Pは」の形の方が主語として自然に見える場合（例えば形容詞文の場合）が多いのであり、その場合に「は」が特別な意味を付加していると思えなくても当然であるということになる。

尾上（2004）の「題目 - 解説」は、格関係のもとで成り立つ「主語 - 述語」の関係と深く関わっている。二項対立の「主語 - 述語」の関係は、題目 - 解説の関係で現れることが典型であるとし、具体的に取り上げられるのは形容詞文の構造である。この点に関しては、先述の益岡（2004）の「主題 - 解説」と属性叙述述語の密接な関係がある。

つまりPとQの間にあるこの「主題 - 解説」の関係は、「主語 - 述語」の関係に保証される。しかし、「PはQ」においてPはQの主語とは限らない。(5)のようにPはQの間に格関係がないが、「主題 - 解説」の関係の文として把握される場合がある。

(5) 魚は鯛がおいしい。

(5) は Li and Thompson (1976:468) は、最も自然な「主題 - 解説」の文であると述べている。その理由は以下で要約できる。日本語訳は筆者によるものである³。

1. 主題に当たるものと、主語に当たるものは容易に分けられる。
2. 主題と述語は選択的關係がない。
3. この文は、他の文から派生した文と考えられない。
4. この文は、主題言語には見当たるが、主語言語には見当たらない。

³ 1. The topic and the subject both occur and can thus be distinguished easily.
2. The topic has no selectional relationship with the verb.
3. No argument can be given that these sentences could be derived by any kind of "movement" rule from some other sentence type.
4. All TP languages have sentences of this type, no pure SP language do. (Li and Thompson 1976:468)

Li and Thompson (1976) の意図は、「主題 - 解説」の文が派生というより基底生成として考えた方が的確であるということである。(5) は Li and Thompson (1976) のように、「主題 - 解説」の関係に成り立つ文と考える研究が多数である。しかし、尾上 (2004) や益岡 (2004) の「主題 - 解説」に基づいて考えれば、(5) は主述関係に根ざす「主題 - 解説」ではないと言わざるを得ない。つまり、尾上 (2004) や益岡 (2004) の「主題 - 解説」は主題が主語として捉えられるが、Li and Thompson (1976) の「主題 - 解説」は上述のように明らかに主題と主語が別のものとして扱っている。本稿では、(5) のようなタイプの文は、X と Y の間に所有関係が捉えられる文とは異なる分類として扱う。本稿の第 2 章で設けた言語現象のテストフレームのもとで (5) を分析した結果、このタイプの文は「X」と「Y が Z」の間に主述関係がないという結論に至る。また (5) については、西山 (2003) は主題文ではなく指定文の一種と主張している。それに関しては第 2 章で詳しく述べる。本稿は (5) は主題文であるが、「主題 - 解説」の関係の文ではないとする。つまり、本稿は「主題 - 解説」の関係を、尾上 (2004) や益岡 (2004) と同じように捉える。「主題 - 解説」の関係を広く捉えたと、主題文全体を一律に扱うことができるが、日本語の主題の実態が分からなくなるためである。

端的に述べれば (5) は主題文である。しかし、主題のあり方は付加的な存在であり、話の範囲を限定するというような話題を設定する働きを果すという点で、後続の文の背景と言える。よって、「主題 - 解説」の関係を持つ主題文の主題とは大きく異なる。

3.2 aboutness の関係

aboutness 関係は、換言すれば *pragmatic linking* として説明される。すなわち、P と Q の関係は、社会の規定や会話に参加する話し手の知識に基づくものである。主題の記述に aboutness 関係を初めてもたらしたのは Kuno (1973) である。Kuno

(1973) では aboutness 関係が、主題と連体修飾節を付与すると主張している。Kuno (1973) は aboutness 関係の概念定義は明らかに指摘していないが、*relativization as theme deletion* の仮説のもとで「a relative clause must be a statement *about* its head noun」と述べている。

aboutness 関係を明確にするには、(6) と (7) の例文を通じて具体的に説明できる。

(6) 魚は、鯛がおいしい。

(7) 花、桜がいい。

(6) と (7) の主題は、後続命題の中の項を束縛する必要がないとされたが、主題が文の一つの成分として何らかの統語的機能あるいは意味的機能を担う。従って、主題はどの道にせよ認可されなければならない。この意味で (6) と (7) の主題は、aboutness 関係により認可される。

Saito (1985:317)⁴は日本語の主題は、命題の項をどれも束縛する必要がなく、その存在は aboutness 関係によって認可されると指摘している。

三原 (1994:230) は aboutness 関係について、文法的知識のみならず世界に関する知識をも内包する概念である以上、話者によって文法性判断に揺れが生じる隙間が多いに有り得ると指摘している。

以上をまとめると、aboutness 関係というのは簡明に言えば、語用論的なものである。aboutness 関係という概念は、連体修飾節と主名詞の関係には重要な役割を示す。これは主題文においても適用される概念で、P を Q と結ぶための最終的な手段である。

しかし、この aboutness 関係はすべての文には必要とされないという指摘がある。Saito (1985) では、移動と関わる主題は aboutness 関係ではなく、移動によりできた空範疇との束縛で主題が認可されると述べている。(6) と (7) のような基底生成の主題は、aboutness 関係により認可される。これについては、Kameshima (1990) でも似たような指摘が見られる。Kameshima (1990) は Kuno (1973) の aboutness 関係が主題と連体修飾節を付与するという仮説を批判し、aboutness 関係が適用できるのは、非限定的な連体修飾節と主題文だけであって、限定的な連体修飾と二重主語文 (double subjects) には適用されないことを主張した⁵。Kameshima (1990) は Saito と同様に

⁴ Saito(1985:317)では文頭の付加的位置の成分について次のように述べている。

1. NPs must be licensed.
2. An NP in an adjoined position must bind a variable unless it is licensed in some other way.

⁵“aboutness conditions do not freely license restrictive relatives and double subject constructions”(Kameshima 1990:256)

“aboutness are relevant only to topic-comment constructions and non-restrictive relative clauses”(Kameshima 1990:257)

Kameshima(1990)の分析は Muraki(1970)を基盤として行ったと考えられる。

(6) を例にあげ、この文は文頭の付加位置に基底生成する主題として Q と aboutness 関係で結ばれることを述べている。つまり、非限定的な連体修飾節と主題は aboutness 関係で認可されるが、限定的な連体修飾と二重主語文は移動の派生でできた空範疇の所に resumptive pronouns が現れることができるため、主題は Q と統語的な関係で結ばれる。

3.3 「は」と意味解釈

「は」を伴う主題文と意味解釈において、主題と対比のほかに、「は」を伴う主題文から条件や時間的順序が捉えられることがある。条件と主題との関係においてよく知られるように、古典語の条件は「は」で表される。こうした「は」と条件性のつながり、または「は」と条件文の前件の類似性は以前から指摘されている。Haiman (1978) では主題と条件を表すマーカーが同一の形式もあれば、異なるものであっても、ある場合では相互にパラフレーズすることができると記述している。条件と主題の関係は従来の研究ではある共通性を持ち、どちらかを基本、どちらかを派生とするかについて議論されてきた。三上 (1960) で指摘されたように、条件法と提示法は同じ意味を表すことがある。以下は「は」が条件的に解釈される文である。

(8) 新聞を読みたい人は、ここにありますよ。 (三上 1960:156)

(8') 新聞を読みたければ、ここにありますよ。 (同上)

(9) 二辺の等しい三角形は、(その) 二角も等しい。 (三上 1960:157)

(9') 三角形の二辺が等しければ、その二角も等しい。 (同上)

「P は Q」は条件文「P であるならば、Q」の変形として考えられるだけでない。また、条件文の継起性の有無は、前節の述語の語彙的アスペクトに左右されるのであり、それが条件文一般の時間的性質と相互に作用し、条件文全体の時間的特性を作り上げていくのである (ヤコブセン 1990)。

Kameshima(1990)の例文は Muraki(1970)より借用している。

以上を総合すると、「は」は条件節の前件と同様、事態の前項として後項と結びつくことがあり、「PはQ」は条件・帰結との関連性を指摘されることが多い。その背景には、PがQに先立って先行固定されたのち、Bが認定されるといった、事態認識の連鎖が観察されることがある。本稿は、「PはQ」には事態の時間的前後が潜んでいることを強調したい。そして、時間前後と因果解釈という概念は連続的に捉えることができる。

有田(1992)では、このような主題文の条件的解釈は構造から出てくるものではなく、(10)で見られるように条件的解釈は談話と密接に関わるとしている。

(10)A: 新聞を読みたい人いますか。 (有田 1992:114)

B: はい。

A: たくさんいますね。新聞を読みたい人はここにいます/*新聞を読みたければここにいます。

(10)には条件形式が適用されないことから、文脈上で解釈が左右されることは明らかである。さらに、条件の接続助詞「なら」が主題的に解釈される文を見る。

(11) 男なら男らしくすべきだ。

(11') 男は男らしくすべきだ。

(11)は「男」を一般的に捉える場合は(11')の主題文に解釈されるが、(11)の「男」を個別的に捉え、「(君が)男なら」のように解釈されることもできる。こうした二つの解釈が可能となるのは、有田が指摘するように談話と関わるためであり、談話における setting 機能を主題と条件の共通点としている。だが、主題と条件の根本的な共通性ではないと考えられる。

本稿は「は」の条件的解釈は、主題文に内在する性質から導かれるものであることを提起したい。「PはQ」は、Pの主題がQの解説に先立って先行される部分である。つまり、PとQの間には生起の順序がある。同様に、条件文にも事態生起の順序が観察される。主題文と条件文は事態生起の順序が共通していることから、主題的解釈と条件的

解釈のどちらかになるかは、文の性質や文脈によって左右されると考えられる。この文の性質による条件的解釈、堀川（2006）に見られる。

(12) この洗剤は汚れがよく落ちる。 (堀川 2006:44)

(13) この洗剤を使えば、汚れがよく落ちる。 (同上)

(12) は (13) のように言い換えられる。それは主題のモノがことがらを背負ったモノであることに要因がある。堀川（2006）は (12) にある関係はモノとコトの関係ではなく、(13) のようにコトとコトの関係で認定できる文と述べる。そしてこのように解釈できるのは、構文の成立メカニズムが重要であり、当該の文の後件が自動詞文あるいは非意図的な他動詞文に限られる要因である。(12) は (13) の「この洗剤を使えば」の事態を契機に、「汚れがよく落ちる」の事態を生起させるのである。

以上の堀川（2006）の分析は、「P は Q」に事態の生起の順序があることを前提にしていると考えられる。そして、文の性質についていえば非意図的な文であることから、条件的に解釈されやすくなる。主題文と条件文に共通点があるとすれば、それは事態生起の順序である。どちらの解釈になるかは、文の性質や文脈によるものであることに言及を留めたい。

4. 主題の生成

主題の生成については、昔から現代に至るまで議論されてきた重要な問題である。言語学において、主題の生成は移動と基底生成という二つの考えがある。三原（1994）によれば、基底生成の分析を取るのは久野（1973）である。それに対し、移動分析を支持するのは Kuroda（1987,1992）である。Kuroda（1992）の移動分析の根拠は「太郎が昨日その本だけは読んだらしい」のような文である。この文において、「その本だけは」は元位置（対象の位置）のままだることが可能だからである。この Kuroda（1992）の移動は主題句自体が移動するという前提があるが、Kuroda（1992）と同じく移動分析を採用する Imai（1983）で行われる分析は空演算子の移動である。

さらに Imai (1983) に加えて、Kizu (2005) も空演算子の移動を採用している。Kizu (2005) 自身は、空演算子の移動分析を採用して日本語の分裂文と主題や関係節の関係を分析している。この節では、主題の生成について以下に順に沿って見ていく。

久野 (1973:158) は主題と関係節との類似性として「関係代名詞とされる名詞句が、普通の格助詞を伴った名詞句ではなく、関係節の主題、すなわち「名詞句+は」である」という仮説を提示する。その際、主題は関係節化の派生で消去される。

- (14)a. [その本は [太郎はその本を読んだ]] 本 (久野 1973:164)
b. [その本は ø 太郎が読んだ] 本
c. [ø 太郎が読んだ] 本

(14) から分かるように、久野 (1973) では関係節の主名詞と主題が移動によってではなく、D 構造から基底生成する要素である。久野 (1973) は主題に移動が関わらないという主張の重要な根拠として、「複合名詞構成要素の移動制約（以下より CNPC で表記する）」が日本語の関係節に適用しないことを挙げている。

- (15)a. [少年が飼っていた犬] が死んでいた (こと)。 (久野 1973:155)
b. [[ø 飼っていた犬] が死んでいた] 少年。

CNPC は複合名詞句の中の要素を、その名詞句の外に摘出することはできないという制約である。さて、(15b) の「少年」は複合名詞句から摘出された要素である。つまり CNPC は (15) に適用しないことになる。久野は (15b) を根拠として、日本語の主題と関係節は移動と関係がない構造類であることを主張している。

一方、主題は移動に関わるという考えを示す研究については、少なくとも以下のよう

にまとめられる。

Kuroda (1987) では tough 構文を根拠として、二重主格構文と主題文が移動から派生されるという考えを示している。tough 構文の深構造は以下の (16) になる。

- (16)a. 正雄にとって [正雄 その郵便局から 小包を 送る] やすい。

b. NP_1 nitotte [e] [NP_1 (NP_{2-p}) (NP_3) V] A

(Kuroda1987:274)

(16b) において埋め込まれた NP_1 は、V の動詞が A の主節述語（やすい、にくい）と膠着した後に Equi⁶によって消される。 NP_2 は斜格の NP で、 NP_3 は埋め込み節の動詞の目的語であるが、格標示はされていない。 NP_2 か NP_3 かいずれかが移動すると、移動される NP はガ格を与えられる。その際、移動の着地は A' 位置に限られる。

(17) は (16b) の tough 構文である。

(17) 正雄にとって小包がその郵便局から送りやすい。

主題文は tough 構文と同様に移動に関わる文として扱われ、以下の (18b) の主題は二重主格構文の (18c) の NP が移動により S' に着地、主題化されたものであると理解できる。なお、(18a) は (18b) の構造を表す。

(18)a. [日本は [[e] [心理学者がその会に来た] S] S] S' (Kuroda1987:274)

b. 日本は心理学者がその会に来た。

c. 日本が心理学者がその会に来た。

Sakai (1994) では久野 (1973) とは異なり、主題と関係節には移動があることを示している。(19d) は一見したところでは名詞句の「ジョン」が CNP の「着ている洋服」から摘出される要素であるが、(19abc) から分かるように名詞句の「ジョン」は (19b) の段階で「の」に変換すると、(19c) の段階で主語化される。この段階ではすでに CNP の外側に摘出されることに注意すべきである。つまり、(19d) で関係節の主名詞化する名詞句は依然 CNP の中になく要素なので、CNPC に違反するという議論は俎上に上らない。

(19)a. [NP [S ジョンが着ている] 洋服が] 破れていた。 (Sakai1994:182)

⁶ Equi-NP deletion rule is a rule that deletes an NP in the Matrix sentence if it is identical to the subject of the Complement sentence (Josephs1976:308).

- b. [NP ジョンの, [S t_i 着ている] 洋服が] 破れていた。
- c. ジョンが_i [NP t_i [S t_i 着ている] 洋服が] 破れていた。
- d. 着ている洋服が破れていたジョン。

こうした Sakai (1994) に類似した指摘は、日本語学の中でも見られる。菊地 (1988) では日本語の主題化は島制約に従っていないということではなく、島制約を破っているのは、以下で詳述する主語化であると述べている。この菊地 (1988) の指摘は Sakai (1994) と一致するといえる。つまり、Sakai (1994) の観察によれば、主題は主格から派生できるとされている。

日本語学の中では、主題の生成に対して、三上 (1960) の「は」の代行をはじめ主題化という言い方が広く用いられる。日本語学における主題の派生は、基本的に格成分が主題化する場合を示す。三上 (1960) の有名な「の」の代行は、頻繁に議論されてきた。「の」の代行の考え方を受け継ぐ立場があれば、それに反対する立場もある。順に検討を加えていく。

杉本 (1990) と野田 (1996) では、二重主格構文の最初の名詞句が主語化、主題化を通るとされている。すなわち、(20a) から (20c) に至る途中に、(20b) の主語化の段階が存在すると指摘されている。

- (20a) 象の鼻が長い (こと) 。 (野田 1996:32)
- b. 象が鼻が長い (こと) 。
- c. 象は鼻が長い。

(20c) は (20a) から派生するという説は、近年は採用されない傾向にある。まず、第一に、格助詞の主題化と比較すれば、連体格「象の」が主題化することは不自然な話である。北原 (1981) では、(20c) を (20a) ではなく (20b) からの派生として採用している。よって、連体格は連用格の「は」に変換することは文法上受け入れがたい。さらに、西山 (2003:208) も「の」の代行に反対する立場に立つ。西山 (2003) は「X は Y が Z」において側面、部分、身内などの Y は Z と結び付けるフックとしての機能を果たすとしている。つまり、X と Y の間に潜んだ関係を形式化する必要がない。さらに、

Yは必ずしも必要とはされない。場合によっては、次のようにYを省略することができる。

(21) 日本人は性格がおとなしい。

(21') 日本人はおとなしい。

以上のように、主題は「の」から派生するという分析には無理があり、主語の「が」格から主題化するという分析の方が受け入れやすいと考えられる。なお、「が」格からの主題化はもちろん、「を」格や「に」格からの主題化もある。

主題の生成は、一貫して主題化という概念で説明されるものではないことは前から認識されている。日本語学において、先に取り上げた菊地（1996）は、包含型の主題は主題化ではないことを明確に述べている。丹羽（2006:97-99）も「この匂いは、ガスが漏れているに違いない」のような破格的な場合や、「魚は鯛がいい」のようにYがXの構成要素の関係にある場合は、題目化を想定しにくいと指摘している。この際、YがXの構成要素であるというのは、YがXの集合の構成要素という意味であり、鯛が魚の集合の構成要素になるという関係を持つ。このような主題化が把握できない主題は、基底生成の主題と考えられる。日本語において基底生成と思われる主題は多数ある。

さらに、これまでは主題は、文内の成分が文の前提の位置を与えられた時に主題化したものとされてきたが、そうではない場合もある。山岡（2000:42-46）では、(22)と(23)の「私」は文内の項の主題化とは異なると指摘した。

(22)a. 私はうれしい。

(山岡 2000:42)

b. ?私がうれしい。

c. 私がうれしいのだ。

(23)a. 私は息子の合格がうれしい。

(山岡 2000:43)

b. ?私が息子の合格がうれしい。

c. うれしいのは私だ。

少なくとも、(22b) と (23b) は総記の解釈にしても、それぞれ(c)のようにした方が自然になってくる。(22a) と (23a) の「私は」は、内的経験空間⁷で命題の一部として言語化されることができず、常に情報構造上の「前提」に相当する。つまり、「私」は後続命題内の成分ではなく、常に後続命題の背後にあるものである。よって、主題化の結果としての主題ではなく、主題という領域は最初から確保されているということになる。このことに依拠して、主題の省略可能性に言及することもできる。

5. まとめ

本章では、次章以降で取り上げる個別な分析に対応するために、日本語の主題についての様々な観点をまとめてきた。主題についての研究は山積するほどあるが、本稿が分析対象とした主題に関係がある内容について論じた。

まず、主題は基本的に文の前提として理解される。しかし、主題は一律のものではないと考えられる。これは文の内部的成分と文の外側の成分という、主題に対する見解から認められることである。文の内部的成分としての主題には「主題 - 解説」の関係と密接な関係があるが、「主題 - 解説」の関係の捉え方によって、主題の定義は異なってくることを確認した。この点に関しては第3章で検討することにする。

また、本章では主題を標示する「は」の意味解釈には主題、対比のほか条件的解释もあることも述べた。「は」の主題文の条件的解释は、「PはQ」においてPとQの間にある事態の時間的前後と関わる。この点に関して第4章で述べる。さらに、この章では扱う主題文は形式上は同じであるが、意味解釈では異なる主題文であることも言及した。最後に、主題は最初から文の前提として基底生成されるという説が広く受け入れられていることを総括した。これについては、主題が最初から文の前提として基底生成されることに関連して、本稿の第2章で述べる。

⁷ 内的経験空間とは、発話者の存在とともに、デフォルトなあり方において、発話者の主観的かつ個別的な心的状態を経験する心的空間である。さらに内的経験空間は何らかの表現によって導入されるものではなく、もともと発話者の存在とともにデフォルトに存在するものである。

感情形容詞が述語として発話された時に、感情形容詞の意味を構成する一種の意味素性である主観性が、その発話を内的経験空間内に位置させる役割を果たす。その結果、主観性と個別性とが結び付いて私性を生じる。つまり、内的経験空間において発話が生成されていることが無条件に含意される（山岡 2000:38）。

第2章 純粋主題

1. はじめに

本章では(1)のような主題は純粋主題とし、主題の名詞は付加的成分であり、文の外側に属する主題と主張する。(1)は菊地(1995)から借用したものである。

- (1) a. 魚は、鯛がおいしい。
- b. 花は、桜が綺麗だ。
- c. ピッチャーは、松坂が投げている。
- d. 酒は、日本酒がいい。
- e. 日本語学科の学生は、女子学生が多い。
- f. 紙は、再生紙が使われている。
- g. 今、みかんは、いい(おいしい)ものが出回っている。
- h. 立派な教授は、Aさんがいる。

(1)は一種の「XはYがZ」構文として扱われている。(1)のような「XはYがZ」構文においてはXとYが包摂関係をもつ文である。第1節では本章が設定するテストフレームから、XとYの間に包摂の関係が前提されるという成立条件のみならず文における言語現象からもほかの「XはYがZ」構文と異なる点が観察できることを述べ、文における様々な言語現象から(1)のような主題は付加的で文の外側で固定される主題であると主張する。さらに、付加的で文の外側にある主題において純粋主題のほかに状況主題もあることを述べ、純粋主題と状況主題が一緒に現れることができる。つまり、日本語には一文に二重主題¹が認められることがあるということである。状況主題と二重主題文について本章の第4節と第5節で述べる。

2. 先行研究

¹ 本章は一文に二つの主題がある文に限定する。

本章で扱ったこのような構文は日本語学や生成文法の観点から様々な議論がされてきた文である。日本語学においてこれに関する詳しい分析には野田（1988）や菊地（1995、1996）などがある。野田（1988）と菊地（1995、1996）ではこれらの文を一貫して「～は～が・・・」として分析を行ってきた。本章で取り上げる先行研究は次章以後でも少し参考することになるため、詳細に参考する。

2.1 野田（1988）

野田（1988）において「～は～が・・・」構文はその構造と機能のもとに次の6つに分類された。

1. 「この本は父が買ってくれた」型

「が」「を」「に」などの格成分、あるいは格助詞を伴わない「きょう」「去年」のような時の成分が主題化された「～は～が・・・」構文。

2. A「象は鼻が長い」型

「が」の連体修飾成分「の」が主題化された「～は～が・・・」構文。

B「カキ料理は広島が本番だ」型

名詞述語「だ」の連体修飾成分「の」が主題化された「～は～が・・・」構文。

3. 「辞書は新しいのがいい」型

「[連体修飾成分] + [名詞]」の[名詞]の方が主題化され、その[名詞]が出て行ったあとに「の」「もの」などが入る「～は～が・・・」構文。

4. 「この問題は解くのが難しい」型

節の中の格成分が主題化された「～は～が・・・」構文。

5. 「この花はいいにおいがする」型

「気づく」のような「が」という形の慣用句を含む「～は～が・・・」構文。

6. 破格型

1から5のようなきちんとした論理関係に戻せないような「～は～が・・・」構文。

野田（1988）の分類は、基本的に「は」を伴う名詞は5と6を除きもとの成分の中から主題化するという見方からできたと考えられる。本章が分析対象とした純粹主題は

破格型に属する。この破格型は野田（1988）の言葉で論理関係に戻せない主題の「は」である。

2.2 菊地（1995）

菊地（1995）は「は」構文のタイプを大別して、4つの分類に分けたが、本章は1と2の分類だけをここで詳細に紹介する²。

1. 基本型の「は」構文は「X」が述部または述部中の語句に対して格関係か「Xの」に係る関係を持つ構文である。

基本型の格対応型： 一般に、無条件に成立する。（2）は「が」格あるいは「を、に」格などの主題化、（3）は「が」格目的語の構文である。

- (2) a. その本は、Aさんが書いた。
- b. この駅は、特急が止まる。
- c. 今日は、お客が来る。
- d. このクッキーは、バラのかおりがする。
- (3) a. Aさんは、パソコンができる。
- b. あの人は、妻がある。
- c. うちの研究室は、パソコンが足りない。
- d. あの子は、パソコンが好き。

基本型の「の」対応型： このタイプの述語は〈性質・状況型〉である。述語名詞句中の「Xの」の主題化の場合、述語が意味的にXの重要な側面を表す。

- (4) a. 象は、鼻が長い。

² 菊地（1995）の3と4の分類は変種型の「は」構文と特定類型の「は」構文である。これについての詳細は菊地（1995）を参照されたい。

- b. Aさんは、奥さんが入院中だ。
- c. カキ料理は、広島が本番だ。

基本型の従属節対応型： (5) のように述語は〈性質・状況型〉である。

- (5) A画伯は、描く絵がよく売れる。

2. 包含型の「は」構文は「X」が述部中の語句に対して包含関係を持つ文型である。

包含型の選び出し型： (6) のようにこのタイプは述語がプラス評価の語や「多い」などの語で、「X (Xを構成するもの) の中から Y を選び出す／特筆に値する」という趣の文である。

- (6) a. 酒は、日本酒がうまい／一番だ。
- b. 日本語学科の学生は、女子学生が多い。

包含型の同定型： (7a) のように、「(その) 紙は再生紙だ」というのと事実上同じような機能を果たしているということである。そこで、これを〈同定型〉が名付けられ、「Xの可能性／ありようとしてありうるものの中から、(実際には) Yが該当する／した」文である。

- (7) a. 紙は、再生紙が使われている。
- b. 試合開始は、一時が予定されている。

包含型の状況説明型： 選び出し型でも同定型でもないが、包含型で述部全体が X の状況について物語る機能をもつ場合には、自然な文になる。

- (8) a. 今、みかんは、いい (おいしい) ものが出回っている。
- b. ジャイアンツは、桑田が投げている。

包含型の細分並立型：この文は述部が「X」についての（十分な）情報として成り立つことが保証されない。（9）（10）のように「X」構成要素のうち、その「Y」（「A君」や「日本酒」だけについて、いわば恣意的に取り出して述べたところで、「X」全体（「今年の学生」や「酒」について然るべき情報を述べたことにはならないからである。もう一つ「YがZ」を付け加えて並立すると、ずっと自然になる。

- (9) a. あのクラスは、A君が北海道の出身だ。
 - b. あのクラスは、A君が北海道、B君が九州出身だ。
- (10)a. 酒は日本酒が二万円売れた。
 - b. 酒は日本酒が二万円、洋酒が五万円売れた。

(11) は包含型のほかである。

- (11)a. 立派な教授はAさんがいる。
 - b. 留学生は十人が来た。

菊地（1995）では「は」構文の概観の中で「包含型」の「は」構文を「は」構文の一つのタイプとして立てた。「包含型」の「は」構文の代表例として「魚は鯛がおいしい」文が挙げられ、「魚」は「鯛」を含むという包含関係によって「魚」と述部が成り立つというケースである。菊地（1996）では（6）から（11）までは「は」の主題化として捉えていない。それに対して、（2）から（5）までは格助詞や「の」の主題化の文であると述べている。

2.3 丹羽（2006）

丹羽（2006:85-114）も「魚は鯛がおいしい」のような文は類種関係（または、包摂関係、包含関係）にある文であり、「PはQ」においてQである「YがZ」が主体の「X」と属性・状況の関係を成すという題目文である。つまり、丹羽（2006:2）の「PはQ」は、Pを先に提示し、そのPがいかなる属性を持つか、いかなる状況にあるか、いかなる状況を望むかということを、Qと述べる文である、のように定義されており、

どうしたか・どうであるかという主体と属性・状況の関係こそ「PはQ」の成立するための条件であるとしている。丹羽（2006:85）はこの題目文の定義の下で類種関係の文と所属関係の文を同じ扱いとしている。

2.4 言語学の場合

Kuno（1973:250）では「魚は鯛がおいしい」のような文はそれに対応する無題文が存在しないと述べる。つまり、それに対応する「XがYがZ」構文がないと言い換えられる。Kuroda（1987:257）では、（12a）の「魚」の主題は「*魚が鯛がおいしい」のような焦点の解釈を受けず、非文法性は意味論の問題であると述べている。本章ではこのタイプの主題は焦点の解釈を受けないことを具体的なテストフレームで証明する。

Saito（1985:第4章）では、主に主題とかき混ぜの関係について議論しているが、（12）についても若干述べている。Saito（1985）では移動か基底生成かという観点において主題を分析した。つまり（12）の主題は、後続命題の中の項をどれも束縛していないのである。従って、このような文の主題は移動ではなく基底生成したものである。基底生成は文の最初の段階から存在するという意味が取れる。つまり、文の主題は既に固定されているとも言える。

(12)a. 魚は、鯛がおいしい。[IP 魚は [IP 鯛がいい]]

b. 花は、桜がいい。

3. 文の外側とは

純粹主題は本節で設けるテストフレームの順に追って見れば、述語と意味的关系を示さない主題のことである。さらに、この主題は主題化、移動、さらにほかの文から変形した主題のタイプではない。この点において本章の純粹主題は Tateishi（1994）の Pure topic に似ているといえる。つまり、Tateishi（1994）の Pure topic は文法機能を一切担わない主題である。本章も Tateishi（1994）に従ってこのタイプの主題を純粹主題と呼ぶ。しかし、分析方法は Tateishi（1994）と異なる。純粹主題は述語との意味的关系において文の外側に存在する主題であると主張する。文の外側に定義を与え

ると、文の外側は述語と意味的關係がない領域である。そして、文の外側に属する成分とは、述語が表す内容が成り立つには不必要で、付加的な存在である。純粹主題は付加的な存在で「は」はプラスアルファである。この類の主題は付加的な存在で、述語に必要とされないことは先行研究にも見られる分析と考えられる。野田（1988）の論理關係に返還できないことや Saito（1985）が主張した項とは無關係であることなどと同様の主張である。この主張は以下のテストフレームで確認できる。

3.1 が格への変更不可能なこと

まず (1abc) を代表例とし、「X は Y が Z」構文を「X が Y が Z」としてみると、以下のようなになる。

- (13)a. *魚が、鯛がおいしい。
- b. *花が、桜が綺麗だ。
- c. *ピッチャーが、松坂が投げている。

(13) は「が」格に化したことによって非文になる。別の言い方をすれば (13) のような「X は Y が Z」は「X が Y が Z」を持たないというように言える。「X が Y が Z」の成立条件に関する重要な研究には、菊地（1996）、天野（2002）、丹羽（2006）がある。菊地（1996）では「X は Y が Z」と「X が Y が Z」との違いは、「は」と「が」の違い、例えば「Aさんは来た」と「Aさんが来た」との違いと並行的であり、「X が Y が Z」の成立条件は「が」の使用条件を満たすことである。菊地（1996）の「が」が生起できるのは、「中立叙述」の時か「解答提示」（いわゆる「総記」）の時かのいずれかである。(13)の主題名詞句は「が」を取ることができないことから、菊地（1996）が提案する「が」の使用条件は(13)に適用できない。つまり、本章の純粹主題はそもそも「X が Y が Z」の形にならないというように解釈できる。

天野（2002:第4章）では、「X が Y が Z」構文（天野の用語では多主格文）は、単主格の性質描写文の基準的意味「性質の主体が性質を所有する」という意味に対応づけて、「性質の主体「X」が性質「Y が Z」を所有する」という意味に再解釈される文で

ある。つまり、天野（2002）の「XがYがZ」構文の「X」は性質を表す「YがZ」の主体であり、性質の主体と言える。

また、丹羽（2006:104）ではXと「YがZ」の間に主体と属性・状況³の関係が把握できる場合、その関係をそのまま表したのが「XがYがZ」であり、その関係を題述関係として表したのが「XはYがZ」であると叙述している。この丹羽（2006）においても「X」は属性・状況の主体である。これは天野（2002）と同じ見解と言える。

天野（2002）と丹羽（2006）の見解をもって考えれば、「Xが」は「YがZ」という述語部分の主語である。（13）の「Xは」は「Xが」にならないから、「X」は「YがZ」の主体たる主語ではないというように帰する。つまり「X」は述語に必要されない成分である。「X」に相当する「魚」「花」「ピッチャー」はどんな性質・状態を持つかということ、鯛がおいしい、桜が綺麗、松坂が投げているというふうに理解して

「魚」「花」「ピッチャー」自体の性質・状態を述べる文であることが認めがたい。つまり、（13）が成り立たないのは、例えば（13a）では「X」である「魚」を「YがZ」である「鯛がおいしい」の主体としての解釈ができないからである。しかし、

（13）と同類の（14）に対して丹羽（2006:87）では、次のような分析を行った。

（14）a. 鯨は、シロナガスクジラが一番大きい。

b. *鯨が、シロナガスクジラが一番大きい。

（14a）の「鯨」と「シロナガスクジラ」の包摂関係（あるいは類種関係、上下関係を重視し、「シロナガスクジラ」の属性を述べることで、その上位にある「鯨」の属性を述べることになる。（14b）が成り立たないのは「鯨」が「シロナガスクジラが一番大きい」に当てはまるものとして選ばれる関係が成り立たないのである。それは、「シロナガスクジラ」が「鯨」に包摂されるからこのような選択関係が成り立たないからであると説明している。つまり、（14a）は主体と属性・状況の関係を持つ文として扱われているが、（14a）を（14b）に置き換えることができないのは、別の要因、つ

³ 「花瓶が割れた」において「花瓶」がある時点で「割れた」という変化が生じた存在であり、「割れた」という変化が一時的な在り方である。これを「状況」と呼ぶ（丹羽2006:17）。

まり選択関係によるのである。しかし、これは上の下線を引いた丹羽（2006）自身の分析と矛盾しているように読み取れる。

本章は純粋主題文は天野（2002）と丹羽（2006）が指摘した主題・解説の文と異なると考える。この点に関しては第7節で述べる予定である。先になぜ「が」格にならないかという問題を考えてみることにする。「が」格の用法において2つがあることはよく知られていることである。「PがQ」の「Q」が恒常的状态・習慣的動作を示すか、あるいは一時的な状態を示すかによって「が」の用法は決まる。純粋主題の述語も恒常的・習慣的動作または一時的状態であるが、「が」格を取らない。従って、純粋主題の名詞は、述語の表す動作・存在・状態の主体が誰であることを中立的に示す「中立叙述」と、その述語の主体に相当するものが、それだけであることを示す「総記」といった用法にならない。言い方を換えれば、純粋主題には述語の主体としての解釈が得られず、述語の「YがZ」とは意味的に無関係である。

3.2 焦点化不可能

分析の便宜上、(16)の文と比較して説明する。(16)は野田（1988）の「象は鼻が長い」型、菊地（1995）の基本型の「の」の対応型の文である。(16)の主題文は(15)と異なる主題文であるため、詳しい分析は本稿の第3章で扱う。

- (15)a. *鯛がおいしいのは、魚だ。
- b. *桜が綺麗なものは、花だ。
- c. *松坂がなげているのは、ピッチャーだ。
- (16)a. 鼻が長いのは、象だ。
- b. 性格が朗らかなのは、太郎だ。
- c. 調子がいいのは、阪神だ。

(15)と(16)のような文形式は日本語学では倒置指定文と呼ばれるが、言語学では(擬似)分裂文と呼ばれる。どちらもコピュラ文「PはQだ」の形を成すので、本稿では、このような構文はコピュラ文の一種類としての倒置指定文と呼ぶことにする。そして倒置指定文「PはQだ」の文の意味解釈は、例えば(16a)は、「鼻が長い」とい

う性質を持つものが何かというと、それは「象」で指定するというようになる。この意味解釈から、「鼻が長いのは何か」という疑問に対し得られた答えは(16a)である。従って(16a)の「象」は焦点として解釈される。(16b,c)も同様の分析で与えられる。

では、倒置指定文の文形式に換えることができない(15)に対してどのような説明が当てはまるかという、第一、例えば(15a)の「鯛がおいしいのは」の「鯛がおいしい」の部分の意味は充足している。つまり、「鯛がおいしいのは何か」という疑問をたてる必要性はなくなる。疑問詞(何、誰、どこなど)の機能は文の意味において欠落した部分を補う成分を特定することである。従って、(15a)は、当然の結果で「鯛がおいしい」という性質をもつものが何かというと、それは「魚」であるというような解釈は得られないのであるし、「魚」は(16a)の「象」と違って「鯛がおいしい」という性質をもつものを指定する機能を持たない。また、焦点としても解釈できない。

3.3 連体節化不可能

本節もほかの類の「XはYがZ」と比較して分析を行う。(18)は(16)と同様野田(1988)の「象は鼻が長い」型、菊地(1995)の基本型の「の」の対応型の文である。これらの文を連体節にすると、(18)のようになる。

- (17)a. *鯛がおいしい魚。
- b. *桜が綺麗な花。
- c. *松坂が投げているピッチャー。
- (18)a. 鼻が長い象。
- b. 性格が朗らかな太郎。
- c. 調子がいい阪神。

先に(18)を見よう。(18)は「X」に当たる「象、太郎、阪神」が述語または述語中の語句に対して「Xの」に係る関係を持つ文である。それゆえ、例えば、(18a)は「鼻が長い」の連体節と「象」の主名詞の間に意味を関係付けることが基本的に可能である。

それに対して、(17)は基本的に連体節化が不可能である。主名詞は、述語と直接意味的關係を担っていないのは事実である。連体節になるか否かという観点から、(18)の主名詞は、連体節を受けるが、(17)の主名詞は、連体節を受けない。(18)の連体節は主名詞のあり方を表しているが、(17)はその解釈が基本的に難しい。寺村(1992)で指摘したように我々は修飾する連体節とそれが修飾する主名詞との関係を考えようとする過程を通じて連体節の意味を理解する。(17)は我々の理解を超えると文がダメな文になるのであろう。しかし、ここで言えることは、(17)の連体節は主名詞の特徴叙述や情報付加ではない。(17)がダメなのは、名詞に問題があるという指摘がある⁴。「X」と「Y」は上下関係を持つ場合、YがXの性質や特徴を述べることができないのである。(17)と(18)の説明はこれらに対応する主題文にも適用できると考えられる。

3.4 まとめ

以上のように純粋主題はすべてのテストフレームに不合格である。これらのテストフレームは意味論的なものであるが、文の外側の位置とは一見したところで無関係である。述語に必要とされる成分の位置はその述語との意味的な関係の密接度と平行すると考えられる。純粋主題は意味論的なテストフレームから付加的成分であることには違いがない。ここで付加的成分であることに注目する。付加的成分とは、動詞の表す動き・状態・関係の表現・完成にとって、不必要・付加的成分である。付加的成分の中には大きく分ければ、述語にかかるもの、例えば、手段・道具の「で」格や時間と場所を示す状況成分がある。状況成分は基本的に文全体にかかるものである。状況成分は文が成立する背景を示す成分であるが、文が成立するには不必要で、付加的成分としても考えられる。状況成分は(19)のように基本的に文頭または文頭に近い位置にある成分である。

- (19) 2002年、日本政府は大胆な措置を講じて、日本における電気通信の規制体系の根本的な改正を求めた。japan.usembassy.gov/j/p/tpj-jp0260.html

⁴ 詳細は西山(2003:236)を参照されたい。

「2002 年」は文全体にかかるという機能を持ち、文のもっとも左側にあるのである。本章が 3.1 節から 3.3 節まで用いたテストフレームは仁田（1993:7）の言葉を借りれば、形式的な統語的なテスト手段のような装いを取ってはいるが、見かけほど形式的なものではなく、意味論的な判定に大きく寄り掛かっている、ということである。しかし、上でも論じたように少なくとも、純粹主題は文中の特定の位置に反映される。（19）の例もそうであるが、純粹主題は基本的に述語とは遠いところにあり、文頭に寄っている。つまり、ほかの付加的成分と似た側面を持っている。しかし、主題であるから、文の左側または文頭にあることは前提であることから、他の主題とはどこにも違わないように見える。しかし、純粹主題は後続命題に対する関係においてテストフレームからも見られるようにほかの「XはYがZ」構文の「X」と異なると考えられる。純粹主題の位置や後続命題に対する関係について状況主題と共に次で考察する。

4. 状況主題

本章では純粹主題の特徴を明らかにするために、他の付加的成分と一緒に検討する手段を取る。付加的成分として捉えられる時間と場所を表す成分を分析対象とする。時間と場所を表す成分は状況成分である。

4.1 状況成分

状況成分は事態が成り立っている時間的・空間的な背景を示すもの、一場面を提示するもの一である。つまり、動詞や現象の成立そのものの外側にあって他の格成分が項として動詞や現象の内的成分であるのに、それが動詞の内部に含まれないことが多い。状況成分が外的背景を示すことによって、動詞や現象に必要とされることが少ない。状況成分と他の格成分との位置関係は南（1993:54）の（表 1）から分かるように文頭に近い位置にあるのである。（20）のように時間と場所の状況成分は「が」格成分より文頭に近い位置にある。

(表 1)

呼びかけその他	陳述副詞「一部」	ハ	時修飾語	場所修飾語	ガ	カラ	二、ト	ヲ	様子・程度・量	動詞	(サ)セル	(ラ)レル	ナイ	タ・ダ	ウ・ヨウ・ダロウ	ワカノ	ヨ	ナ ネ
---------	----------	---	------	-------	---	----	-----	---	---------	----	-------	-------	----	-----	----------	-----	---	--------

南（1993:54）の表を簡単に改定したもの。

(20) a. 門の前に車が止まっている。

b. あした、会議が開かれる。

南（1993）は、（表 1）に示したように「は」と時間と場所を表す状況成分は「は」の方が外側に、状況成分の方が内側にあるという位置関係を持つという主張するのであるが、（21）のように時間の状況成分は「は」の前に前置されることがある。（22）はその反対の例である。

(21) a. 昨日、太郎は東京に行った。

b. ある日、ぼくはエーズと出会った。

(22) a. 太郎は、昨日東京に行った。

b. ぼくは、ある日エーズと出会った。

南（1993）の（表 1）によると時間と場所の状況成分は「は」の前にあるが、本章では、（21）のような語順を取る。意味的な観点から事態は必ずある時間・空間的な背景の中に成立するものであり、（21a）の「太郎は東京に行ったコト」が「昨日」という時間の中で成り立つという気持ちで述べられているが、南（1993）の（表 1）と同じ語順の（22a）では「昨日」は「太郎」の解説の内容になっており、時間の背景を表すという意味は薄くなっている。状況成分としての意味機能をそのまま保つ語順は間違いなく（21）の語順である。さらに、談話の分析において時間を示す状況成分に焦点を置い

た「歴史的列挙」(historical Recount)というジャンルは(21)のような語順でよく現れるということ(塚田 2001:34)も、その根拠である。

日本語の文の語順の研究に貢献した宮島(1962)や佐伯(1975、1998)では簡単にまとめると、次のような語順が提示される。

時 > 所 > 主体 > ようす > 対象 > 結果

さらに、南(1993)の表のような状況成分の位置は以下の(23a)には当てはまるが、(23bc)には当てはまらない。

(23)a. 彼女はその日に旅行に出発した。

b. *彼女はその日に美しかった。

c. *彼女はその日に人気者だった。

d. その日に彼女は忙しかった。

e. 去年 11 月 3 日に彼女は病気だった。

(24)a. その日、彼女は(その日)旅行に出発した。

b. その日、彼女は(その日)美しかった。

c. その日、彼女は(その日)人気者だった。

南(1993)の分析対象は動詞文であることから、(表 1)のような語順は動詞文についてある程度有効な語順であるが、(23bc)のような形容詞文と名詞文では説明しきれない部分がある。

しかし、「に」を伴う時間を示す状況成分は(23bc)のように「は」の右には容認性が落ちるが、「に」を伴わない(24)のように「は」の左か右かに位置することが可能である。(23ab)の時間を示す状況成分「その日に」は時間を限定する状況成分で、形容詞文と名詞文において「は」の後はだめである。形容詞文や名詞文は基本的に時間の流れに左右されないので、特定の時間を示す状況成分とは相容れないという意味的な説明が与えられるが、(23de)のように「は」の左に位置すると、容認性が高くなることから、(23bc)と(23de)の違いは少なくとも状況成分の文に現れる位置にもかか

わる問題である。本章では (23de) と (24) のデータから状況成分の適切な位置が「は」の位置より最も文頭に近い位置にあることを前提にする。

4.2 状況主題

状況主題は時間と場所を表す状況成分に「は」が下接する主題のことである。例えば、(25) (26) のような例である。

(25)a. 昨日はお母さんがミカンをいっぱい買ってきました。

b. 去年 11 月 3 日は彼女は病気だった。

c. 昔は京都が都でした。

(26)a. アメリカでは大統領選挙が行われている。

b. アメリカがこの戦争に介入したのはベトナム軍事援助司令部の設置がきっかけだった。三年後の六十五年三月七日には、米海兵隊がダナンに上陸。
(てんぐ)

(27) は状況主題と考えにくい文なので、状況主題から外す。

(27) 昨日は敬老の日でした⁵。

⁵ (27) は西山 (1985、1988、1990) の一連の研究の (倒置) 指定文、尾上 (2004) の典型的な題目に相当する文である。さらに、本章が問題にする状況主題は、Tsubomoto (1989) の *situational topic* と三原 (1994) の状況主題とは異なるものである。

Tsubomoto (1989) の *situational topic* と三原 (1994) の状況主題は以下のような主題であり、三上 (1960) で示したようにこのような主題文は主に指示詞によって状況を提示する文である。

(1)a. これは道を間違えたかな？

b. あれは絶対にアメリカが悪い。

(26) に現れる時間と場所の意味を示す「に」と「で」は文の基本的語順で文頭に近い位置にあるもので、「は」が下接すると、対比になる条件が成り立たない限り、主題になる。

丹羽 (2006) では状況成分が「は」に下接される場合、単純提示用法を持つと述べている。

(28)a. ブラジルでは、今カーニバルが行われている。 (丹羽 2006:68)

b. 日本には、山が多い。 (丹羽 2006:69)

c. 山田さんには、毎日のように荷物が届くんです。 (同上)

d. 私の学校では、毎日夏休み直前に事件が起きる。 (同上)

丹羽 (2006:68-70) では (28) を主題とせず、「は」が単純提示用法としての「は」と主張した。丹羽 (2006) の主題文⁶とは「P は Q」において主体 P に対してどんな属性・状況 Q が成り立つかという関心を表す文である。(28) の「は」は題目でも対比でもない用法である。このような「は」は単純提示用法の「は」で、題目とその説明という関係になくても、文の中で前提部分と焦点部分とに分けることは伝達上有効である。(28a) は「ブラジルで何が起きているか」という関心を表す文であるが、「ブラジルでは」という形を取ることで焦点が明示的になっていると述べている。さらに、今まで言われる「格助詞+は」が述語に近い位置に用いられると、対比解釈は出やすいということに対して、丹羽 (2006:191) は題目用法あるいは単純提示用法の「は」がその位置で用いられにくいことがあって、対比の「は」は、語順の違いについて特に制限はないと述べている。

状況主題は格助詞がついていても、対比の意味が感じられにくい理由は次のようにいえる。「は」に下接され対比の意味がないのは、時間と場所を示す「に」と「で」である。つまり、ここで対比の意味のない「には」、「では」は以下で示す意味に限られる。それ以外の意味用法は比較的に対比の意味がある。状況主題について青木

⁶ 丹羽 (2006) の用語は題目文である。

(1992:183-196)⁷では「には」と「では」は「に」と「で」が以下の意味を持つとき、対比の意味がなく一種の題目であると述べている。

に：事物の（ある状態で）存在する場所を表す「に」と、動作・作用の行われる時・場所を表す「に」。

で：動作・作用の行われる場所・場面を表す「で」。

時間と場所を示す「に」と「で」は、ほかの格成分と比べ、語順的に文の主語より外側にあるものである。

5. 二重主題

本節では二重主題について考察を行う。二重主題とは、一文に共存する二つの主題のことである。二つの「は」がある場合、二番目の主題が対比の意味を感じ取りやすくなること、格助詞を伴う主題が対比の意味になることは指摘されてきたが、本節が取り上げる二重主題にはそれが見られない。本節では二重主題の存在を確認し、二重主題を構成しやすい条件や二重主題に現れる主題について述べる。

5.1 主題研究と二重主題

一文に二つの主題があることは益岡（2000:111-121）が指摘したにもかかわらず注目されてこなかった。益岡（2000）では一文中に二つの主題がある文を二重主題文と呼び、これについて若干の分析を行った。益岡（2000）は（29abc）のような疑問文が二重主題として読める可能性が高いとしている。さらに（29de）の平叙文でも二重主題が成り立つと述べている。

(29)a. あなたは学生時代に文学は勉強したか。 （益岡 2000:120）

b. あなたは果物はお好きですか。

⁷青木（1992）の用語は状況題目である。

- c. 岡山は魚はおいしいですか。
- d. 鶴岡という町は僕は見たかったんです。
- e. 私は自分で思ったことはだれにも相談したりしないでパッと決めますし。

本章では益岡（2000）のように二重主題の存在を積極的に認め、分析を加える方針であるが、益岡（2000）で取り上げられたデータには問題がある。（29abcd）は対比の意味が捉えられる。（29e）は対比の意味がほとんど感じられない。それは「自分で思ったこと」と対比させるものは想定しにくいからである。つまり、本章は（29e）だけ二重主題と考える。

さらに、青木（1992）では稀ではあるが、対比を示さず一文中に二つの主題がある文があると示している。

- (30)a. 十三世紀の教皇イノセント三世の時代には教皇は、各国の政治に干渉して自由に君主の廃位を行い、その勢力は絶頂に達したかの観があった。

（青木 1992:191）

- b. 内臓の解剖所見では、胃に毒物の反応は見られない。

（青木 1992:194）

（30）は青木（1996）が指摘した例文である。どちらの文も対比の意味合いが薄い文である。本章は（30）に対して次のように考えられる。（30a）の二つの主題は「十三世紀の教皇イノセント三世の時代には」と「教皇は」、（30b）の二つの主題は「内臓の解剖所見では」と「胃に毒物の反応は」になる。それぞれの主題を見ていくと、すぐ分かるが、一番目の主題は「格助詞+は」の形になっており、対比の意味がない。二番目の主題は「は」の形で（30a）は「行う」の動作主体であるが、（30b）は「見られない」の動作を受ける主体である。述語との格関係で言えば、どちらも主格のガ格の主体とも考えられる。益岡（2000）の（29e）の二重主題は（30）と違って、一番目は主格、二番目は対格という順になっている。（29e）と（30）はいずれも二重主題文であるが、一番目の主題には違いがある。（29e）の一番目の主題は「自分で思ったことはだれにも相談したりしないでパッと決めますし」といった解説に述べられる対象の主題として解釈されるが、（30）の場合はそれと異質のものである。（30）の一番目

の主題は述べられる対象の意味合いが薄く、場面を設定するという特徴を持つと考える。本章では(30)のような二重主題を次節以後中心に検討する。

青木(1996)と同じ見解を持つといえる佐藤(1976)では二つの主題の可能性があると示し、その一つは時間か場所の主題になると述べている。

(31) 先週は私は平家物語を読みました。(佐藤 1976:945)

佐藤(1976)では(31)について「先週私がどうしたか」といって、そして私が先週どうしたか」といって、先週私が平家物語を読んだ」という読みを持ちうるということであり、これは「先週は、(先週)私が平家物語を読んだ」と「私は、先週(私が)平家物語を読んだ」の二つの陳述を同時に行っていることになる」と述べている。

さらに、佐治(1991)でも(32)のように一文には二つ以上の主題を提示するという可能性があることを指摘した。

(32) 私はアルコールは日本酒は好きです。(佐治 1991:86)

佐治(1991)は(32)において真の主題は一番目のものに限られ、連体修飾節や順接条件節の中に含まれうることなどから、二番目以下の主題は述語の中にある要素のとりたてであると述べている。

佐治(1991)の(32)はどちらも主題であるものの、「アルコールは」は述語の中にある要素のとりたてではない。「私はアルコールは日本酒は好きです」の「アルコールは日本酒は好きです」は本章の分析対象の純粹主題に当たるものである。「アルコールは日本酒は好きです」の「アルコール」は「酒は日本酒がいい」の「酒」と同様、上位概念の名詞で、「日本酒」と包摂関係を持つ。つまり、本章の立場で言う「アルコール」は述語とは意味的關係を成していない純粹主題で、述語の中の要素ではない。

(32)を別の言い方をすれば、次のような文に当たると考えられる。

(33) 私はアルコールと言え、日本酒が好きです。

三上（1970:63）でも二重の「は」が現れることがあるというように指摘した。これについて以下のように述べた。

それから「は」の重出である。一つの文に「は」が2回、ときには3回も出ることがある。第一の「は」は主題らしい主題で、その勢力は文末に及び、さらにピリオドを超えようとする。第二以下の「は」はいわば副題（sub-topic）で、その勢力もやや弱く、対比、逆説、否定を表すことが多い。

三上（1970）の見解は、つまり、二つの「は」が現れてもそれは異種の「は」であるのである。第二の「は」は対比を表すことはその後広く受けられている。しかし、本章では対比を示さない第二の「は」が存在するというデータを提示する。

三原（2008）も本章と同様、複数の主題に賛同している。

(34)a. アメリカでは、多くの中産階級の人朝食にハンバーグを食べる。

b. バッハの時代には、宮廷音楽家はかつらを被るのが慣例だった。

（三原 2008）

三原（2008）では「アメリカでは」「バッハの時代には」は場所あるいは時の設定に関わる scene-setter で、主題とするのが適切であると述べている。

本章は上の益岡（2000）や青木（1996）や佐治（1991）の二重主題の存在を積極的に認める。益岡（2000）の主張と本章が次に挙げる例文からも分かるように、一文に二つの主題があること、さらにこの二つの主題が異なるものであることを積極的に取り上げる余地があると考ええる。

5.2 状況主題と二重主題

第4.1節で述べたように事態は必ず時間・空間的な背景の中で成立する。そして、その主題が状況成分で構成されるときに、上でも参考したように青木（1992）は重要な注意点を指摘した。ここで対比の意味のない「には」、「では」は「に」と「で」が以下の意味に限られる。それ以外の意味用法は比較的に対比の意味がある。

に：事物の（ある状態で）存在する場所を表す「に」と、動作・作用の行われる時・場所を表す「に」。

で：動作・作用の行われる場所・場面を表す「で」。

つまり、「には」、「では」は状況主題である。以下、状況主題を含む二重主題文を見る。

- (35) もはや家の中には足袋一足、風路敷一枚金に替わるものはなく、母は寮母の給料と残り少ない銀行預金の足し前で、給料を受け取り。（アメリカ）
- (36) 田圃や川のまわりには、蛍はいっぱいいて、夜などあるときに出ると、足の踏み場に困るほどである。（さぶ）
- (37) 吸血鬼が暗躍する世界では、首領だか統治者だか年長者だかの主たる住処はドメンと呼ばれていることが分かった。（血と薔薇）
- (38) 1953年本田技研の創始者本田宗一郎が渡欧してヨーロッパ各国の自動車会社を見学中、ドイツかオランダのある工場内でひろったねじがプラス（クロス）ねじだったことに驚き、それをポケットに入れて、帰国する。日本ではそれまで工作用に使うねじはすべてマイナスねじだった。（スパイの世界）
- (39) 富樫は、風呂場で六つに分割し、それぞれに重石をつけた上で隅田川に投棄した。三箇所に分け、すべて夜中に行った。三晩かかった。いずれ発見されるだろうが、それは構わない。死体の身元を警察は絶対に突き止められない。彼等の記録では富樫は死んでいる。（容疑者 X の献身）
- (40) ほかのホームレスたちも、気づいていたはずだけれど、誰もそんな話はしない。彼などの世界ではある日急に誰かがいなくなったりするのは、日常茶飯事なんだ。（容疑者 X の献身）

(35) から (40) までは「に」と「で」、つまり状況成分が通常の語順で文頭に來るのである。(35) から (40) までの例文を確認したところ、どちらも対比の意味がない。

これは久野（1973）で観察されていない主題文である。久野（1973）は一つの文中に2つ以上の主題がある場合、一番目の「は」だけが主題で、残りは対比を表すと述べているが、本章が挙げた上例からも分かるように対比のない二番目に「は」が主題としての文もある。状況主題を含む二重主題の意味解釈において語順が絡んでいるところが大きい。対比を示す接続助詞を伴わない限り、基本的な語順のままで二重主題の解釈は優先されると考えられる。

では、なぜ時間と場所を示す「に」と「で」が「は」に下接されても対比の意味がないかという点において、次のように考えられる。つまり、対比の意味になりやすい条件は尾上（1981）、丹羽（2006）や野田（1996）などでは斜格（時間と場所を示す

「に」と「で」を除く）が述語と密接な意味的關係を持ち述語に近い位置に存在するため、「は」がその間に割り込むと対比になりやすくなるというようにまとめられている。言い方を換えると、時間と場所の「に」と「で」は斜格とは異なり、述語にとって付加的成分であり、動作や状態が行われる時間と場所を表し、述語とは直接的意味關係を示さない。さらに4節で確認したように、述語から他の成分より遠くにあるのである。このような特徴から、「は」が下接されても対比の意味になりにくくなる。

では、状況主題が他の主題より述語に近くにある場合は、どのような解釈が優先になってくるか。以下の例を見られたい。

- (41) 情報活動と諜報活動との違いは、地上か地下の活動かの相違ということだけで、今日ではもはや済まなくなっている。（スパイの世界）
- (42) 神特有の残酷さ、とでもいうべきようなものが感じられ、これは彼女が私の妻であった頃にはあまり見られなかった点です。（コンス）
- (43) ワシントンの南西の郊外、バージニア州ラングレーに約六万五千平方メートルの敷地をもつCIA本部は、部内では、「ザ・カンパニー」というさりげない隠語で呼ばれる政府中央情報機関だが、成功は無視され、失敗は宣伝されるというケネディ大統領の言葉通り、一九六一年の「ピッグズ湾事件」で全世界の人たちの耳目をそばだてることになる。（スパイの世界）

(43) 逆接の接続助詞「が」で、対比の意味を持つと考えられるが、(41)と(42)にはそれがない。(41)と(42)の対比の意味は語順が絡んでいると考えられる。(41)と(42)の状況主題は述語に近い位置に存在し、対比の意味になりやすくなる。

本章では二重主題の存在を積極的に分析対象として取り上げた。その分析対象は状況主題を含む二重主題である。一文に二つの主題は現れるが、異なる主題であると考えられる。その中に入る状況主題は後続命題に対して時間と場所の背景を提示し、時間と場所の背景の前提として後続命題との関係を示す主題である。つまり、時間あるいは場所の設定に関わる *scene-setter* とも言える。

6. 対比となる条件と純粋主題と状況主題の位置

一文に二つの「は」が存在するのは、両方の「は」が主題になるか、それとも「は」のどちらかが対比になるかという2つの解釈ができる。これは様々な要因が絡んでいる。本章の考えでは、対比は談話上の制約といくつかの構文法的制約で説明できるものである。本章の分析対象は文の外側にあると考えられる純粋主題と状況主題である。状況主題には格助詞なしで「は」が下接する場合と格助詞に「は」が下接する場合がある。特に、格助詞に「は」が下接する場合は対比の意味を帯びることが多いが、上述したように状況主題は、対比の意味にならないことがある。さらに、純粋主題には談話上の制約を除けば、構文法的制約により対比の意味になることはない。つまり、格成分が主題化した主題と比較すれば、純粋主題と状況主題は対比の意味になりにくい。対比の意味になりにくいことは、純粋主題と状況主題の文の中の位置を相関関係すると考えられる。本章の第6.1節では対比となる条件に関する研究をまとめて述べる。第6.2節では対比となる条件は純粋主題と状況主題にいかにか当てはまるかを述べる。

6.1 対比についての先行研究

尾上(1981)では対比となる条件は、「文型的条件」と「言表状況的条件」に分けられたと指摘した。

「文型的条件」は、ほかの文とは無関係に一文内のあり方から対比の意味が強くなることを指す。尾上（1981）は「文型的条件」をいくつかの下位分類を設けたが、本章で参考に用いる条件だけ次のように挙げる。

まず、非常態的二分結合という文型的条件について尾上（1981）では文の結合は主語と述語の結合なので、この基本的な結合以外のものは「は」で意識されると対比の意味が生じやすくなると述べる。

- | | |
|----------------|---------------|
| (44)a. 猫は耳は鋭い。 | (尾上 1981:104) |
| b. きれいには書いた。 | (尾上 1981:105) |
| c. 教科書は読んだ。 | (同上) |
| d. 先生には報告しよう。 | (同上) |

(44a) と (44b) の述語は「は」で二分されたものである。「耳が鋭い」と「きれいに書いた」は述語なので、述語の内部に割り込んだ「は」は対比の意味が強い。

(44cd) も (44ab) と同様の説明で対比の意味が強くなる。つまり、斜格は述語と厳密な関係を持ち、主語よりも述語の近い位置に存在する。この斜格と述語の間は「は」に割り込まれて二分化し、ほかの事態と対比するような意味を帯びる。しかし、この条件は時や場所を表す「に」格、「で」格に当てはまらない。

さらに、尾上（1981）では「言表状況的条件」において、「場面的条件」と「文脈的条件」があると述べている。しかし、本章はこの「場面的条件」と「文脈的条件」が結局同じ条件であると考え。その理由として、場面も文脈も文が発話される状況を指すからであり、文に対比を生じさせるような場面・文脈があれば、対比を生じさせない場面・文脈もある。例えば、(45) はAの状況であれば、対比の意味がないが、Bの状況であれば、(46) はほかの二本のライターとの対比になっている。

A： 殺された男の弟が、殺人容疑者の持っていた一本のライターを刑事から見せられた後に、(45) は発話された。

(45) このライターはおれのものだ。 (尾上 1981:109)

B： 三本のライターについて刑事から「全部お前の兄貴のものか」と問われ、その内の一本を指差したとともに、(46) は発話された。

(46) このライターはおれのものだ。

(同上)

本章は対比を生じさせるような場面や文脈であれば、(46)のように発話される文は対比の意味になるという立場である。それゆえ、本章は、文型的条件だけに注目したい。

丹羽(2006)では同型の対比と異型の対比があると指摘した。同型の対比は(47)のように「は」の直前の部分に対立点に、異型の対比は(48)のように「は」の後を含めた全体が対立点になっている。

(47) 太郎はセンター試験を受けたが、次郎は受けなかった。(丹羽 2006)

(48) 薬は飲んだが、効き目はなかった。(同上)

同型の対比か異型の対比かは以下のような条件と関わる。

1. 述語を共有する複数の名詞項目が想定されやすければ、同型になりやすく、想定しにくければ、異型になりやすい。

(49)a. バラの花は咲いた。(丹羽 2006:192)

b. 花は咲いた。(同上)

(49a)は「咲く」ものとしていろいろな花が想定できるから、「百合の花は咲かなかったが、バラの花は咲いた」のように同型の対比と解釈される。

(49b)は「咲く」ものが花に決まっているので、同型の対比が解釈されにくく、「空気は汚かったが、花は咲いた」のように異型の対比と解釈される。

2. ことがらの外的な部分は同型の対比と解釈されやすいが、ことがらの内的な部分は異型の対比と解釈しやすい。

(50)a. 関東にはあまりないですが、関西にはよくある習慣です。(場所)

b. 7時には起きられないが、8時には起きる。(時間)

c. 風邪ぐらいでは休めないが、インフルエンザなら休める。(原因)

d. 車では運べないが、船でなら運べる。(手段)

(丹羽 2006:194)

ことがらというのは動的なことがらで言うと、物が動いたり、物が物に作用を及ぼしたりする関係である。これらを表す成分は「内的な部分」と呼ばれる。(50a)と(50b)の場所や時間はことがらを位置付ける働きをする成分である。(50c)と(50d)の原因や手段は事柄の成立を補助する働きをする成分である。これらは「外的な部分」と呼ばれる。

以上の丹羽(2006)の分析から、対比解釈はある項目が取り上げられるとき、ほかの項目を想定してそれと対比することが出来れば、対比解釈になりやすくなる。例えば、過去を表す用法の「いつか」は対比的に用いられにくい。

(51) いつか(*は)、彼とその話をしたことがある。(丹羽 2006:206)

過去の場合は過去のある時点の出来事があったというだけでは、対比的な関係は生じないのである。それに対して未来の場合なら、これからのどの時点でそれが実現するか複数の可能性がある。

(52) いつか(は)わかるときが来るだろう。(丹羽 2006:205)

久野(1973)では主題となり得るのは、既に会話の中に登場する人物・ことがら、すなわち、現在の会話の登場人物・事柄リストに登場済みのものを指す名詞句としている。そのため、主題となる名詞句は文脈指示の名詞句か、総称名詞句でなければならない。それに対し、対比⁸となる名詞句は文脈指示の名詞句か、総称名詞句でなければならないという制約がない。

⁸ 久野(1973)の用語は「対照」であるが、本章の内容の同一性を保ち、「対比」を使うことにする。

野田（1996）では明示的な対比と暗示的な対比があるとしている。明示的な対比は接続助詞の「が」や「けれど」などで繋がれる文や（53）のように同類の名詞が肯定と否定で対立する同類の述語と結び付いている文から取られる。

（53） 私は肉は好きだが、魚は好きではない。 （野田 1996:200）

暗示的な対比は（54）のように対比の相手が表されないが、「鍋は持ってこなかった」などの対比の相手が想定できることが多い。

（54） 子供たちは食器は持ってきた。 （野田 1996:200）

暗示的対比になりやすい条件は、以下のように挙げられる。

1. 「は」がついた成分の位置—述語に近い位置に置かれている
2. 「は」がついた成分の種類—基本語順で述語の近くにある成分
3. 「は」がついた名詞の種類—対になる名詞が思いつきやすい
4. 「は」がついた成分の発音—強く高くゆっくり発音される。

1と2は文法的、3は意味的、4は音声的な条件であり、こうした条件がそろっていればいるほど対比の意味が強く感じられる。

野田（1988:第5節）は「は」をいろいろな用法に分けることに反対している。主題と対比を区別しないという考えを示した。「は」は主題を表すもので、「対照というのは、ある名詞句と他の名詞句が、構造上及び意味的な関係によって並べられたときに付加される働きに過ぎない」と述べている。

菊地（1995:37）は「X」について情報を述べるという主題と述語の関係が二つ以上の「X」について成り立ち、その情報内容も対照的な場合が対比の用法であると述べている。

以上の先行研究を総合的にまとめた上で、本章での分析を試みる。尾上（1981）の文型的条件は本章でいう構文文法的制約に当たるものである。丹羽（2006）の同型の対比か異型の対比かの条件も結局構文文法的制約に一本絞れるのである。つまり、丹羽

(2006) の 1 の条件は述語と格関係を成す名詞項目か否かによるものであるし、2 の条件も述語との関係の密接の度合によるものなので、構文文法的制約と考えられる。野田 (1996) の上の暗示的対比になりやすい条件の 1 と 2 における述語に近い位置とは、述語と密接な格関係を持つ名詞項目の位置に言い換えられる。

6.2 状況主題と純粋主題の位置関係

状況主題と純粋主題は以上で確認したように基本的に文の付加成分であり、述語に必要とされず、文の外側にある成分である。状況主題と純粋主題が現れる領域は文が成立する場面の領域とする。状況主題は文の成立する時間と場所を示すという前提になるが、純粋主題は文の内容を限定するために、前提になる。状況主題と純粋主題の位置関係は (55) のようになる。

(55) 状況主題 > 純粋主題

状況主題と純粋主題が共存の具体的な例文は以下のようである。

- (56)a. 日本では、魚は、鯛がおいしい。
- b. 日本では、花は、桜がきれい。
- c. 日本では、酒は、日本酒がいい。
- d. カナダでは、鯨は、シロナガスクジラが一番大きい。
- e. トヨタ自動車では、課長は、山田さんが仕事が早い。
- f. 甲子園では、ピッチャーは、松坂が投げている。

(56) は対比の意味がなく、両方の「は」は主題として捉えられる。(56) は対比の意味になる条件に当てはまらないのである。対比の条件は以上の先行研究に基づいて考えると、以下のようになる。

(56) の「で」格が場所を示す「で」のため、「は」が下接することによって対比になりやすい斜格と違って、必然的に対比の意味にならない。従って (56) の状況主題は対比の意味が薄く主題の解釈が優先される。さらに、純粋主題は本章の第 2 節でテスト

したように述語と格関係を帯びず、「は」が下接しても対比の意味と解釈される必然性がなくなる。

述語を共有する複数の名詞項目が想定されやすければ、同型の対比になりやすく、想定しにくければ、異型の対比になりやすいという指摘において、同型の対比とは例えば (57a) のように「咲く」ものとしていろいろな花が想定できるから、「百合の花は咲かなかったが、バラの花は咲いた」のように同型の対比と解釈されやすい。(57b) は「咲く」ものが花に決まっているので、同型の対比になりにくく、「空気は汚かったが、花は咲いた」のように異型の対比と解釈される。

(57)a. バラの花は咲いた。

b. 花は咲いた。

(56a) において「おいしい」という述語を共有する名詞項目は鯛の他に鮪や鮭などの魚類が想定されやすく、「日本では、魚は鯛がおいしいが、鮪はおいしくない」のように対比の意味になりやすい。しかし、今の文は対比になったのは、純粹主題の名詞句ではなく、「が」格の名詞句「鯛」と対となる「鮪」である。(56) の純粹主題の名詞句、「魚」や「花」などには対となる名詞項目が広すぎて、想定しにくくなり、他のものとの関係が薄くなっている。純粹主題の名詞句と対になる名詞項目を想定して「日本では、魚は鯛がおいしいが、野菜は京野菜がおいしい」のような文を作成しても、対比の意味があまり感じられない。もちろん、以下の (58) なら多項型の対比として捉えられるのではないかとされることもあるかもしれない。

(58) 日本では、魚は鯛が、野菜は京野菜が、酒は日本酒が、おいしい。

(59) 太郎はフランス料理が、花子はイタリア料理が、好きだ。

しかし、これらの「は」の名詞句はお互いに区別され対比関係で成り立つ文というより、(59) のように順接的並列の関係で成り立つ文に類似していると考えられる。

以上をもって対比解釈に必要な文法的条件と意味的条件は (56) に適用できないことは上の分析から分かった。さらに、何人かのネーティブにデータを確認したところ、(56) は対比の意味が感じられないという回答であった。むしろ以下の (60) のよう

な語順ならば、対比の意味が強く感じられるという。それは基本語順から変えると、状況主題が述語の近い位置になるため、対比になる条件に当てはまる。

- (60)a. 魚は、日本では、鯛がおいしい。
b. 花は、日本では、桜がきれい。
c. 酒は、日本では、日本酒がいい。
d. 鯨は、カナダでは、シロナガスクジラが一番大きい。
e. 課長は、トヨタ自動車では、山田さんが仕事が早い。
f. ピッチャーは、甲子園では、松坂が投げている。

述語の近い位置に置かれる成分は比較的対比の意味が感じやすい。状況主題が純粋主題ではなくほかの主題より右側に位置する場合は(41)から(43)までも見られるように対比の意味になりやすくなる。

(60)の主題の順序は意味的制約によって決定されと考えられる。状況主題と純粋主題は何れも文の成立する背景を示す成分であるが、背景の領域によって現れる位置が異なる。出来事は必ずある時間・空間の中に起きるものであるから、時間と場所の状況語は他の成分より大きい領域を持つ。そのため、文の最も左側の位置にある。背景の領域が大きいということから、状況主題は後続命題を指定しないので、その後に続く内容の選択は様々である。

(61) 日本では、[]

- a. 衆議院の選挙が行われている。
b. 脊椎に対しての治療が古くからおこなわれていました。
c. パンに使う小麦粉をほとんどつくっていないんです。
d. 神々が杜(もり)の中に鎮まっておられる。

(61)の鉤括弧のところにはabcdのように様々な後続命題が現れる。abcdに限らず、他の内容の後続命題であっても文は成立する。しかし、状況主題のその後に続く命題後

続の選択が無条件的ではないことは (62a) の不自然さから説明できる。明らかに、このような後続命題は「アメリカでは」の状況主題のものである。

(62)a. ??日本ではワシントンを除いて、ほとんどが私設美術館である。

b. アメリカではワシントンを除いて、ほとんどが私設美術館である。

つまり、場所の背景を示す状況主題の後にくる後続命題はその場所の中で生じうる出来事や事柄などの内容でなければならない。(62b) は明らかにアメリカに関する後続命題の内容なので、自然である。

状況主題の領域に含まれる後続命題の内容なら、どんな内容でも許されるということで、(56) のような二重主題文も受け入れられる。それに対して、純粹主題が示す意味の領域は状況主題より狭いと言える。

(60) の構文の対比の意味の要因は、述語との関係にある。述語との関係とは、その主題名詞句が述語とどれくらいの意味的密接性があるかということである。本章の第 6 節の対比の条件の先行研究では、対比となる名詞句が述語と明確に意味的關係を担うことは直接に述べられていないが、構文文法的条件として述語を共有すること、述語にとって内的部分か外的部分かなどと言ったこれらの条件から考えると、対比となる名詞句は基本的に述語と明確に意味的密接性が必要である。

純粹主題の名詞句は、本章の 3 節で確認したように、格関係を示さない主題である。さらに、純粹主題の名詞句は述語をほかの名詞句と共有するという条件にも当てはまらないのである。状況主題の名詞句は時間や場所を表す成分であり、外的部分ではあるが、述語との意味的密接性を考えれば、状況主題は純粹主題より近い関係を持つ。動作や出来事は必ずある時間・空間の中に起きることから述語とは純粹主題より近い関係を持っていると言える。さらに、状況主題の名詞句は対となる名詞項目が想定されやすい。以上のような要因で状況主題は述語に近付ければ近づくほど対比の意味が色濃くなる。

(63) a. 日本では、天然芝生の野球場は、甲子園が一番広い。

b. 天然芝生の野球場は、日本では、甲子園が一番広い。

(63a) は二重主題の解釈を受けるが、(63b) は「日本では」が対比の解釈を受ける。(63a) は「日本では」は「天然芝生の野球場」より述語と意味的密接性が捉えられるものの述語から離れる位置に存在するから対比の文脈がない限り対比の解釈を受けにくくなる。(63b) の「日本では」は述語の近い位置にあること、さらに「天然芝生」より述語との意味的密接性も捉えられることから対比の意味なりやすくなる。

7. 純粋主題とは何か

最後に純粋主題とは何かを考えてみる。本稿の第1章でも述べたように主題の「は」は後続命題の内容の範囲を設けると述べた。以下ではその路線に立って述べる。

7.1 状況主題と純粋主題が共存する文の意味解釈

対比の意味のない(56)のような構文はどのような意味を持つかについて述べてみる。(56a) をここで再度参考する。

(56)a. 日本では、魚は、鯛がおいしい。

(56a) は二重主題文と言える。(56a) の文の意味解釈において二重の関係が捉えられる。一次的な関係は、状況主題の「日本」は後続命題の生じる場を示す関係である。二次的な関係は話の内容を成り立たせる場面を示す「魚」とその後続命題の関係である。両方の関係も「題目一解説」の関係、つまり「述べられる対象と述べる内容」というより後ろの命題後続はどのような“場”の中で生じているか、あるいは述べられているかという意味を持つのである。このような関係は一括にして背景的關係として扱える。

状況主題は後続の内容が成り立っている時間的・空間的な背景を示すもの一状況を提示するものである。

純粋主題は後続に語られる内容を限定するものである。例えば、「魚は鯛がおいしい」の文において主題の後ろに語られる内容は魚の下概念に関する内容に限定される。これは「XはYがZ」の「X」と「Y」の包摂関係のもとで説明できることである。

純粹主題は状況主題より後続命題に近い位置を占める。両方とも文の中で一緒に現れることができる。つまり、二重主題文を構成することができる。さらに、純粹主題と状況主題のもう一つの共通性はいずれも付加的存在である。そのため、これらの主題が省略されても文は成り立つ。結局、状況主題と純粹主題はいずれも共通して命題が成立する“場”を位置付けることができる。

7.2 西山（2003）の領域限定付きの指定文

西山（2003:第5章）は「象は鼻が長い」と「魚は鯛がおいしい」を同種のものとする先行研究が多い中、二つの文が同種ではないと指摘したことは評価すべきである。

「魚は鯛がおいしい」などのような文は「Xは」が付加的成分で、有題文ではないとしている。「Xは」が付加的成分であることは本章と同じである。西山（2003）ではこの文を有題文としない。その理由は、「鯛がおいしい」が魚についての叙述ではないことである。この点に関しては本章と同じである。本章はこの文が「主題 - 解説」の関係に成り立たない文であるという立場に立つ。本章では述語とは無関係な主題であることから、純粹主題文として設けた。機能として他の付加的成分と同様、文の成り立つ背景または場面を示す。つまり、語られる内容を限定するのである。西山（2003）では本章と同様この文の主題は話をXという領域に限定するとしている。西山（2003:242-243）は「題目 - 述部」の関係を有題文（あるいは主題文）の基準とし、このタイプの文はそういう意味で有題文ではないが、指定文とされている。それゆえ、「魚は鯛がおいしい」の「は」は主題の「は」ではなくなる。主題文かどうかは「主題 - 解説」の関係を基準に規定すれば、西山（2003）の説は正解であるが、本章の立場で言うと、主題の中に多くのものがあり、その中に「主題 - 解説」の関係に成り立つ主題と成り立たない主題がある。主題の中に多くの主題があるが、やはり、共通するのは「は」である。「は」は話の領域を定めて後続命題の前提を示すと考える。「主題 - 解説」の関係に成り立つ主題は話の前提になる上に、「主題 - 解説」の関係も持つと考える。しかし、純粹主題は純粹に主題を表すものである。つまり、純粹主題にある後続命題の内容の範囲を定めるという特徴は、「は」そのものの特徴でもある。

8. まとめ

以上、本章では純粋主題、状況主題、二重主題について考察を行った。従来の研究では純粋主題文について「X」と「Y」の関係を中心に考察したが、主題としての機能は何かについて明確に述べてこなかった。それにこの主題文を主題 - 解説に成り立つ文とする研究さえもあった（この点に関して第1章を参照されたい）。純粋主題と状況主題は共に後続命題の背景一場面という意味機能を持つ。これらの主題は一文の中で対比の意味がなく一緒に現れることができることにより、異質の主題を意味するのである。二重主題文の存在に基づいていうと、「は」が下接するものの中には様々なものがあると考えられる。純粋主題は述語とは意味的關係を成さないことによって文には付加的存在である。純粋主題が述語と意味的關係を持たないことは本章が設けたテストフレームで証明できたが、意味論的なテストフレームとはいえ、文の中の位置においてある程度反映すると考えられる。つまり、述語の位置から文頭に近い位置にある。純粋主題と状況主題の位置関係は情報の領域の大きさによるものである。

二重主題について今まで多少述べられてきたが、本格的な研究はまだ遅れているといえる。本章であげた実例の中では基本的に状況主題を含む二重主題文であった。格助詞がついている状況主題の場合は対比の意味が感じ取れないことがある。それは青木（1996）が明らかに指摘したことである。この点に関しては格助詞が付く「は」が基本的に対比の意味を帯びることに反する事実でもある。二重主題は状況主題を含む二重主題だけではない。益岡（2000）の例にあがった（29e）の二重主題は状況主題が含まれていない。この類の二重主題についての考察する余地がまだある。

第3章 主語的主題

1. はじめに

「XはYがZ」において「Xは」は「YがZ」と「主題-解説」という関係をなす一方、「X」と「YがZ」の間に「主語-述語」の関係もなす。このような二つの側面が捉えられる「X」を本章では主語的主題と名付ける。

「XはYがZ」は周知のように様々な観点から検討されてきた文である。このような文は複合述語を持つ文として認識されることが多く、従来の研究において、 $[_S X\text{-}wa [_S Y\text{-}ga Z]]$ で示されるように、「YがZ」はいわゆる(S)の文に相当するのである。文に相当する成分がなぜ叙述性をもって名詞の性質を叙述することができるのかは疑問でもある。このような表示をすると、「X」と「YがZ」の間にある関係はすぐ把握できなくなり、複合述語と呼ばれる理由は分かりにくくなる。本章は「YがZ」がSよりAPで表示されるべきことを提示する。そのように表示することによって、「X」と「YがZ」の関係、「YがZ」の性質および「X」が主語的主題であることは一層分かりやすくなるのである。さらに、本章が形容詞句(AP)とする「YがZ」の「Y」、つまり、Zの主語の性質を考察する。

従来の研究では複合述語文は二重の述語と二重の主語で構成される文と指摘されてきた。そして、先述したように複合述語文は $[_S X\text{-}wa [_S Y\text{-}ga Z]]$ で示されるように、「 $[_S Y\text{-}ga Z]$ 」はいわゆるSの文に相当するのである。本章が扱う複合述語文は次のような文¹である。

- (1) a. ヤギは性質がおとなしい。 (高橋 1975)
- b. このシャツはサイズが小さい。 (ダウインチコード)
- c. 礼拝堂に来てからソフィーはずっと様子が変だった。 (同上)
- d. 実のところ、私の着想は、ティーピングから刺激を受けた部分大きい。 (同上)

¹つまり、本章が扱う対象は本稿の第2章で挙げた菊地(1995)の基本型の「の」対応型の文類である。

e. ボストン・マガジン誌は、作り話が実にうまい。

f. 病気は、早期発見が肝心だ。

Sは(1)の「性質がおとなしい」や「サイズが小さい」などの「YがZ」である。なぜ本章がSではなくAPで表示されるべきことを目指すのかについて述べる。まず、本章は「XはYがZ」の「YがZ」が単純述語文の「PはQ」の「Q」と同じ一まとまり性を持つことを重視する。さらに、「YがZ」は「Q」と同様主題の性質を叙述することで叙述性を持つのである。そして、APで表示されることにより「X」と「YがZ」にある「主語 - 述語」の関係は一層分かりやすくなる。本章では「そう(だ)」の代用の仕方を言語的なテストフレームとし、上述した主張を立証する。

2. 「そう(だ)」について

現在ではVPの範囲を決めるテストフレームとして用いられる「そうす(る)」の研究が多いが、本章では「そうす(る)」の研究の成果をもとにして、「そう(だ)」の特徴を検討しながら、本章の分析に「そう(だ)」をテストフレームとして導入する。「そう(だ)」の代用の仕方は2つある。

1. 前方代用：前の文と共通する内容を代用する。

(2) a. 季仔さんは昔から季節が嫌いだ。今もそうだ。

<http://search.yahoo.co.jp/search?>

b. (省略) これまでほとんど姿を見せることのなかった大会の前日会見に出席。(俺は)「無差別級のベルトに挑戦できる事でワクワクしている。他の選手もそうだと思う。http://www.prideofficial.com/events/gp2006_1st/

c. 長は早稲田の新一年生だが、相変わらず、素晴らしいボールを打つ。ボールクオリティで言えば、大西と長が頭抜けている(あつ玉泉もそうだが今回はいなかった)。<http://www.soft-tennis.org/result/2003/0406.htm>

- d. 『海が見えた、海が見える、五年振りに見る尾道の海はなつかしい』放浪記の一節だが、尾道の海は人の心を魅了させてくれる。志賀直哉もそうだ。
<http://www.ermjp.com/ono/bungei/bungei.html>

2. 後方代用：後の文と共通する内容を代用する。

- (3) a. 今夜、アニメの声優さんの顔が見たいって番組を見ていて～声もそうだけ
ど アニメ画自体が懐かしかった。

http://www.freeml.com/ep.umzx/grid/Blog/node/BlogEntryFront/user_id/369403/blog_id/43573

- b. アメリカのビック 3 だけではなく、日本の自動車会社もそうだけど、資金繰りが困難に陥っている。

- c. 映画館では、どこでもそうだとは思いますが、学生のアルバイトが中心となって勤務してくれています。スタッフの中には「将来映画業界で働きたい」と思っている子も多く、また華やかなイメージをもって入社したものの、理想と現実のギャップに嘆いてしまう子もいます。

<http://www.emshinweb.hp.infoseek.co.jp/cinema/emshin/damedame10.htm>

- d. プロとして、そんな状態で患者さんの健康を守ろうなんておこがましいよ。
プロ野球の選手もそうだけど、プロになるとストイックなくらい自分の健康管理に気を使うよね。あんなに暴飲暴食していた人間が「何それ!？」って感じ。ハリウッドスターとかも、ある程度のところまで行くと菜食主義に変わったり。<http://www.surgitel.jp/view/voice/voice02.html>

上の 2 つの代用の仕方は、コーパスやネットからの実例のもとで得られたものである。「そう（だ）」が代用する部分は基本的に属性・性質、または一時的な状態を示すのである。それゆえ、「そう（だ）」が代用し得る部分には形容詞だけではなく（2bcd）と（3bcd）のように状態を示す動詞もある。以下では、動詞文に用いられる「そうす（る）」の特徴を取り上げながら、他の「そう（だ）」の特徴をまとめる。

2.1 「そうす（る）」/「そう（だ）」の代用とテンス

周知のようにテンスは「そうす（る）」の「そうす」に含まれない。

- (4) 太郎は昨日お風呂に入った。次郎も明日そうする。

oofuro - ni hai - t - (ta) = soosu - (ru)

前の文は過去のことを述べているが、後の文は未来のことを述べている。「そうす」はテンスが含まれない内容を代用する。次は、形容詞文を見る。

- (5) 弟が合流することになり、場所を替わった。で、長男に語った。語りたかったので語った。「俺、小さい子供は嫌いなんよ」と彼が言うから、俺もそうだったよというところから始めた。

<http://d.hatena.ne.jp/keya1984/20071216/1197817172>

chiisai kodomo - ga kirai - (da) = soo - (datta)

(5) で観察されるように「そう（だ）」の「そう」はテンスなしで前方の内容を代用している。テンスが代用の範囲に入らないことは、代用表現「そうす（る）」と「そう（だ）」の共通点と言える。「そうす」と「そう」の代用の範囲は意味的に決定されることから、テンスが代用の範囲に入らないのは当然なことである。次は主語の場合を考えてみることにする。

2.2 主語と代用表現

以下の「YがZ」の「Y」の特徴を分析するために、主語と代用表現の関係を考えておく。まず、「そうす（る）」の場合を見る。

- (6) a. 太郎はいつも外国人に日本語でゆっくり話す。
b. 次郎もそうする。

- c. 次郎もいつもそうする。
- d. 次郎もいつも外国人にそうする。

(6bc) では「そうす (る)」は副詞「いつも」を代用することがあれば、代用しないこともある。さらに (6d) のような代用も可能である。しかし、主語の「次郎」は「そうす (る)」の範囲に入って代用されることはない。主語と「そうす (る)」の関係をもとに表示すれば、(6b) のようになる。(4) のテンスに続いて主語が「そうす」の外側にある。

(7) jirou - mo [soo su] - ru (= (6b))

次は「そう (だ)」と主語の関係を見る。

- (8) アメリカのビック 3 だけではなく、日本の自動車会社もそうだけど、資金繰りが困難に陥っている。

(8) は「そう (だ)」取り除いて、「日本の自動車会社は資金繰りが困難に陥っている」のように「X は Y が Z」の主題文である。「そう (だ)」の「そう」の代用範囲は以下ようになる。

(9) nihon no jidoushakaisha-wa [soo shikinguri-ga konnan-ni otiittei] -(ru)

「日本の自動車会社」と「資金繰りが困難に陥っている」は「主題 - 解説」の関係を持つのである。さらに、「主語と述語」の関係を持つとも言える。「資金繰りが困難に陥っている」は叙述性をもって「日本の自動車会社」の状態を叙述することができる。

ここで「資金繰りが困難に陥っている」の部分の中で「資金繰り」が自動詞「(困難に) 陥っている」の主語であることに注目したい。「そうす (る)」の場合は主語が「そうす」の代用の範囲に入らないと反対に、「そう (だ)」の「そう」には主語が含まれることができる。

ここでまずこの違いを説明してみることになると、他動詞と非対格自動詞における主語の違いに要因があると考えられる。他動詞の主語は意図的な主語であるが、非対格自動詞の主語は非意図的な主語である。そして非意図的な主語として捉えられるから、叙述性を持つ成分の中で現れるのではないかと考えられる。この Y に当たる主語の特徴や性質は本章の 4 節で考えることにするが、次では「X は Y が Z」における複合述語について述べる。

3. 「そう（だ）」の代用から見られる述語の階層

動詞文において「そうす（る）」の代用の仕方から VP には階層があることの重要な根拠になっている。（以下の例文は三原（2004:139）から借用したもの）

(10) 太郎は [_{VP} 息子に料理を教えた]。花子もそうした。

(11) 太郎は息子に [_V 料理を教えた]。花子は娘にもそうした。

(12) A がそっちの丘を [_V 粉碎する] と、B がこっちの丘をそうした。

VP には階層があるからこそ、「そうす（る）」は動詞句全体 (VP)、動詞と対象 (V)、または動詞 (V) を代用することができる。

では、複合述語と言われる「X は Y が Z」にも階層があることを確かめることにする。

3.1 複合述語 (Complex predicate)

「X は Y が Z」構文は「Y」と「Z」が主述関係を形成して、「X」の性質を表す文である。そのため、「X」と「Y が Z」の間にも主述関係が捉えられる。この説明は多くの先行研究に見られるものである。構文は [S' [S]] で示されることがある²。つまり、文の中には文が存在する。それゆえ、S' の中にある S の文は叙述性があり、S' の主語を叙述するというような分析がとられてきた。本章は (13) と (14) のように「X は Y

² 例えば、杉本（1990）ではこの「X は Y が Z」構文を [S 象は [S 鼻が長い]] で表記し、[S 象は [S 鼻が長い]] の中にある S は補文構造の S であると述べている。

がZ」には階層があるが、本章は文(S)の階層ではなく、形容詞句(AP)の階層であるとする。

【 】内は「そう(だ)」に代用される部分を表示する。

(13) [_{XP} NP-wa [_{AP} NP-ga [_{A'} (adv) [_{A'} adj]]]]

(13)a. ヤマゴボウしか知らない。しかもヤマゴボウってヤマブドウかとおもって
ました。ヤマゴボウシは面白いですね。コブシもそうだけれど、【花と実の
ギャップが面白い】 <http://akashiahim.exblog.jp/3472502/>

b. ドーナツもそうけれど、【お皿を丸く整形するのがなかなか難しかった】。
<http://park15.wakwak.com/~miwa/Miniature.html>

c. いちご農家の朝は早い。農作物はなんでもそうだが、【気温が低い朝の
うちが収穫に最適なのだ】とか。

http://volunteer.yahoo.co.jp/feature/volu_beit/03/index.html

d. どんな道具でもそうだが、【使うその場所に備え付けられることが一番
好ましい】。 http://www.tackns.net/sub/license_fukusu.html

(14) [_{XP} NP-wa [_{AP} NP-ga [_{A'} (adv) [_{A'} adj]]]]

(14) a. アレは確か、隣のクラスの静月さんだよなあ。静月さんは、端の方で小
さくなっていた。まあ、もともと小柄なんだけど、じっと見てると、草野
のいいたいことがよく分かった。かわいい、と思う。顔もそうけれど、雰
囲気が【すごく好き】。 <http://www.ccn2.aitai.ne.jp/~ks-tada/sige1.htm>

b. ご存知の通り、パチンコ台はすべて保通協の認可を受けなければならず、
出玉数や確率などが【厳しい】。 サイズもそうだ。

http://www.kyoraku.co.jp/rec/jobbox/d_2/01.html

c. 一時のブームほどではないにしても、堅実な人気を誇るのがボウリング。
やっぱり、仲間と一緒に行って、ワイワイ騒ぎながら遊べるのが一番。ボ
ウリングは、ゲーム自体もそうだが、何よりピンが倒れる時の音が【気持
ちいい】。 http://event.yahoo.co.jp/tsuyu2001/part1/pt3_3.html

- d. 欧米人は何事につけ P (Plan) を立てるのが【うまい】、とされている。
戦略もそうだ。イメージ的に捉えた姿を描くのに長けた右脳型人間が日本人より多いからからではないか、というのが話題提供者（つまり筆者）の見立てである。

<http://www.ecology.or.jp/isoworld/iso14000/salon102.htm>

上の (13) は「Y が (adv) Z」全体、つまり AP を代用した例である。(14) は「(adv) Z」、つまり A' を代用する例である。

(13) の代用は「Y が Z」の一まとまり性、または「X」と「そう (だ)」に代用される「Y が Z」の関係を示すのである。(14) の代用は「Y」と「そう (だ)」に代用される「Z」の関係を明確に示す。「そう (だ)」が代用するのは基本的に状態性の部分である。状態性あるいは静的な意味を持つ述語とも言える。述語が状態である場合には、性質の叙述として再解釈しやすい。「そう (だ)」の代用から「X」と「Y」は AP の「Y が Z」または A' の「Z」の性質の主体の意味を持つ主語として解釈できる。つまり、「X」と「Y」は述語が示す性質の主体として主語である。

さらに、「そう (だ)」に代用される「Y が Z」と「Z」は何れも叙述性を持つ。「Y が Z」と「Z」の間に異なるのは、「Y が Z」の中に主語の「Y」が存在することである。

3.2 一まとまり性

(13) と (14) の代用に基づいて「Y が Z」は「Z」と同様一まとまり性は強調される。すなわち、よく言われるように「Y が Z」は単純な述語文の「P は Q」の「Q」に相当する。「Y が Z」は「Q」と同じ振る舞いを持つといえる。「Y が Z」は「Q」と同じ振る舞いを持つことは以下の単純な述語文の「P は Q」の (15) と (16) の「そう (だ)」の代用の仕方からも立証できる。

先にまとめると、(15) では「そう (だ)」が AP 全体を代用し、(16) では「そう (だ)」が項や付加詞を残して A' を代用するようになる。

(15) [_{XP} NP-wa [_{AP} object, / adjunct, [_{A'} (adv) [_{A'} t, adj]]]]

(15)a. 季仔さんは昔から【季節が嫌いだ】。今もそうだ。

<http://jinx.in/curse/htm/kiko4.htm>

b. 俺、【小さい子供は嫌いなんよ】と彼が言うから、俺もそうだったよというところから始めた。

<http://d.hatena.ne.jp/keya1984/20071216/1197817172>

c. 私もそうですね。【新しいモノを探す旅は好きです】。

http://www.novelmark.ne.jp/user/contribute/contribute_record.php?f_contribute_no=916

d. 日本人は【外国人とのコミュニケーションに苦手だ】ね。まあ、島の国はどこでもそうだ。

e. ああいう性格はどちらかという、【母とそっくりだ】。まあ、あの鋭い目つきもそうだ。

(16) [_{XP} NP-wa [_{AP} object_i / adjunct_i [_{A'} (adv) [_{A'} t_i adj]]]]

(16)a. これからヨドバシ寄って、ドラッグストア寄って…友達とライブです。

携帯もそうだけど、新しいヘッドフォンが【ほしい】。

<http://www.sorawomiagetemita.blog63.fc2.com/blog-entry-53.html>

b. 被疑者が若いこともあり、これを機に、「良識ある」大人たちによるゲーム、アニメ、ミステリ狩りが行なわれるかもしれない。犯人にもそうだが、マスコミにはもっと【腹が立つ】。感情的にならないうちに止めておくが、焚書が起こらないことを祈るばかりである。

<http://www.din.or.jp/shio/diary/past/yori/y9707.html>

c. あなたは自分にもそうだがファンにも【厳しい】と聞いた。宿舎に訪れてきたファンを叱っては勉強しろと帰したこともあるし。

http://www.shinhwafan.jp/pc/news/detail.asp?CO_ID=91

d. 日本も、韓国（北朝鮮）ともそうだが、いま問題の中国とは【そもそも仲が悪い】。http://sigma3.blogspot.com/2008/04/blog-post_24.html

(15) と (16) はいずれも目的語や付加詞を含む形容詞文である。(13) (14) と (15) (16) を (17) にまとめる。

(17)a. [_{AP} subj [_{A'} (adv) [_{A'} adj]]] (= (13)(14))

b. [_{AP} object_i / adjunct_i [_{A'} (adv) [_{A'} t_i adj]]]] (= (15)(16))

(17) の AP も階層を持つという点と、さらに、複合述語文の (17a) も単純な述語文の (17b) も「そう (だ)」の代用の仕方から、A' と AP という階層を持つ。「Y」が主語であれ目的語や付加詞であれ、いずれも、「Z」と結合して「X」の性質や一時的状態を表現するという共通の解釈が可能である。

この共通点を重視すれば、「X」に対して、複合述語文の「Y が Z」または、単純な述語文の「Y が / に / と Z」は、一つのまとまった形容詞に対等である。これによって従来言われてきた、「Y が Z」が一語の形容詞に匹敵することや一まとまり性が高いことなどは本章のテストフレームにより具体的に立証できたと言える。

そして (17) の AP は本章の 2 節でまとめたように「そう (だ)」の「そう」にテンスを含まずに代用されることから、AP は「-tense」になる。そして、「そう (だ)」も「そうす (る)」と同様「-tense」であるが、「そう (だ)」の代用の観察から、主語は「そう (だ)」の「そう」の中に含まれることができる。この点において動詞文における「そうす (る)」の代用の仕方と異なる。次では「そう (だ)」の中に現れる主語のことについて考察する。

4. 複合語と主語

(17a) の AP の中に現れる主語は如何なる性質を持つかについて考えてみたい。複合述語に現れる主語の特徴や性質を明確に示すために、先に複合語に現れる主語について参考することにする。

4.1 動詞由来複合語と主語

影山（2001）では主語の排除について英語の場合、-ing で終わる動詞由来複合語に（18a）のように主語が入らない。日本語の場合、意志を持たず、自然発生的な状態変化などを表す非対格動詞自動詞の主語のなら、（18b）のように複合語に入ると述べている。

(18)a. *bird singing, *population growing

b. 地すべり、胸やけ、耳鳴り、日照り

これによって日本語では名詞＋動詞の複合語を構成することができる名詞（地、胸、耳、日）の主語が非対格動詞の主語で、非意図的である。非対格動詞は大まかな言い方をすれば、主語が動作主ではなく、主題を主語として取る自動詞のことである。主題を主語として捉えられることや、主語が動作主ではないことにおいて形容詞と同様である。

影山（2001）の日本語の主語排除制約は正確な言い方として意図的な主語を排除する制約である。この制約は動詞由来複合語に当てはまる³。

本章では動詞由来複合語の主語と次で述べる形容詞の複合語の主語からは非意図的な性質を捉えられるという共通があるとする。

4.2 名詞＋形容詞の複合語

複合形容詞の数はよく指摘されているように少ない。その中でも、名詞＋形容詞の複合語はさらに少数である。

³意図的な主語の場合は、（1）のような文構造複合語には当てはまる。

（1）a. 中小企業庁実施 → 中小企業庁が実施すること。（仁田 1997:205）

b. 入院患者大量脱出 → 入院患者が大量に脱出すること。（同上）

（a）は他動詞で、（b）は非能格動詞であるが、両方の主語とも意図的な主語である。

（1）は臨時一語と呼ばれ、出来合い的・規格品的ではなく、文構成の現場で臨時的・一時的に組み立てられるものである。

- (19)a. 気味悪い：〔形〕（文）きみわる・し〔ク〕なんとなく不安で、恐ろしい。なんとなく気持ちが悪い。不気味である。「幽霊でも出そうなー・い家」（大辞泉）。
- b. 名高い：〔形〕なだか・し〔ク〕広く世間に名が知られている。有名である（大辞泉）。
- c. 末恐ろしい：〔形〕すゑおそろ・し〔シク〕将来どうなることかと、恐ろしく思われる（大辞泉）。
- d. 興味深い：〔形〕（文）きょうみぶか・し〔ク〕おもしろくて気持ちがひきつけられる様（大辞泉）。
- e. 幅広：〔名・形動〕横の広がり大きい。関係する範囲が広い（大辞林）。
- f. 腹黒：〔名・形動〕心に何か悪だくみをもっている。陰険で意地が悪い（大辞泉）。
- g. 意地悪：〔名・形動〕物事が、都合の悪くなる感じである。「ー・いことに雨まで降ってきた」（大辞林）。
- h. 話し上手：〔名・形動〕話術がたくみな・こと（さま）。また、そのような人（大辞林）。
- i. 話し下手：〔名・形動〕話術が下手な・こと（さま）。また、そのような人（大辞林）。
- (20)a. 人懐こい：〔形〕すぐに人となれしたしみやすい。ひとなつっこい（広辞苑）。
- b. 耳新しい：〔形〕（文）シク みみあたら・し。はじめて聞く内容である。聞いて新鮮である（大辞林）。

（19a-d）において複合語の基底構造は「名詞＋が＋形容詞の語幹＋接尾辞」になっている。一方、（19e-i）の基底構造は「名詞＋が＋形容詞の語幹」になっている。

（19）からすぐ分かるように形容詞にも主語編入がある。個別に見ていくと、（19a-d）は一語の形容詞化している。それに比べて（19e-i）は（19a-d）ほど一語化していない。これは形態的な違いであるが、（19）の複合語が全て共有するのは、主語が複合語を一つの要素として形成することである。さらに、主語はいずれも非意図的な名詞である。

次は(20ab)を少し参考したい。(20)の基底構造は「名詞+に+形容詞の語幹+接尾辞」である。(20a)の「に」は態度に向けられる先であるが、(20b)の「に」は「にとって」に同意で、判断や評価などが成り立つところの基準を表すのである。ここではこの種の複合語を(17b)に連動してもらいたい。(17b)のまとめにより目的語や付加詞が形容詞句の中にあり述語と結合して叙述性を表す。従ってこの付加詞は(20)のように複合語も形成することができるのである。複合語と主語の関係はあくまでも語のレベルに留まるが、本章が次で(19)に現れる名詞の主語と(17)のAPの中に現れる主語は同じ性質を持つと考えられ、本章が主張する複合述語の主語の特徴が正しい分析であることを示す根拠になると考えられる。

4.3 複合述語の「主語」の特徴

ここで一まとまり性を「そう(だ)」のテストを根拠により強調すれば、非意図的な主語は述語の一まとまり性を構成しやすい。言い方を換えれば、本章が論じた上の根拠に基づいて非意図的な主語として捉えられる主語は述語の一部になりやすいという。主語が述語の一部になりうることは指摘済みのことである。例えば、佐治(1991:84)では主語は主題として表されることもあり、叙述部の中に、一さらに叙述部・主題部の中の従属節の中にも一現れることもあり、言語の表面に表されないこともあるように述べている。

主語が述語の一部になるということは、主語としての基本的な使い方ではないという指摘がある⁴。本章はこれに関して賛成である。このように使われる主語の「が」は本章の(17)でまとめたように他の成分と同等性を持つことになる。主語とほかの成分が同等性を持つことは、「そう(だ)」のテストフレームから導いた結論である。つまり、複合述語の中の主語は他の成分と同様、述語と結合して述語の一部として主題について述べるのである。述語の一部になる主語が非意図的な主語であることは、次のように考える。

まず、「そう(だ)」の代用表現は文の表現類型の観点からいうと、判断文である。判断文は判断の対象に対して判断を表す表現である。判断文は表現の性質でいえば、状

⁴ 三原健一先生からのご教授による。

態性の表現、またはそもそも状態性の表現ではないが、判断文として用いられることにより状態性の表現として捉えられるような表現である。それゆえに、判断文に現れる主語は非意図的な主語である。これは当然そうなのであろう。もう一度、主語と「そうす（る）」の代用表現を思い出してもらいたい。本章の2.2節で論じたように主語は「そうす」の中に含まれない。一つ考えられるのは、「そうす」の中に含まれない主語が意図的な主語であり、「そうす（る）」は行動する意味を表す動詞としても考えられることである。それゆえに、動作主の主語は「そうす」の中に入らないのである。例えば、「僕も行く」という表現は話者の意志を十分に表明する文である。もちろん、「僕もそうする」というように言い換えることも可能である。

さらに、主語は一般的に文の成立にかかわり、文全体や述語に対して他の成分と異なった位置づけや関係を担う存在である⁵が、複合述語文に現れる主語は文を成立させるという特性が欠ける。

これは以下の(23) (24)の(a)で具体的な根拠となる。さらに、従来の研究でも指摘されてきたように、この種の「YがZ」は独立性が低い。つまり、「X」から独立性が低く、意味的な完結がない。言い換えれば、「Y」は「Z」の性質や状態の持ち主であるが、「YがZ」を文として成立させていない。つまり、「Y」は主語として十分の機能を果たしていないのである。「YがZ」は一語に近いまとまり性を持つため、Sという文の表記の代わりに、形容詞句(AP)の方が適切である。

5. 主語的主題

「XはYがZ」の複合述語文における「X」は主語としても広く受け入れられる。本章の最初でも論じたように、「X」は「主題 - 解説」の関係と「主語 - 述語」の関係でそれぞれ異なる位置づけが与えられる。本章では「X」が主題であること、または「X」が主語であることは具体的にどのようなものか以下で述べる。

5.1 形容詞句としての「YがZ」

⁵ このような主語の定義は仁田(1997:171)を参照されたい。

本章の3節と4節で述べたように、複合述語に現れる主語「が」は単純な述語に現れるほかの項や付加詞「が(対象)、に、と」と同様、形容詞と結合して述語として名詞を叙述する。つまり、複合述語の主語は叙述性をもつというように言える。

(21) [_{AP} subj [_{A'} (adv) [_{A'} adj]]] (= (17a))

(21) を設定するに当たって2つの理由が挙げられる。

1. APの中に主語が編入されること。
2. 「そう(だ)」の代用から tense が APの中に現れないこと。

形容詞句の中に主語が内在することは新しいものではない。(21)のような構造を立てる研究を参考に挙げると、Kikuchi and Takahashi (1991) は挙げられる。Kikuchi and Takahashi (1991) は日本語の small clause 構造において英語の (22a) に対して日本語の (22b) を立てた。

(22)a. John_i seems [_{ArgP} t_i honest]

b. John_i-ga [_{AP} t_i kasiko-ku] nat-ta

「なる」の動詞で構成される small clause の中にある主語は主要部の動詞「なる」の格付与によって主文の主語位置に移動する形になる。つまり、John はもともと形容詞句 (AP) の中にある主語である。本章で論じる形容詞句の中の主語には移動と関わらないが、Kikuchi and Takahashi (1991) の形容詞句の中の主語という論証は本章の主張の根拠となると考える。

5.2 なぜ主語的主題なのか

まず、(23) (24) を見られたい。(23) (24) の (a) は両方とも本章でいう形容詞句である。その根拠として (23) と (24) の現象が挙げられると考える。

(23)a. ?作り話が実にうまい。

b. ボストン・マガジン誌は、作り話が実にうまい。

c. 作り話はすぐバレるものです。

(24)a. ?早期発見が肝心だ。

b. 病気は、早期発見が肝心だ。

c. 早期発見は、有効な治療に結びつく唯一の方法です。

(23) (24) の (a) にそれぞれ「ボストン・マガジン誌」と「病気」を入れると、(b) のように文は安定するようになる。一方、(c) は (ab) と違って、名詞文であり、文脈やほかの名詞を入れず、自立的で安定する文である。

(23) (24) の (a) は両方とも唐突に言う文としてはおかしい。つまり、(23) (24) の (a) は適切な文脈がない限り単独では不自然である。さらに、「作り話」と「早期発見」は、それぞれ「UFO は作り話ですか」や「癌の唯一の救いは早期発見ですか」と問うことが可能なので、「作り話」と「早期発見」は飽和名詞である。つまり、(23) (24) の (a) が不自然なのは、「作り話」と「早期発見」が非飽和名詞であるからということにならない。「非飽和名詞」とは西山 (2003:33) によれば、「X の」というパラメータを要求し、パラメータの値が定まらない限り、意味として完結しない名詞のことである。(23) (24) の (a) の不自然さは「作り話」と「早期発見」が非飽和名詞という原因にあるとも考えられるが、上で述べたように「作り話」と「早期発見」は非飽和名詞ではないし、西山 (2003) でも「X は Y が Z」の「Y」が必ず「非飽和名詞」でなければならないとは述べていない。

では、なぜ (23) (24) の (a) が不自然なのか。本章の 4.3 節でも述べたように複合述語文に現れる主語は文を成立させるという特性が欠ける。さらに (23) (24) の (bc) はいずれも完全文 (S) であるが、(23) (24) の (a) は形容詞句の AP である、という違いでも説明できる。「作り話」「早期発見」は (a) にも (bc) にも現れるが、句構造に表記すると、(a) に現れる位置と (bc) に現れる位置は異なる。つまり、(17a) の句構造を (ab) に適用してみると、次のようになる。

(17)a. [_{AP} subj [_{A'} (adv) [_{A'} adj]]]

(23)a. [_{AP} 作り話 [_{A'} (実に) [_{A'} うまい]]]

(24)a. [_{AP} 早期発見 [_{A'} (adv) [_{A'} 肝心]]]

対照的に (23) (24) の (b) も句構造に適用すると次のようになる。

(23)b. ボストン・マガシン誌 [_{AP} 作り話 [_{A'} (実に) [_{A'} うまい]]]

(24)b. 病気 [_{AP} 早期発見 [_{A'} (adv) [_{A'} 肝心]]]

次は主題の「X」について述べる。「X」の「ボストン・マガシン誌」「病気」の位置は、AP の後ろにかかる位置である。「X」の主題は文末までかかるということは三上 (1960) の指摘に帰する。

三上 (1960:21-25) では「は」と「が」のかかる領域について「は」は文末までかかるが、「が」は途中までかかる。次の「が」は語幹にかかるだけで、活用語尾には及ぶことがないと説明される。

(25) Xハ・・・チガイナイ。 (三上 1960:22)

(26) 「カレガ花ヲ折ッ」タニチガイナイこと。 (三上 1960:23)

つまり、(25) において「Xは」が文末にある「チガイナイ」までかかると具体的に言い換えられる。(23) (24) の (b) の主題は文末に何も無いようであるが、「そう(だ)」の代用のもとでいうと、文末にある「だ」⁶までかかるといえる。これは (23) (24) の形容詞文に限らず、叙述性を持つ動詞文にもいえることである。

(27)a. (省略) これまでほとんど姿を見せることのなかった大会の前日会見に出席。(俺は) 【無差別級のベルトに挑戦できる事でワクワクしている】。
他の選手もそうだと思う。

http://www.prideofficial.com/events/gp2006_1st/

⁶ ここで取り上げる「だ」は別の形式の「です」「である」をも意味する。

- b. ルーンは口元に微笑を浮かべ、「物語ってあるよな」そう切り出した。俺たちは【ガキの頃からなにがしかの物語を聞かされて育ってきた】。御伽噺だったり昔話だったり英雄譚だったり……」「僕もそうだよ。僕も子供の頃から本が好きでね……」

<http://home.owari.ne.jp/~kody24/novelle/048.htm>

- c. 衛生害虫と呼ばれる生き物たちがいる。ゴキブリもそうだしハエもそうだ。カモノミもダニもシラミもそうだ。これらの生き物は【病原体となるウィルスや細菌などを運んで人に病気を感染させることがあるので、衛生害虫と呼ばれる】。正確には不衛生害虫だと思うのだが、とにかく慣わしとして衛生害虫と呼ばれている。

<http://www.publiday.com/publiday/080/009.html>

(27ab) は「そう (だ)」の前方代用で「…ワクワクしている」と「…聞かされて育ってきた」の動詞述語を代用する。(27c) は「そう (だ)」の後方代用で、「…ので、衛生害虫と呼ばれる」の動詞述語全体を代用する。(27) は形式上動詞文であるが、示す内容は主題について叙述する文である。これらは形式上動詞文であるが、意味的には叙述性をもち、「主題 - 解説」の構造を有する。文の形式と文が示す意味が一致しないことは三上 (1963:50) に見られるのである。それは (28) の動詞文が (29) の名詞文の意味に近いという。

(28) 朝顔は、夏咲きます。

(三上 1963:50)

(29) 朝顔は、夏の花です。

(同上)

(28) と (29) を考えてみる。(29) は判断文で、通常「主題 - 解説」の構造を有する。そして、判断文は「は」が文末表現とともに判断叙述の表現を形成する。(28) は「は」が表面上に現れない文末表現とともに形成されると考えられえ。それは、上の (23) (24) の (b) と (27) にも同じことで説明できるのである。

「そう (だ)」の代用で (23) (24) の (b) や (27) などの文が判断文であることは具体的に証明されると考える。表面上に文末表現が省略されることは、西山 (2003) にも見られる。本章が扱う「XはYがZ」構文は西山 (2003) の分析によれば、[長鼻一

読み]の「XはYがZ(だ)」構文で、「Y」は、「YがZ(だ)」という叙述内容を「X」と結び付けるフックとしての機能を果たし、「XはYがZ(だ)」はコピュラ文の一種である。西山(2003)の意味での「だ」は表面上で省略される形であると考えられる⁷。

さらに、(30)のように文は名詞文であるが、「だ」を伴わない時もある。

(30) 大阪は、商の街 食の街 お笑いの街。

<http://www.kansainavi.com/osaka/Yellowpage/government/autonomy.html>

(30)の名詞文は叙述性をもち、「大阪」はどのような街かを叙述する文である。通常、名詞述語は名詞と「だ」またはほかの判定詞で形成するが、「だ」が(30)のように省略されても、名詞文であることに変わりがない。

以上をもって本章で行った分析の結論は結局、従来の「は」のかかる領域に負うところが多いという形になった。この「は」の文末にかかる位置は目新しいものではないが、分析の仕方は従来の研究と異なる。主語的主题は、(23) (24)から明確に説明できるのである。(23) (24)の「X」は、形容詞句の「YがZ」が表す性質や一時的な状態の持ち主という意味で、主語である。さらに、「X」は「YがZ」と「主題-解説」の構造を形成し、文末表現にかかる。「そう(だ)」の代用の観点から表面上で、文末にある「だ」にかかるといえる。

本章の「XはYがZ」構文は「主題-解説」の関係に成り立つ文である。本稿の第1章3.1節で述べたが、「主題-解説」の関係に成り立つ「PはQ」は「主語-述語」の関係に保証される。これは本章の「XはYがZ」にもいえることでもある。

6. まとめ

本章では複合述語と呼ばれる「XはYがZ」について述べてきた。この文に関する研究は多く、この文に関する目新しい分析を提供するのはかなり難しい。本章がこの文について指摘されてきた、複合述語を持つ文、二つの主語を持つ文や主題が主語であるこ

⁷ 三原健一先生からのご教授による。

などを再度確認する形になった。VP の階層を立証するために用いられる「そう（する）」の代用は本章に「そう（だ）」の代用を導入するきっかけとなった。本章が扱う文は複合述語文とよく言われるが、具体的な立証は本章が行われた「そう（だ）」の代用で確認できた。さらに、「そう（だ）」の代用は「Y が Z」が一まとまり性を持ち、「P は Q」の「Q」と対等することも証明できた。述語の一部に現れる「Y が Z」の「Y」の主語は非意図的な主語かまたは非意図的な主語として捉えられる主語である。さらに、「Y が Z」が X に対して叙述性をもち、独立性が欠けるため、S で表示するのは、「Y が Z」の性質と一致しない。形容詞句の AP として表示することは、適切である。

この「X は Y が Z」構文は「主題 - 解説」の関係に成り立つ文である。本章の「X は Y が Z」構文は本稿の第 2 章で分析対象とする「X は Y が Z」構文と明らかに異なる文である。第 2 章の「X」は「Y が Z」と主述関係を持たず、付加的な存在であるが、本章の「X」は主述関係を持ち、主語であり主題である。

第4章 コト名詞句の主題

1. はじめに

「は」の意味解釈には主題と対比のほかに条件的解釈がある。本稿の第1章では主題文が条件的解釈を持つのは、主題文には事態の生起の順序が存在するためであると述べた。本章では、分析対象とするコト名詞句の主題文から事態の生起の順序（以下「継起的関係」）が捉えられることがあると主張する。さらに、継起的関係を捉える条件や、継起的関係と因果的解釈との相関関係について述べる。最後に、コト名詞句の主題の構文分析を行う。本章の分析対象は感情形容詞文に限定する。

最初に、コト名詞句の主題の「コト」とは何かを規定する必要がある。本章が術語とする「コト」とは、内的構造を持つ「の」形式の主題を指す。(1)と(2)では、コト名詞句は「靴下を5足も描く」、「静かな街を歩く」であり、内的構造に相当する。

- (1) 靴下を5足も描くのは、手間がかかる。 (博士の愛した数式)
- (2) 静かな街を歩くのは、気分が落ち着く。 (野田 1982¹)

内的構造を持つ主題は、形式名詞「の」で名詞化される主題のほかに、形式名詞「こと」で名詞化された主題もある。

- (3) 極端に走ることは、簡単なのだ。
- (4) 現実的に考えれば、子供を増やすことは、難しい。

www.heri.or.jp/hyokei/hyokei81/81zinko.htm

¹ この例文を最初に取り上げたのは、野田（1982）である。野田は主題である「は」が、他の成分とどのような論理関係にあるかをもとにして「は一が」構文を6型に分け、この(2)を短絡や省略、ねじれなどによって論理的な格関係に戻せない「は一が」構文と説明している。

- (5) ただし、記事の理解に必要な、専門的で学術的な用語を定義することは、必要ですし、むしろ奨励されることです。

<http://www.k.hatena.ne.jp/keywordblog/>

本章の分析対象は「の」形式の主題に限定する。本章は、第2節で先行研究に基づいて「こと」の特徴との対比により「の」の特徴を考察し、「の」形式の主題を分析対象とする理由を挙げる。また、「の」と一緒に現れる形容詞についても述べる。第3節では、コト名詞句の主題と継続的關係、及びその意味解釈について分析する。第4節では、コト名詞句の主題の内的構造を考察する。

2. 形式名詞としての「の」

形式名詞とは日本語の中では名詞の一種であり、実質的な意味が希薄で独立して用いられないことは基本的な了解である。形式名詞の中では、「の」と「こと」に関する研究が充実している（久野 1973、Josephs 1976、工藤 1985、橋本 1990、1994 など）が、「の」と「こと」の区別や、「の」と「こと」と共起する動詞は結局、Josephs (1976) の分析に帰するといえる。本節では、「の」と「こと」についての先行研究を参考に「の」の特徴を確認する。

2.1 「の」と「こと」の特徴

まず、「の」と「こと」の有する共通点について述べる。「の」と「こと」で名詞化された名詞句は、久野 (1973) や Josephs (1976) が言うように、その句が表す動作、状態、事態が真であるという話者の前提を含んでいる。形式名詞「の」と「こと」で名詞化された事態が真であることを証明するテストフレームとしては、思考動詞「思う」との共用可否が妥当である。思考動詞「思う」は、森山 (1992) によると、事実を報告する情報（事実的情報）について不確実を表すほか、主観的判断を表す情報（意見）について個人的意見であることを強調することがある。前者の場合は、情報が事実であっても、「思う」を付加することによって情報が不確実になってしまう。この「思う」の特徴から「思う」は事実的な内容、真である内容をもつ事態と相容れない。

(6) 太郎は阪神の優勝が確かだと思った。

(7)a.*太郎は阪神の優勝が確かなのを思った。

b.*太郎は阪神の優勝が確かなことを思った。

つまり、(7) は形式名詞「の」と「こと」で名詞化された内容は真になるため、「思う」が共起すると非文になる。この点について引用の「ト」と比べれば、「の」と「こと」が真の事態を示すことが一層強調される。「ト」は内容が真であるという前提となる述語とは用いられないが、「の」と「こと」は(9)のように共用できる。

(8) *弟は自分が車を運転したと隠していた。

(9) 弟は自分が車を運転したの／ことを隠していた。

「の」と「こと」の相違点については、先に動詞文を中心に分析した久野(1973)や Josephs(1976)などを参考にする。まず、久野(1973)では「の」が具体的な出来事、「こと」が抽象度が高い出来事を示すと述べている。次に、Josephs(1976)では、「の」と「こと」の区別、ならびに「の」と「こと」が共起する動詞の制約は、意味的に決められる問題であると指摘されている。すなわち、両者の相違は明確であり、「の」は大体において、直接に知覚され同時に生起する、あるいは実現の差し迫った動作や出来事を意味する。一方、「こと」は継起的、非現実的、あるいは抽象的に知覚された動作や出来事ならびに状態を意味するとされる²。

上記の意味的な違いは、「の」と「こと」が共起する動詞によって説明できる。

「の」は、知覚(見る、聞く、感じる)、発見(見つける、捕まえる)、助け(助ける、手伝う)、中止(止める、制止する)、防止(防ぐ、邪魔する)³のような語彙的意味

² No means something like directly perceived, simultaneously occurring, or imminent action, event, etc., while *koto* means nonsimultaneous, nonrealized, or abstractly perceived action, event, state, etc. (Josephs 1976:325)

³ 防止(防ぐ、邪魔する)の動詞は「こと」とも共起するが、「の」と共起するときの意味とは異なる (Josephs 1976:324)。

の動詞と共起する。これらの動詞は「こと」と共起しない。これらの動詞は、共通して意味素性の〈direct〉で説明できる動詞である。

それに対して、「こと」は命令（命じる）、要求（頼む）、提案（提案する）、勧告（進める）といった語彙的意味の動詞と共起する。これらの意味の動詞は「の」と共起しない。これらの動詞は意味素性の〈indirect〉で説明できる動詞である（Josephs1976:324-326）。

Josephs（1976）の後、「の」と「こと」と共起する動詞の分類は、工藤（1985）にも見られる。さらに、「の」の同時性は、坪本（1984）の主要部内在型関係節（HIR）⁴の分析にも見られる概念である。

橋本（1990）では、上の Josephs（1976）とほぼ同じような動詞分類を立てている。その際、さらに議論を拡大し、次のような意味規則がまとめられている。

1. 「の」専用文には、主文の表す出来事と補文の表す出来事とのあいだに、同時性、同一場面性といった意味的《密接性》がある。この意味規則に従う動詞類は、「見る、見える、聞く、聞こえる、感じる、手伝う、待つ」などが挙げられる。

(10) 卓夫は母が皿を洗う の/*こと を手伝った。

(11) 正幸は背筋が寒くなる の/*こと を感じた。

⁴ 坪本（1984）において、主要部内在型関係節（HIR）について「の」の特徴は、意味の密接性を表すために、二つの命題を一体化するかのように働くとされる。坪本はこれを「の」の unifying function と呼んでいる。「の」構文の二つの命題間には密接な意味的、語用論的關係がある。そのなかでも「同時性」「同一場所生起」といった関係は最も顕著であるとされる。その例として（1）と（2）があげられている。

(1) *太郎は今朝 [花子が昨日リンゴを買った] のを食べた。

(2) 太郎は今朝 [花子が昨日リンゴを買っておいた] のを食べた。

2a. 補文の意味役割が《対象となることがら》ならば、「の」「こと」両用文になる。この意味規則に従う動詞類は、「恐れる、喜ぶ、知る、納得する、思い出す、禁止する、拒否する、断る、断念する、怠る」などがある。

(12)a. 久志は授業をさぼった の/こと を後悔した。

b. 係員はたけしに部屋から出る の/こと を許可した。

c. 松本氏は朝起きてすぐうがいをする の/こと をやめた。

2b. 補文の意味役割が《生産されることがら》ならば、「こと」専用文になる。

この意味規則に従う動詞類は「考えつく、計画する、求める、進める、主張する、試みる、企てる、推進する」などがある。

(13)a. 正幸は屋根裏に隠れる ??の/こと を思いついた。

b. 係員はたかしに部屋から出る ??の/こと を命じた。

c. 松本氏は朝起きてすぐうがいをする ?の/こと を始めた。

橋本（1990）の「の」「こと」と共起する動詞の分布は、Josephs（1976）と工藤（1985）の「の」を取る動詞、「こと」を取る動詞の分類とほぼ同じである。

上記のような「の」と「こと」の性質、特徴、分布は、主に動詞述語文を対象に分析されてきた。橋本（1990）の意味規則は、動詞述語のもつ意味によってそれと共存する語が決まるという、結合価（value）の概念のもとで成り立つのである。こうした橋本（1990）の動詞分類は、基本的に Josephs（1976）と一致している⁵。

「の」に関しては Josephs（1976）、工藤（1985）や橋本（1990）などにおいては、思考による分析を取らずに五感で知覚する動詞類「見る、見える、聞く、聞こえる、感

⁵ 橋本（1976）の（2a）は、Josephs（1976）が指摘した「防止」の動詞類や、「分かる、知る、悟る」の動詞が該当する。Josephs（1976）は、これらの動詞は「の」と「こと」をどちらも取ると指摘している。「分かる、知る、悟る」の動詞が「の」を取るときは刺激や非意図性に関わるが、「こと」を取るときは思考や意図性がかかる Josephs（1976:340）。

じる」などが、「の」を取ることも指摘している。さらに、Josephs (1976:341-343) で指摘されたように、感情動詞類も「の」を取る。これらの動詞類は Josephs (1976) の分類では〈direct〉にまとめられる。言い方を換えれば、これらの動詞類は基本的にものごとや感情を直接に知る、または感じるという意味を持つ。「直接」という概念はここでも現れる。

さらに、先行研究から、「の」と「こと」は基本的に同時性と非同時性という区別が可能であるが、一点念頭に置くべきことがある。それは、「の」と「こと」の特徴づけは、「の」と「こと」全般には成り立たないことである。さらに、「の」と「こと」の特徴づけは、「の」「こと」と共起する動詞とが意味的に両立可能かどうかである⁶。つまり、例えば (14) のように、同時性を満たしていない「の」も存在する。

(14) 太郎は花子が来週アメリカに行くのを知らなかった⁷。

(14) は、「の」節の「花子が来週アメリカに行く」が未来の出来事であることから、「知らなかった」との同時性が捉えられなくなり、「の」が「こと」に置き換えられる⁸。ここでもう一度確認すると、「の」の同時性は「の」に内在する特徴づけではなく、「の」節と主部の述語の意味的な両立によって導かれるのである。

本章では、以上をもって「の」は事態の同存性・密接性を保つ機能を持つとする。この特徴は先行研究で明らかになった「の」の特徴、つまり「同時性」、「直接 (direct)」、「密接性」と同じである。しかし、上でも論じたように、この特徴も「の」の使用の全般において絶対的なものではない。次節で検討するコト名詞句の主題における意味解釈も、前後の事態間の意味的な両立可能性によるのである。

⁶ It becomes clear that koto and no are semantically distinct from each other in a very basic way and that the cooccurrence restrictions observed between koto/no and matrix verbs are not idiosyncratic but are due to a principle of semantic compatibility (Josephs 1976:309).

⁷ 三原健一先生からのご教授による。

⁸ 「分かる、知る、悟る」は、「の」と「こと」をどちらも取る動詞である (Josephs 1976:340)。

ここまで、動詞について先行研究のもとでまとめた。形容詞において「の」と共起する形容詞⁹は本章のデータのもとでは、動詞の場合と同じ傾向になる。つまり、感情形容詞は「こと」よりも「の」と一緒に表れることが多い。

2.2 「の」「こと」と形容詞類

形容詞は、属性形容詞と感情形容詞に大きく分かれる。益岡（1987）の規定によると、属性形容詞は属性叙述文、感情形容詞は静的事象叙述文を構成する。ものごとの性質・特徴を描写するのが、属性形容詞の基本的用法である。それに対して、発話時における話し手の感情を描写するのは、感情形容詞の基本的用法である¹⁰。

以下は「の」と形容詞述語の文である。

- (15)a. 制度を変えるのは、一番簡単だ。
 - b. 自分に向いているものを探すのは、楽しい。
 - c. そういつてくれるのは、うれしい。
 - d. 君たちと別れるのは、とても寂しい。
 - e. 女性だけで死体を始末するのは、無理です。 (容疑者 X の献身)
 - f. このことをあなたに教えるのは、実に心苦しい。 (容疑者 X の献身)
 - g. その宝が偽物だと証明するのは、時に本物を探すより難しい。
- (ダヴィンチコード)

形容詞文では、「の」が共起するだけでなく、「こと」ももちろん共起する。

- (16)a. ストレスをストレスと自覚することは、ある意味重要です。
- b. 関節を鳴らすことは危ないです。

⁹ ここでの形容詞は、イ形容詞、ナ形容詞の両方である。

¹⁰ 感情形容詞述語はある時空間での表現者の感情・感覚を描写するのが基本である（益岡 1987:31）。

- c. どちらの立場でも、相手の立場になって考えたりすることは、大事ですね。

<http://www.hitachi.co.jp/universaldesign/backnumber/column/20051212>

- d. 現実的に考えれば、子供を増やすことは、難しい。

<http://www.heri.or.jp/hyokei/hyokei81/81zinko.htm>

- e. 弱点を持たない人間などいないし、ある評価において弱者とされる人からの美質を見出せることは、少なくない。

http://www.nextftp.com/140014daiquiri/html_side/hpfiles/adjust/passive5.htm

- f. おかしい、理不尽と思うことを変えることは、厳しい。

<http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/Watcher/20060730/244646>

- g. 企業が成長を目標にすることは、間違いである。

<http://www.iot.ac.jp/manu/ueda/column/060708.html>

「の」ならびに「こと」と共起する形容詞をまとめてみると、次のように挙げられる。

「の」と一緒に現れる形容詞

大変 楽 ダメ しょうがない 良い たまらない 稀 久しぶり 残念 無理 珍しい 難しい 普通 当然 当たり前 偶然 危ない 厄介 筋ちがい たやすい 容易 簡単 間違いない 確か 確実 大事 失礼 無責任 望ましい 早い いや 寂しい うれしい 苦しい はずかしい 楽しい こわい 辛い 面白い 恐ろしい もどかしい おかしい 気持ちが悪い 業腹 心細い 心強い 心苦しい まずい

「こと」と一緒に現れる形容詞

大切 大事 重要 必要 間違いない 多い 少ない 正しい 無理 危ない 稀 明らか 簡単 明白 不安 めったにない 大きい おかしい 厳しい 苦しい 辛い 楽しい 難しい 思い出しやすい 有名 確か 確実

「の」と「こと」に現れる形容詞からは属性形容詞も感情形容詞も観察できるが、感情形容詞は「こと」より「の」と共起する場合が多い。

感情形容詞は、発話時に話し手の感情を描写するという基本的用法を持つ。そして形式名詞「の」は事態をそのまま体言化し、事態の同存性を保つ機能を持つ。つまり、「の」は事態を形態的に体言化するものの、事態そのものはそのまま具体的に起きているかのように捉えられると考えられる。そして「の」で名詞化された事態がこのように捉えられることによって、これにより引き起こされる感情との直接性、密接性が生まれる。「の」で体言化される事態が、具体的な出来事として捉えられることは、次のような動作が、行われる期間を表す表現と共起することも根拠となる。

- (17)a. 上のグラフを見ても分かるとおりに侵入するのに5分かかると侵入者の約7割はあきらめ、10分以上掛かると侵入者のほとんどはあきらめるといわれます。

<http://www.homepage3.nifty.com/fujikane/harizainikakerujikan.htm>

- b. カイジを一冊10分で読み終わる俺が4冊飲むのに1時間半くらいかかったからな。

http://www.blog.livedoor.jp/vip_2ch_net/archives/51040438.html

それに対して「こと」は、基本的に事態そのものを抽象度が高いものとして体言化する。形式名詞「こと」の抽象度の高いことは、抽象的な概念を示す「こと」と度合を表す「多い、少ない」から成り立つ、「—ことが多い」「—ことが少ない」のような表現形式があることから伺える。感情形容詞は「こと」形式とは共起するものの、発話時の感情の描写というよりも、抽象度の高いものの属性の描写である。

2.3 感情形容詞とことがら

感情形容詞とは、一般の定義によれば、人間の内的な感情・感覚を表す語である。感情・感覚は人間の内的な状態であるため、外から叙述することができず、感じ手しか叙述できない状態である。そのため、感情形容詞の構文上の特徴として一人称に限られ

るという「人称制限」がある。感情形容詞文は、感じ手が一人称のため省略されることがよくあり、「対象（原因）」が主題化されて「は」で表示されることが一般的である。

そして、感情形容詞における「原因」が主に“ことがら”を示すことは、暗黙の了解であろう。例えば、(18a)のように「別れ」は感情の「原因」を意味する抽象的な概念のことがら、(18b)は「の」形式の名詞句の主題が感情の「原因」のことがらとして考えられる。

(18)a. 別れが淋しい。

b. 君たちサボテンと別れるのは、とても寂しい。

さらに、(19a)のシテ形接続、(19b)の条件節もことがらの原因として捉えられる。

(19)a. あなたにお逢いできてうれしい。

b. 五日間、旅行していたわけですから、スーツケースかボストンバッグを持っていなければ、おかしいと思うのですよ。(富士・箱根殺人ルート)

(20) この手紙はうれしい。

感情形容詞はことがらと共起しやすい。それは、人間の感情というものは、自立的に現れるものでなく、何らかのことがらをきっかけにしてそれに引き起こされるものであると理解できるためである。もちろん感情形容詞は、(20)のようにものをもってその感情を叙述することがある。だが、この「手紙」というものは形態的に語ではあるが、「この手紙が届いたことがうれしい」のようにことがらの意味を背負っている。

(20)は表現類型の観点からいえば、判断文であり、有題文であることから、あることがらについて、自分の考えや感じ方を述べ、解説を叙述する文である。つまり、この文は属性描写文であり、「この手紙がうれしいものだ」のように、「この手紙」が属性の持ち主を示す文に相当するのである。しかし、すべての形容詞文の「の」形式の主題が属性の持ち主という意味関係をもつわけではない。例えば、(21)の「(ちょっと神経質なゴリラだったが、)いなくなる」という事態は、属性の持ち主とは言い難い。

- (21) ショウが来たときからの飼育員担当だった今西亮(52)さんは「ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい」と話した。(朝日朝刊 03/09/27)

この例では、事態は属性の持ち主というよりも、具体的な出来事としての「原因」という意味の方が適切である。それは(22)のように言い換えられることも根拠となる。

- (22) ショウが来たときからの飼育員担当だった今西亮(52)さんは「ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなつて、さびしい」と話した。

(21)は属性を描写する文として解釈されると違和感を感じる。(21)が(22)のようにパラフレーズできるのは、(22)のように事態の生起の順序、つまり継起的関係が成立するからである。

3. コト名詞句の主題の意味解釈

(23)と(24)は形式の点において同じであるが、意味解釈において、異なる点がある。

- (23)a. 自分に向いているものを探すのは、たのしい。

- b. 言葉が必要ないとき、言葉を発するのは、悲しい。

- c. 僕の友達の経験では、同好の友を得るのは、大変難しい。

<http://www.kcc.zaq.ne.jp>

- (24)a. ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい。(=(21))

- b. 対象年齢がひろがるのは、うれしい。

- c. 新入生歓迎会…。日本人留学生ともにニューフェイスが増えるのは、うれしい。<http://www.home.hiroshima-u.ac.jp/iahuhp/snaps/040526.htm>

上の二種類の文は形式の上では同じ文であるが、継起的関係が成立するかしらないかという違いがある。まず、継起的関係とは何かという意味の定義を確認する。

継起とは、Pで表される事態が先に生起し、Qで表される事態がそれに続いて起こる、といった時間的に先行・後続の関係を表すものである。

この定義をもって(23)には継起的関係が感じ取れないが、(24)には感じ取れる。これだけでは判然としないため、「の」形式の主題をシテ形接続とパラフレーズすると、それぞれ(25)と(26)のように明確に分かれる¹¹。

(25)a. ?自分に向いているものを探して、たのしい。 (= (23))

b. ?僕の友達の実験では、同好の友を得て、大変難しい。

c. ?言葉が必要ないとき、言葉を発して、悲しい。

(26)a. ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなって、さびしい。 (= (24))

b. 対象年齢がひろがって、うれしい。

c. 新入生歓迎会…。日本人留学生ともにニューフェイスが増えて、うれしい。

ここで(25)(26)と同じ種類の文をさらに挙げていく。

(27)a. こんなところまで来て手ぶらで帰るのは / ?帰って、寂しい。

b. その気持ちを隠すのは / ?隠して、もっと苦しいよ。

c. 興味のないことをやるのは / ?やって、つらい。

d. 一人で原稿を書くのは / ?書いて、つらい。

e. 自分の力になる人と一緒にドライブするのは / ?ドライブして、うれしい。

f. 気が合う人と話しながら酒を飲むのは / ?飲んで、たのしい。

(28)a. 君たちと別れるのは / 別れて、寂しい。

b. 長い出張で子供と離れるのは / 離れて、つらい。

¹¹ 例文の文法性判断は判断者による揺れがある。

- c. わずか数日で三輪車に乗れるようになった悠樹。とても楽しそうでした。
でも、一緒に自転車に乗る機会が減るのは / 減って、さびしい。
<http://members.jcom.home.ne.jp/7of9/snikki044.html>
- d. そう言ってくれるのは / 言ってくれて、うれしいけど。
- e. 子供たちが漢字の書き取りテストで 100 点取るのは / 100 点取って、
うれしい。 <http://www.morinogakko.com/print/kanjiSiyo.htm>
- f. 意見が割れるのは / 割れて、おもしろい。世論が一色になったらこわ
い世の中ってことだからね。
<http://sakumania.com/diary/nikki/040523.html>

シテ形接続に書き換えられるということは何を意味するのか。広く知られているように、シテ形接続の主節への意味的關係は「付帯状態」「継起」「並列」のように大きく分かれる（それぞれのタイプの特徴や実現する条件は仁田（1995）を参考）。ここで書き換えることが可能なシテ形接続は、紛れもなく「継起」である。以下でそれぞれのグループから代表をとって検討する。

- (29) ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは / いなくなつて、さ
びしい。

(29) において「そのゴリラがいなくなる」コトは、先に生起し、それに続いて「さ
びしい」という感情が生起する。このような時間的先行・後続の關係が読み取れるから
こそ、「いなくなつて、さびしい」のような形が取れるのである。つまり、(29) が代
表とする「の」形式の主題文には、継起的關係が潜在している。シテ形接続との置き換
えによって、継起的關係が強調されるといえる。

- (30) 自分に向いているものをさがすのは / ?さがして、たのしい。

それに対して (30) のような文には継起的關係がない。(30) に代表される「P は
Q」の P と Q は、共に時間の流れの中で連続的に生起するということがらとしては捉え
られない。

継起的関係にある「PはQ」が、なぜそう読み取れるかについては次節で考察する。

3.1 コト名詞句の主題と継起的関係

第1章3.3節において、「は」の意味解釈には従来の研究で条件的解釈とされるものがあると述べた。主題文と条件文の共通点は事態の生起の順序の存在である。つまり、Pは具体的に起こったこととして捉えられたのち、Qはそれに続いて起こると認定される。継起的関係はこうした条件のもとで成り立つと思われる。

先述の(29)には継起的関係が成り立つが、(30)には成り立たないことは、まず「の」形式の主題の事態に要因があると考えられる。継起的関係が捉えられる「の」形式の主題の事態は、事態全体は個別・一回的な事態として把握できる。さらに、本章の前半で述べた「の」の特徴から考えてみると、「の」は前後の事態の密接性を保つという点で、「の」が表す事態と感情の生起が連続して起こることを強調する。さらに、発話時における話し手の感情を表す感情形容詞の基本的な用法も、(29)などのような文の継起的関係を強調するもう一つの条件である。しかし「の」のこうした特徴はあくまでも周辺の条件であり、事態が一回的な事態として解釈可能かどうかが主な条件になる。具体例の(31)を見る。

(31)a. 言葉が必要ないとき、言葉を発するのは、悲しい。

b. 真面目に生きるのは、つらい。

c. 仕事しながら酒を飲むのは、たのしい。

(31)の「の」形式の主題の事態は、総称の読みがしやすく、いずれも反復の読みを捉えやすい事態である。さらに、個別的な事態を示すシテ形接続に書き換えることができない。このように、(31)の「PはQ」においてのPはQに先行するものの、事態の生起が複数回に及ぶことであるから、文全体は恒常的な属性を叙述するという意味に解釈しやすい。

「の」形式の主題の内的構造が、個別・一回的な事態を示すか恒常的な事態を示すかはまず、内的構造に共起する動詞類から考えられる。個別・一回的な事態の「の」形式

の主題に現れる多くの動詞類は限界的動詞類¹²に属し、「増える、ひろがる、なる、別れる、離れる、減る、くれる、取る、割れる」などの動詞が観察できる。一方、恒常的な事態の「の」形式の主題は、非限界的動詞類に属し、「探す、得る、発する、帰る、やる、書く、ドライブする、飲む」などで事態が構成される。だが、非限界的動詞で事態が構成される「の」形式の主題でも、事態が一回しか起こらないと解釈されれば、個別・一回的な事態になる。

(32) やっぱり仲間と会うのは / *会って, うれしい。

(33) こういう場所でお前に会うのは / 会って, 悲しい¹³。

「会う」は非限界的動詞であるので (32) は恒常的な事態の解釈になるが、(33) は一回的な出来事に解釈される。(33) は「の」形式の主題の事態と、悲しいという発話時に表れる感情の生起とが密接であるという意味が強いためである。それと同様に、

(34) の限界的動詞も恒常的な事態を示すことがある。

(34) その気持ちを隠すのは / ?隠して, もっと苦しいよ。 (= (30b))

以上をまとめると、「の」形式の主題文には、主題の内的構造の事態と感情形容詞述語によって示される事態のあいだに、継起的関係が成り立つ文と成り立たない文がある。継起的関係に成り立つか否かは、「の」形式の主題の事態が個別・一回的な解釈が主な条件であるが、このように解釈するには、周辺的な条件が先に成立しなければならない¹⁴。

次節では継起的関係に成り立つ文は、どのような意味を持つ文なのかを考察する。

¹² 本章は工藤(1995)の限界・非限界動詞のリストを参考する。

¹³ この例は仁田義雄先生からのご教授による。

¹⁴ これは Josephs (1976) の意味的な両立に連動する。

3.2 因果強化読み

継起には時間的継起と起因的關係がある。時間的継起は P と Q はただ単に時間的な先行關係にあるだけであり、起因的継起は P の生起が Q の生起の起因となると捉えられる(仁田 1995)。継起的關係が成り立つ「の」形式の主題文は因果読みが強調される。すなわち、文としては有題文であるが属性文の色合いは薄く、P の生起が Q を引き起こすという因果読みが強化される。

(35) ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのはさびしい。 (= (29))

(36) わずか数日で三輪車に乗れるようになった悠樹。とても楽しそうでした。

でも、一緒に自転車に乗る機会が減るのはさびしい。 (= (28c))

(35) は飼育員さんがインタビューに応じた会話の中から取ってきた例文である。

(36) は母親の思いを描いた例文で、その機会が減ることを今でも起こっているかのよう
に想定し、それがさびしいという感情の起因となっているという因果読みが強い。両
文とももともと因果読みが強化される文である。

以上の文は、具体的なことがら (P) と非意図的なことがら (Q) から成立する。感情形容詞は基本的に非意図的であり、人間がコントロールできないものである。それゆえ、感情の表れの原因となる出来事は前提に生じなければならない。さらに、感情形容詞は基本的用法として一時的状態を表す。しかし、因果読みとなるためには、時間的継起の方が重要である。以下の例を比較しながら検討していく。

(37) 自分に向いているものを探すのは、たのしい。

(37) は、(35) と (36) と同じく、(主題内の抽象的) ことがらと (形容詞述語による非意図的な) ことがらで構成されると考えられるが、継起的關係が成り立たない文という点で異なっている。また、文の意味は属性を描写する文として考えられる。しかし、この文は因果読みがまったく出来ないということにはならない。むしろ、(37) は (35) (36) と違って因果読みの色合いは強くないものの、恒常的な因果の意味を示す。大きな相違として、(37) においては、「の」形式の主題のことがらとたのしいと

いう感情の生起は複数読みが可能であり、たのしいという感情と「の」形式の主題の事態が同時に起きる必要がなくなる。つまり、前の事態と後の事態が切り離されて読まれることが因果読みの色合いを希薄にするといえる。その結果として、事態の生起の時間的な密接性が捉えられなくなる。このように、(37)などの文は因果読みができるとしても、属性読みの方が強化されているという論で説明が可能となる。

同形の「PはQ」を構成する主題文のすべてが、必ず同質の文になるわけではない。以上の(35)(36)及び(37)は共通して因果読みができるものの、(37)は恒常的な因果読みにより文全体として属性文になる。だが、(35)と(36)は一時的な因果読みとして継起的関係が捉えられることもあって、文全体として属性文にはならない。

4. コト名詞句の内部構造の問題

継起的関係に成り立つ「の」形式の主題は、その内部構造において節 (clause) として考えられることを、この節では主張する。ここでいう内的構造とは、(38)の鉤括弧の部分を目指す。

(38) [自分の育てた馬が今幸せだと分かる] のは、うれしい。

本節では、主に田窪 (1987) と金水 (1987) を援用する。田窪 (1987) と金水 (1987) では、次の (39) などのような「の」または「こと」という形を持つ節を従属節として扱っている。その際、従属節内の主語のあり方としては、(39) のような音形を持つ代名詞のほかに、音形を持たない主語は (40a) の総称的な代名詞の PRO、(40b) の統制指示的代名詞の PRO、(41) の文脈指示的代名詞の pro のように分布する。

(39) [汗が出る] のは健康によい。 (田窪 1987)

(40)a. 私は [PRO 行くこと] を約束した。 (同上)

b. 私は [PRO 歩いていく] のは難しい。 (金水 1987)

(41) [pro [歩いていく] 時制] ことは明らかだ。 (田窪 1987)

(39) は動詞句であり南 (1974) の A 類の階層に当たるが、非意志的動作・過程の主体を表す主語が現れることができる。総称的な代名詞の PRO と統制指示的代名詞の PRO は動詞句に現れる音形のない主語となるが、文脈指示的代名詞の pro は節に現れる主語となる。この観点によれば、(40) の鉤括弧の部分は動詞句に、(41) の鉤括弧の部分は節に相当する¹⁵ (田窪 1987、金水 1987)。

しかし、次で明らかになるように、統制指示的代名詞の PRO は動詞句にはもちろん、節にも現れることができると考えられる。本節が取り扱う「の」形式の主題の内部構造を節として扱える最初の証拠として、南 (1974) の B 類句の「ので」節の埋め込みテストがある。

- (42)a. [海外出張があるので、なつみちゃんと離れる] のは、さびしい。
 b. [お金がないので、長年大事にしていた阪神のユニフォームを手放す] のは、かなしい。
 c. [明日から留学するので、君たちのサボテンと別れる] のは、さびしい。
 d. [新たな飼い主と親しくなっているので、自分の育てた馬が今幸せだと分かる] のはうれしい。

(42) はいずれも「ので」節を埋め込んで意味解釈が可能である。次に主語のあり方を検討する。

- (43)a. [PRO_i なつみちゃんと離れる] のは、t_i、さびしい。

¹⁵ 田窪 (1987) の文の階層は、南 (1974) の階層を修正し、統語範疇と対応する意味タイプを類と次のように示している。

A類1 :	様態・頻度の副詞、動詞	動詞句	動作
A類2 :	頻度の副詞、 <u>対象主格</u> 、動詞 (+否定)	動詞句	動作
B類 :	制限的修飾句、 <u>動作主格</u> 、A、(否定)、 <u>時制</u>	節	事態
C類 :	非制限的修飾句、主題、B、モーダル	主節	判断
D類 :	呼びかけ、C、終助詞	発話	伝達

- b. [PRO_i 長年大事にしていた阪神のユニフォームを手放す] のは、t_i かなしい。
- c. [PRO_i 君たちのサボテンと別れる] のは、t_i さびしい。
- d. [PRO_i 自分の育てた馬が今幸せだと分かる] のは t_i うれしい。

(43) の主題の内部構造の音形のない PRO は感情主と同一である。さらに、これらの PRO は統制指示的代名詞である。統制指示的代名詞とは、文内で他の名詞句を指すという用法をもつゼロ代名詞の一種であり、(43) のように内的構造の主語と感情主と同じ対象を指すことが義務付けられる¹⁶。つまり、この PRO は感情主自身を指す。これによって、統制的 PRO は田窪 (1987) と金水 (1987) の論に反して B 類に現れることになる。先行研究における統制的 PRO が A 類にだけ現れるという結論は、分析の対象が動詞文や属性形容詞文などに限られたことに原因がある。

上記の先行研究の問題点についてもう少し詳しく述べると、田窪 (1987) の取り上げた動詞文の例文 (40a) には問題なく総称的代名詞の存在が認められるが、金水 (1987) が挙げられた (40b) は、根本から統制的 PRO の存在の積極的な証拠ではないと考えられる。その要因は、「むずかしい」が評価的なニュアンスを持つ形容詞だからである。さらに、「私はうれしい」は容認可能であるが、「私はむずかしい」は容認性がない。それは「むずかしい」が「うれしい」のように、話し手の内面的な心理状態を直接的に表すことができないからである。従って、(40b) の「私」は主節の「むずかしい」の述語の主語ではなくなり、従属節のゼロ代名詞を統制する機能を持たないといえる。

さらに (44) を見られたい。(43) は主題の内部構造と主文の主語が同一であることを示す文である。一方、(44) は主題の内的構造の主語と感情主が異なる文であるが、(43) と同様に個別的・一回的な事態を表す文と考えられる。

¹⁶ 音形を持たないゼロ代名詞の用法には次のようなものがある。

- (1) 文内で他の名詞句を指す。
- (2) 動詞の種類により、主文の主語または目的語にコントロールされる。
- (3) 文脈的・直示的情報によって指示対象が決定される。(原口・中村 1992)

(44)a. ちょっと神経質なゴリラ_iだったが、[pro_{i*}_j なくなる] のは、t_{j*}_i さいしい。

b. バンドとしては自分達の作品を演奏したいだろう。当時はあまり注目されなかった曲も果敢にチャレンジし [今でも十分通用する曲として pro_{i*}_j 披露してくれる] のは、t_{j*}_i うれしい。 <http://blog.sonet.ne.jp/firmament>

(43) と (44) は共に個別的・一回的な事態を表す文で、因果強化読みである。それとは対照的に、(45) の属性読みの内的構造に「ので」節を挿入してみる。(45) の内部構造は田窪 (1987) の動詞句に相当する。

(45)a. ?? [時間があるので、自分に向いているものをさがす] のはたのしい。

b. ?? [時間があるので、新しいことにチャレンジする] のはたのしい。

c. ?? [百科事典を読んでいるので、知らなかったことを知る] のはおもしろい。

d. ?? [空気を読めないので、言葉が必要ないとき、言葉を発する] のはかなしい。

このテストの結果、(45) のように「ので」節を埋め込んで意味解釈すると不自然である。つまり、鉤括弧の部分は、南の分類による B 類ではないことが明らかである。次に、主語のあり方を (46) (= (45)) で確認する。

(46)a. [PRO_{arb} 自分に向いているものをさがす] のは、たのしい。

b. [PRO_{arb} 新しいことにチャレンジする] のは、たのしい。

c. [PRO_{arb} 知らなかったことを知る] のは、おもしろい。

d. [PRO_{arb} 言葉が必要ないとき、言葉を発する] のは、かなしい。

(46) は文の述語が感情形容詞であっても、属性読みとなる場合の文である。それゆえに、主題の内部構造に現れる PRO も PRO arbitrary (PRO_{arb})、つまり恣意的な PRO である。恣意的 PRO は特定できない対象を指す。(46) は (40a) と同様、動詞句相当であると考えられる。一方、(43) と (44) の内部構造には主語の存在が認め

られることや、他の B 類の成分と共起できることから、節として扱えると考えられる。ここで、さらにもう一つ検討しなければならない問題は、(43) と (44) には時制があるのかという問題である。

前節では、これらの文は継起的関係が成り立つ文であるためには、「の」形式の主題と後続命題が継起的に生起する必要があること、そしてその根拠としてシテ形接続への変換を挙げた。事態が一回的に起こって完了するような解釈ができれば、動詞類と関係なくシテ形接続に変換できる（(33) を参照されたい）はずである。だが、「完了」は時制の範疇ではないから、時制の存在は依然として確認できない。しかし、内部構造がタ形述語を取る「の」形式の主題の場合は、ル形述語を取る「の」形式の主題よりもその検証は容易である。

(47) そいつを見逃したのは、とっても腹立たしいです。（富士・箱根殺人ルート）

(48) 演奏会場が潰れていく中で演奏する機会が増えたのは、うれしいです。

<http://www.phiharmonic.jp/olddiary/?1130>

タ形の場合、発話時以前を明示する時間の表現と、「今思うと」の表現を付加することができる。

(49) 当時そいつを見逃したのは、今思うととっても腹立たしいです。

(50) 昨年、演奏会場が潰れていく中で演奏する機会が増えたのは、今思うとうれしいです。

「の」形式の主題の内的構造が時間の表現を取ることができることは、タ形の場合の「の」形式の主題の内的構造が、時制を持つことを表す。このタ形は過去の時制を示す。(49) と (50) において内部構造の事態は過去に、感情生起は発話時現在に振り分けられる。このように内部構造の事態がタ形の場合は明らかに時制を持ち、節として扱えると考えられる。さらに、内部構造事態がタ形述語である「の」形式の主題文の場合には、内部構造の事態と感情の生起の事態の間の継起的な関係が薄い。内部構造事態の生起は、感情の生起と時間的にかなりかけ離れている。(47) と (48) の内的構造の事

態はただ単に感情生起の前提になっており、感情はそれに続いて生起するという意味は掴みにくい文である。

内部構造事態の述語がル形となる「の」形式の主題の場合は、先行研究の成果を援用して時制の存在を確認する。金水（1987）は時制の表現について、本章の「の」と「こと」の形式の主題を名詞相当の従属節として扱った田窪（1987）に続いて分析を行っている。

金水（1987）は、時制がつくということは、その事態が発話時より以前に起こったとか以後に起こるとかいう時間関係に対応するのはもちろんであるが、「事態」が成立し、それがいわば「特定性」を持っているのだということを表示する、という性格があると述べている。具体例として「机」と「この机」の名詞の違いが取り上げられている。「机」は普通名詞で、特定の机を指すか机一般を指すかは決定されていない。つまり、この段階は世界のどの机とも関係していない。しかし「この机」や「あの机」になると、話し手を中心とした発話現場に特定の対象を結び付けられることになる。ここでの指示的な規定を受けない「机」は文の構造に当てはめると、南（1974）の分類ではA類である。「この」や「あの」は発話現場での空間的な指標となるが、時制も発話時を基準にした時間的指標となる。つまり、時制を持つB類のゼロ代名詞は、既に特定性が与えられなければならない。それゆえ、時制を時間的な特定性を示す指標として捉えたと、時制が表す時間的關係が必ずしも「現実の」ものでなくても構わないことが了解できる。これに関しては次の例が挙げられている。

(51) 君が教えてくれなかったら、私は反対向きの電車に乗っていたよ。

(51)の「タ」は時制を表すものの、「私は反対向きの電車に乗っていた」ことは実際に起こったことではない。「君が教えてくれなかったら」という、仮想世界において成立する表現によって、「私は反対向きの電車に乗っていた」という事態がその仮想世界において成立するのである。時制は、事態が現実にも属するものか、非現実にも属するものかということには直接には関わらない（金水 1987）。

内部構造述語がル形の「の」形式の主題は、以上のような意味で時制を持つと考えられる。つまり、(43)と(44)をもう一度挙げて述べれば、主語はそれぞれ、統制的PROと文脈指示的代名詞proであり、どちらも特定性を持つゼロ代名詞である。さら

に、示される事態は実際には生起していない事態であっても、生起したかのように捉えられ、後続する感情の生起の前提になる。つまり、事態が生起したかのように捉えることは、その事態が既に特定性が与えられていることと同じである。また、文の述語が感情形容詞述語であることもあって、発話時に感情が存在するためには前提の事態が先に生起しなければならない。

以上のような時制の特徴から、(43) と (44) には時制の存在が認められる。本章は「の」形式の主題の内的構造は節であると主張する。

5. まとめ

以上のように、「の」形式の主題文には継起的関係に成り立つ場合があれば成り立たない場合もある。主題の内部構造と文で示される事態とのあいだに、継起的関係が成り立つ「の」形式の主題文において、「の」の内的構造が意味的に個別的・一回的な事態として解釈できることは継起的関係の意味に繋がる。それゆえに、継起的関係に立つ

「の」形式の主題文は、因果的關係の意味が強化される。さらに、継起的関係に立たない「の」形式の主題文は、恒常的な因果関係（属性文）の意味が読み取れる。本章では「の」形式の主題の内部構造述語がル形の場合を主に扱ったが、この場合は継起的関係を持つ。一方、主題の内部構造述語がタ形の場合は、(49) と (50) のように内部構造事態の生起と感情生起には時間的な間隔があり、事態の密接性が捉えられなくなる。よって、「の」形式の主題の内的構造を節として捉えることは、上の意味解釈を立証すると考えられる。

第5章 タイ語の主題

1. はじめに

本章はタイ語の主題を分析対象とする。タイ語の主題は如何なる特徴を持つかについて述べる。本章では、日本語の主題はタイ語の主題においてどの程度適用されるかということを前提にタイ語の主題の分析を進める。

本章の構成は大きく前半と後半に分かれる。前半はタイ語の主題を表す手段について述べる。タイ語の主題は如何なるものか、如何なる手段で表現されるかを述べる。タイ語は従来文法的手段で主題を表すと言われてきたが、「は」のような形態的手段もあることを提案する。後半では日本語で観察できた二重主題文、二重主語文¹およびコト名詞句の主題文はタイ語の中においては如何なる存在であるのか、如何なる特徴を持つかについて概観する。

2. タイ語と主題

タイ語の主題はいかに表現されるかを説明する前に、タイ語はどういう言語なのか簡単にまとめておきたい。タイ語は修飾語が後置修飾になる以外、中国語と非常によく似た性格を持つ。つまり、タイ語はSVOの語順を用い中国語と同じく孤立言語に属する言語である。名詞には性、数による活用がない。動詞においても活用語尾がなく同じ形で過去も現在も未来も示す。つまり、動詞のテンスや人称による形態変化も格による変化も存在しない。形容詞と動詞の違いが曖昧でどちらもほかの語を伴わずに助動詞を伴うことができ、さらに、ほかの語を伴わずに名詞を修飾する事もできる。また、動詞と形容詞はほかの語を伴うことがあるが、基本的にはそのまま名詞として扱うことができる。また名詞も修飾語として、ほかの語を伴うこともあるが、基本的にはそのまま利用できる。語彙が中国語と同じく少ないので熟語が多い。タイ語の基本語順は(1)となる。

¹ ここでいう二重主語文は本稿の第2章で取り上げられた野田(1988)の「象は鼻が長い」型と菊地(1995)の基本型の「の」対応型に相当する。

- (1) a. S+V+OBJ
 b. S + (NEG)+VP +OBJ+AdvP

- (2) a. *kháo kin khâao*

彼 食べる ご飯

彼はご飯を食べる。

- b. *kháo mâi kin khâao*

彼 NEG 食べる ご飯

彼はご飯を食べない。

- c. *fôn tòk nàk mâak*

雨 降る 激しく とても

雨は激しく降った。

(2a) は平叙文、(2b) は否定文、そして (2c) は自動詞文となる。状況成分の基本的な位置は (3) のように VP の後ろであるが、(4) のように文頭に現れることが多い。

- (3) *fôn tòk nàk mâak thîi-Chianmài muawaannîi*

雨 降った 激しく とても 大変 で - チェンマイ 昨日

昨日、チェンマイで雨は大変激しく降った。

- (4) a. *thîi-Chianmài fôn tòk nàk mâak*

で - チェンマイ 雨 降った 激しく 大変

チェンマイでは雨が大変激しく降った。

- b. *muawaannîi fôn tòk nàk mâak*

昨日 雨 で - チェンマイ 雨 降った 激しく 大変

昨日は雨が大変激しく降った。

(4) はそれぞれ場所の状況成分と時の状況成分が文頭にくる文である。さらに、場所の状況成分と時の状況成分を両方とも文頭に持ってくることも可能である。

(5) a. thîi-Chiapmài muawaanîi fôn tòk nàk mâak

で - チェンマイ 昨日 雨 降った 激しく 大変 とても
チェンマイでは昨日は雨が激しく降った。

b. muawaanîi thîi- Chiapmài fôn tòk nàk mâak

昨日 で - チェンマイ 雨 降った 激しく 大変 とても
昨日はチェンマイでは雨が激しく降った。

タイ語には格助詞がないことから語順は日本語ほど自由とは言えないが、修飾語（場所や時の状況成分）はかなり自由に配置される。さらに、タイ語では主語を省略することが可能である。

(6) (Chán) nuai lɛɛo

(私) 疲れる PERF

もう疲れた。

(6) の場合、主語は話し手自身のため、省略することができる。一方、(7) では相手が省略される。

(7) (Khun) nuai mái

(あなた) 疲れる QUES

疲れませんか。

(6) と (7) の主語省略は主題卓越型言語の一つの証拠と言われる。タイ語にはタイ語が主題卓越型言語であるという言語事実が幾つかある。それは先述した主語省略が可能なことや二重主語文の存在などが主題卓越型言語の特徴として挙げられる(Li and Thompson1976:468-469)。

タイ語は幾つかの主題卓越型言語の特徴を持つものの、主題に関する本格的な研究は日本語と比較すればまだ遅れている分野である。タイ語において主題または主語は以下のように説明されている。

Prasitrathasin (2001:54) では topic-comment のことを ruag (เรื่อง) -
nuakhwaam (เนื้อความ) と呼び、タイ語が phaasāanénruag (ภาษาเน้นเรื่อง) と説明し
ている。phaasāanénruag (ภาษาเน้นเรื่อง) というのは、すなわち主題を強調する言語
で、主題言語のことである。そして例文として (8) が上げられている。

(8) *khanǝm n̄i m̄ai ʔarɔi* (Prasitrathasin2001:54)
 お菓子 *n̄i* NEG おいしい
 (この)お菓子はおいしくない。

つまり (8) における「お菓子」は Prasitrathasin (2001) によればタイ語の中で主題である。ちなみに、(8) には主題を示す「nīi」がある。主題を示す「nīi」について後述する。

タイ語において主語は、prathan(ประธาน)、主題は ruay (เรื่อง) ということばに当たる。

3. タイ語で用いる主題を表現するためのその手段

本節では主題を表す手段について考える。主題を表す手段には大きく三つの手段がある。(この分け方は野田尚史(2004:194)を引用するものである)

1. 形態的手段：日本語の「は」 などのような形態。
2. 文法的手段：主題を文頭の方へ置くという語順の変更。
3. 音声的手段：主題の後の休止やイントネーション。

形態的手段をもつ言語は日本語を典型とする。日本語は、基本的に「は」がつくと、主題を表す。つけなければ非主題になるといったプロセスがある。このことから、日本語は主題という文法カテゴリーをもつと言える。次に文法的手段は主題を文頭の方へ置くという語順の変更である。代表的な言語として中国語、スペイン語、ロシア語などがある。しかし、野田（2004）ではそれらの言語の主題は文頭に置かれるものという言い方が正確ではないと指摘している。つまり、文法的手段で表現される主題において文

最後に音声的手段である。英語のような、形態的手段または文法的手段が主題表現法として補助的なものである言語は、主題を表すために主題の後の休止やイントネーションといった音声的手段が必要になる。

以上のように、主題を表すには主に三つの手段がある。日本語は形態的手段として「は」という主題判断様式でその主題を表現する。では、タイ語はどのようにして主題を表現するのかを次で検討したい。

タイ語では語順が主たる文法的手段となっている。つまり、主題を文頭の方へ置くという語順の変更を通し主題を表す言語である。下に具体的な例を挙げる。

- タイ語の基本語順は SVO であるが、(9) は対格項 *dinsɔɔ-nii* (この鉛筆) が文頭に置かれる OSV の語順になっている。*dinsɔɔ-nii* (この鉛筆) は主題化した文の主題である。タイ語ではこのような OSV の語順の文が多数ある (Panthumeethaa 1996: 64)。

- 103

この肉はおいしい

b. khon-khon-núi chưa mǎidài

人 - CL-この 信じる できない

この人は信じられない。

c. tó-núi chét lɛɛo

机 - この 拭く PERF

この机はもう拭いた。

(abc) において文頭にある成分は述語に対して対格項であるが、対格項の位置ではなく、文頭に現れることから、主題として捉えられる。ただ、文頭の位置にあるから、主題になるわけではない。(10) はいずれも状態性を示す文である。静的な文なので、文頭の対格項は主題と解釈しやすくなる。対格項はもちろんであるが、与格項も文頭の位置に現れることがある。

(11) rótkhannúi khonrót tæm náamman lɛɛo (タップティム 2005)

車- CL-この 運転手 入れる ガソリン PERF

この車は、運転手がガソリンを入れた。

(12) bǎtthoorasǎp phǎm tæm nɛn lɛɛo (同上)

電話カード 僕 入れる お金 PERF

電話カードは、僕がお金を入れた。

(10) の文は、rótkhannúi (この車) が、ガソリンが入っているという状態で存在することを説明している文である。タップティム (2005) は lɛɛo について若干考察した。lɛɛo は中国語の「了」に非常に似ている。lɛɛo は事態の「完了」を示すので、(11) と (12) の事態は実現済みで、静的な事態であるということが出来る。それゆえ、文頭の与格項は主題として捉えることが可能である。

以上のように、タイ語にはある成分を文頭の位置に持ってきて主題化する文が多数ある。文頭の位置にある成分は主題となることは多いが、必ずそうなると限らない。

(13) は疑問詞が文頭に現れる疑問文である。文頭にある疑問詞は主題にならない。

(13) khrai cà pai Tookiao

誰 FUT 行く 東京

誰が東京に行くの？

3.2 左方転位構文

語順で主題を判断する場合、対格項は主題になる場合、有標な語順、つまり OSV をもつが、主格項はそもそも文頭に存在するため、それが主題であったとしても、通常の語順、つまり SVO のままで表現される。従って、それが主題なのか主語なのか容易に判断できない。例えば、

(14) Thaaroo kin sôm

太郎 食べる ミカン

太郎は／がミカンを食べる

(15) Thaaroo kháo kin sôm

太郎 彼 食べる ミカン

太郎は彼がミカンを食べる

(14) において、Thaaroo (太郎) が主題なのか主語なのかは語順で区別できない。だが、(14) には、(15) のように同一指示代名詞が現れることがある。同一指示代名詞は書き言葉には現れることがないが、会話の中ではよく聞かれるものである。

(15) のような文は左方転位構文 (left dislocation) と呼ばれ、文頭に置かれる名詞句は話題 (topic) として機能し、それに続く文はそれについての評言 (comment) である。評言の中で主題名詞と同一指示代名詞が現れることはこの文の特徴である。英語において左方転位構文は主題文の有標な構文とされるが、タイ語と同じように特に話し言葉ではよく使われる。英語において有標な主題文は (16) の左方転位構文と (17) の話題化構文 (評言に代名詞が残らないもの) がある。

(16) Mary, John saw her yesterday.

(17) Mary, John saw yesterday.

英語の左方転位構文は先行文脈で現れていない名詞句が現れることが多く、話題を設定するという機能を持っている。それに対して話題化構文では、先行文脈で現れる名詞句が現れ、対照的な意味を持つことが多い。移動か基底生成かの観点に基づき、左方転位構文は、移動にかかっていない。

- (18) as far as John is concerned, I will never believe the claims that have been made about him.

him は基底生成される要素であり、主題が指示対象となっている。

タップティム (2005) ではタイ語の左方転位構文において同一指示代名詞の存在は「主題」とその後続の「主語 - 述語」の文とのつながりを保証するという機能を果たすと述べている。つまり、(15) は主題の「太郎」と後続の「彼がご飯を食べた」のつながりは同一指示代名詞の「彼」に保証されるのである。タイ語の左方転位構文の使われる環境として文脈が必要とされる。例えば、(15) をここで再度参考にすると次のような文の流れになる。

- (19) Niphaa: Thaaroo mǎi kin khanǒm ruu ²

太郎 NEG 食べる お菓子 QUES

ニパーさん：太郎はお菓子を食べないの？

- A. Deechaa: Thaaroo kǎo kin sôm

太郎 彼 食べる ミカン

デーチャーさん：太郎ってさ、彼、ミカン食べるんだ。

- B. Deechaa: Thaaroo kin sôm

太郎 食べる ミカン

デーチャーさん：太郎って、ミカン食べるんだ。

(19) において A の場合は前の文に現れる「太郎」を話題として受けて、「彼がミカンを食べる」で説明するが、B の場合であれば、会話の流れが途切れ、会話がスムーズ

² (19) は宮本マラシー先生からのご教授によるものである。

に行われなくなる。AとBの違いは自然か不自然かにあるのではなく、どちらの方が会話を円滑にするかにあると考えられる。左方転位構文は前の文とのつながりがつよいいため、初めに発話される文としては若干不自然である。本章は左方転位構文についてこれ以上触れないが、タイ語の中では左方転位構文が一つの主題文であることが確認できる。

ここまで、タイ語の語順と主題および左方転位構文を概観してきた。さらに、タイ語においては形態的手段を用いて主題を表すことがある。日本語の「は」と似ている働きをもつと考えられるものであるから、これらを主題マーカーとして扱うべきという提案を試みる。

3.3 主題を表す形態的手段の「nīi」と「nā」について

タイ語において中国語と同様 SVO 言語で主題を表す場合、(18)と(19)のように基本的に文法的手段の語順変化を用いる。

(20) 书在英文里叫 book。

(21) nāpsuu nai-phaasāaʔapkrit riak wāa Book

本 で - 英語 言う と Book

本は英語で Book と言います。

しかし、タイ語にも日本語の「は」と似ている働きを持つ成分がある。

(22) a. Plaamuk nīi cà hàn ruuplào

イカ nīi FUT 切る か

イカは切るのですか。

b. Phūut nā pāai, tɛɛ tham yāak

話すこと nā 易しい、でも 実行する 難しい

言うことはやさしい。でも、実行しにくい。

「nīi (ニー) 」と「nà (ナ) 」は (21) にはないが (22) にはある。(22) の名詞句に下接した nīi と nà の機能を検討した上で日本語の「は」のように主題標識としての程度言えるかを述べる。

スリヤウオンパイサーン (1995) では nīi について言葉、あるいはことがらのあとにつけて、それが文あるいは会話の話題であることを強調する。よく nà といっしょに用いられて nīi nà となる。話ことばでは nīa と発音されると述べている。

(23) a. Phaasāathai nīi yāak cīncī

タイ語 nīi 難しい 本当に

タイ語は本当に難しい。

b. Paakkaa nīi cà suu ruuplāao

ペン nīi FUT 買う か

ペンは買うのですか。

さらに、nà について、nà が付く語は、それが文の主題であることを強調すると述べている。

(24) a. Phūt nà pāai, tɛɛ tham yāak

((=22b))

話すこと nà 易しい でも 実行する 難しい

言うことはやさしい。でも、実行しにくい。

b. thīi phōm ʔathībaai nà, khāocai mái

こと わたし 説明する nà わかる QUES

わたしが説明したことは、わかりますか。

以上のように、語順という文法的手段の他に主題を示す形態的手段はタイ語にある。しかし、次で、どれほど主題マーカールとすることができ、主題マーカールとして扱えるのかを検討する。

3.4 nīi と nà の機能と語類

タイ語の中では nīi と nà が主題マーカークの側面を持つことに対する意識が薄れる。それは次で述べるように、主題を強調するという働きだけを持つものではないことや語彙的な意味がまだ残っていることなどの理由があるためであると考えられる。

3.4.1 nīi

現在日本人向けのタイ語文法書では nīi は基本的に指示詞と話題を強調すると説明しているが、タイ語学において nīi は指示性を持つ代名詞に類別される。日本語の「これ」に相当し指示詞の一種である。ちなみに指示詞の名詞修飾形態「この」に当たるのは別の声調で表現される「nīi」である。

(25) nīi khuu ʔarai.

これ COPU 何

これは何ですか。

つまり、nīi は指示性を持つ語として扱われている。さらに驚きの気持ちを表すときや感情をこめて理由を述べたり、行為を正当化したりするときに終助詞（文末助詞）としても使われる。

(26) a. ʔarai kan nīi, hɔŋ lɛthə māk

何 nīi 部屋 めちゃくちゃ とても

何なのよ、部屋がめちゃくちゃだ。

b. A: sɔɔp tɔk iik lɛɔ

試験に 落ちる また PERF

また試験に落ちちゃった。

B: bɔɔk lɛɔ nīi, hāi duunāŋsɯ kɔɔ māk chɯa

言う PERF nīi ように 勉強する だから NEG 信じる

ほら言ったじゃないの、勉強するようになって。信じないんだから。

まとめると、形式は同一であるが、*nīi* は話題を強調する主題マーカー (24)、指示詞 (25)、文末助詞 (26) の 3 つの機能を背負う。*nīi* は基本的に指示性を持つ代名詞であるため、話題を強調する場合、対象の主題名詞がその場にはないといけないという制約がある。これについて以下の *nà* と対比しながら述べる。

3.4.2 *nà*

nà は次のように書かれてある。

1. *nà* is used to create a pause after a subject pronoun. (Higbie and Snea 2002:291)
2. *nà* は語の後ろについて、それが文の主題であることを強調する。(スリヤウオンパイサーン 1995:36)

(27) a. *sua-tua-nīi nà, sīi chuutchàat*

シャツ - CL - この *nà* 色 派手

このシャツは、色が派手だ。

b. *thīi phǒm ʔathíbaai nà, khāocai mái*

こと わたし 説明する *nà* わかる QUES

わたしが説明したことは、わかりますか。

(スリヤウオンパイサーン 1995:36)

上の 1 と 2 は *nà* が主題マーカーという見解である。タイ語学では *nà* は文末に置かれ文のムードを示すと説明されている(Siihaumpai1991:269, Pankhuenkhat1998:199)。

(28) の *nà* は文末でムードを示す終助詞である。

(28) *thīi-bāan chái intəənet khəə Thruu yūu nà kháp*

で - 家 使う インターネット の ツルー ASP *nà* GEN

家ではツルーのインターネットを使っています。

Higbie and Snea (2002) では nà は主語の後に休止を置くと述べたが、(27b)から分かるように主語だけではなくむしろ文頭にきた対格項の後ろにも休止を置く。スリヤウォンパイサーン (1995) で nà が主題であることを強調するという分析には賛成である。

タイ語研究の中で有名なタイ語学者、PrayaUppakitsinlapasan (1971) ではタイ語の語類について次のように述べている。

คำภาษาไทยเรามักเป็นคำโดดๆไม่มีที่สังเกตแน่นอนว่าเป็นคำชนิดใด
คำชนิดหนึ่งจะนำไปใช้เป็นคำอีกชนิดหนึ่งก็ได้
แล้วแต่รูปประโยค...การที่แยกคำออกเป็นชนิดต่างๆก็เพื่อจะให้เราค้นรากของคำนั้นๆเป็นคำชนิดใด
ดให้ถือเป็นหลักไว้ก่อน (タイ語において単語は基本的に一音節の単語(monosyllabic
word)である。形態的な特徴で語類が決められない。文のタイプによって単語は別の語
類として用いられることがある。単語の分類は単語の語根が何か分かるように設けられ
るだけの話である (日本語訳は筆者によるもの))

以上の説明に基づき Siihaumpai (1991:260) ではタイ語において一つの単語は一つの語類に属すわけではなく、また一つの機能を担うわけでもない。文の成分になり始めてその語類と機能が明らかになると述べている。

つまり、nīi と nà はそれぞれ同一の形態で指示詞やムードを示す終助詞などの機能とともに文の中で主題を強調する働きを担うことがあるとまとめられる。

nà と nīi はそれに下接される文頭の名詞は主題であるという標示になると言える。特に、先述した主語か主題かの区別には有効な手段になると考えられる。以上の Higbie and Snea (2002) では nà は主語の後に休止を置くと述べたが、「主語の後」というより「主題の後」という言い方のほうが適切である。それは nà が日本語の「は」と類似した側面を持っているからである。以下では nà と nīi の現れる環境を検討し、nà と nīi の主題性について述べる。

3.5 nà と nīi の現れる環境

3.5.1 現象文

日本語において「雨が降る」「風が吹く」などの自然現象の文は主題を持たない文として現れる。nà が主題性を持つのなら、現象文に現れない。以下で検討する。

(29) khonrao nà tɔŋ mii khwaamphayaayaam

人間 nà なければならない 努力

人間は努力が必要だ。

(30) lom nà mǎi khəəi yùt phát

風 nà NEG したことがある 止まる 吹く

風は止まらずに吹き続ける。

(31) と (32) は窓の外を見て、“あつ、雨が降っている”と発話する場面の文である。

(31) á, fǒn tòk

あつ 雨 降る

(32) *á, fǒn nà tòk

あつ 雨 nà 降る

nà が現象文に現れないことは日本語の「は」と同様の特徴を持つと言える。この点は nīi にも (33) のように観察できる。(34) は現象文として解釈できないから、nīi が現れることは可能になる。

(33) *á, fǒn nīi tòk

あつ 雨 nīi 降る

(34) lòok rɔɔn khun thúkwan dǎao rɔɔn dǎao fǒn tòk

地球 暑い なる 毎日 すぐ あつい すぐ 雨 降る

yàaŋ chûaŋnîi fôn nîi tók taloot

ように このところ 雨 nîi 降る ずっと

地球は温暖化している。暑くなったり、雨が降ったりしている。

例えば、このところ、ずっと雨が降っている。

www.virginradiothailand.com/

3.5.2 nà と nîi が下接する名詞の特徴

これについて nîi と比較する。nîi が下接した名詞句には現場的性格が関与している。それは nîi がそもそも指示詞の nîi だからであり、総称名詞句には現れにくい。

(35) ??lom nîi mâi khœi yùt phát

風 nîi NEG したことがある 止まる 吹く

風は止まらずに吹き続ける。

(35) の主題は総称名詞句なので、(30) のように nà なら、自然であるが、nîi になると不自然になる。固有名詞の場合、両方とも可能であるが、nîi の文と nà の文が異なる意味を示す。

(36) Tookiao nîi khon yə cingcɨŋ

東京 nîi 人 多い 本当に

東京は本当に人が多い。

(37) Tookiao nà khon yə cingcɨŋ

東京 nà 人 多い 本当に

東京は本当に人が多い。

nîi を持つ (36) には現場的性格があることが読み取れるのに対し、(37) は現場的性格が関与していない。nîi は nà と同様、現象文に用いない。つまり、nà と nîi が現れる環境は両方とも主題を示す文であるが、nà と nîi に存在する違いは現場的性格の有無である。(36) と (37) はどちらも主題である。(36) の場合、話の現場は東京

であることが含意されるが、(37)の場合、話の現場が東京であるとは限らない。話の現場にあるものを指す名詞は、主題になりやすい(野田 2007)。

以上のように *nà* と *nfi* は主題の後に休止の存在を強調して主題と述語を区別することや、主題の現場的性格を示すことなどを通じて主題を強調する。さらに、日本語の「は」と同様、現象文で起こらないことから、主題性を示唆しているといっても間違いない。

3.6 *nà* と *nfi* と否定のスコープ

まず、日本語の「は」と否定のスコープについて述べる。日本語の否定のスコープは基本的に次のようなことが言える。「主語」「状況語」、「独立語(例えば「珍しく」のように、話し手の態度や陳述的意味を表す成分)」は通常、否定のスコープに入らないが、述語を詳しく表す「修飾語」、「対象語」、「規定語」は否定のスコープに入る。主題の「は」の場合においては主題の存在が前提とされているから、否定のスコープには入らない。しかし、「は」であっても対比の意味の「は」であれば、否定のスコープに入る。

- (38) 彼は船で南極へ行ったのではなく、帰ってきたのだ。(つまり動詞の否定)
(沼田 2000:47)

(38) の「は」が対比の意味であれば、「誰かが船で南極へ行ったが、それは彼ではない。彼女だ」のように否定できる(沼田 2000)。

タイ語の否定は否定表現の *mái* を否定したい成分の前に置く。具体例を挙げる。

[] は否定のスコープ内を示す。

- (39) a. *kháo pai tham naan*

彼 行く する 仕事

彼は仕事に行く。

- b. *kháo mái* [pai tham naan]

彼 NEG [行く する 仕事]

彼は仕事に行かない。

- (40) a. *kháo khǎan nǎpsuu sǔai*

彼 書く 字 綺麗

彼の書いた字は綺麗だ。

- b. *kháo khǎan nǎpsuu mái [sǔai]*

彼 書く 字 NEG [綺麗]

彼が書いた字は綺麗ではない。

(39b) と (40b) において否定の位置は基本的に動詞や形容詞の前にある。上でも述べたように否定される語の前にあるのである。タイ語の否定のスコープは基本的に否定の位置によって非常に簡潔に表される。以下の *mái* の位置とスコープは *mái* と助動詞の関係からさらに分かりやすくなる。

- (41) a. *ʔaatcà mái [pai]*

推量 - AUX NEG [行く]

行かないかもしれない。

- b. *mái [ʔaatcà pai]*

NEG [推量 - AUX 行く]

行くわけがない。

否定の *mái* の位置を換えると、否定のスコープにかかる語が変わってくる。タイ語では基本的に *mái* が否定される成分の前に置かれる。主語は基本的に否定のスコープに入らない。主題にしても否定のスコープに入らない。以下の *nà* がつく主題文を見る。

- (42) a. *mɛɛ kɛɛ nà mái dǎi³ [thamɲaan thǎinǎi] ná*

แม่แจนะ ไม่ได้ทำงานที่นี่นะ

母 君 *nà* NEG [働く ここで] PARTI

³ *mái dǎi* は未だに現実化していないことがらを表したり過去時の否定を表す (田中 2004:358)。

君の母はここで働いていないよ。

b. lom nà mâi [khəoi yùt phát]

ลมณะ ไม่เคยหยุดพัก

風 nà NEG [したことがある 止まる 吹く]

風は吹き止んだことがない。

c. thəə nà mâi [sòot] ləəo ná

เธอนะ ไม่โสดแล้วนะ

あなた nà NEG [独身] PERF PARTI

あなたはもう独身じゃないよ。

(43) a. khonrao nîi mâi [campen tɔŋ rian mâak] koo dâi

คนเรานี้ ไม่จำเป็นต้องเรียนมากก็ได้นะ

人々 nîi NEG [必要 勉強 たくさん]

人は勉強をたくさんする必要がない。

b. süun IBM nîi mâi [pəət wansǎoʔaathít] rɔok

ศูนย์ IBM นี้ไม่เปิดวันเสาร์อาทิตย์หรอก

センター IBM nîi NEG [開く 土日] PARTI

IBM センターは土日は営業しないよ。

c. chũainoi ná khráp coot nîi mâi [khâocai cɨŋ cɨŋ] khráp

ช่วยหน่อยนะครับ โจทย์นี้ ไม่เข้าใจ จริงๆครับ

手伝う ください PARTI GEN 課題 nîi NEG [分かる 実に] GEN

手伝ってください。(この)課題 は実に分かりづらい。

(42) はいずれも nà がつく主題である。主題の「mɛɛ kɛɛ nà、lom nà、thəə nà」は前提になっており、否定のスコープに入っていない。nà がつく主題も nà がつかない主題と同様に否定のスコープに入らない。つまり、nà があるかないかは名詞が主題であることに影響がない。つまり、nà は主題マーカーとして立てられる。nà がつかない主題は nà が落とされているだけの話であると考えられる。(43) は nîi がつく主題文である。nîi がつく主題も nîi がない時の主題と同様に 否定のスコープに入らない。

3.7 まとめ

本章は *nà* と *nīi* が主題性を持つと考える。タイ語において文法的手段のほかに、形態的手段の *nà* と *nīi* は主題マーカースとして考えられる。形態的手段の *nà* と *nīi* が用いられている文と用いられていない文があることは、脱落で説明できる。脱落という点において日本語の「は」と多少異なる。日本語の「は」は会話の中で落とされることが多いが、落とされにくい文もある。

(44) 地球 {? ϕ /は} 惑星だよ。

(44) が主題性の文なので、「は」は脱落されにくい。タイ語において主題性がある文としても *nà* と *nīi* は脱落することができる。

(45) *lōok nà pen daaokhrō*

地球 COP 惑星

地球は惑星だよ。

(46) *look pen daaokhrō*

地球 COP 惑星

地球は惑星だよ。

(45) と (46) はどちらも形容詞文であり、主題文である。そして、*nà* がある文とないう文であるが、それによる大きな違いはない。

前半ではタイ語の主題を表す手段について述べた。本章の後半ではここまで分析してきた日本語の主題はタイ語の主題のあり方についてどの程度当てはめて言えるかという前提のもとで考察を行う。タイ語の主題は日本語の主題と非常に似ている点が多い。

4. 主題卓越型言語の特徴的な構文—二重主語文—

二重主語文は主題言語の共通の特徴の一つである(Li and Thompson1976:468-469)。タイ語の二重主語は中国語寄りのところが多い。中国語はよく知られるように主題言語

である（角田 1991:166）。二重主語の存在は一般的である。木村英樹（1998）では中国語の二重主語文を二つに分類した。第一類目は温感、痛痒覚、飢飽感、快感、悲喜感、視聴覚などの経験的事態を表す。

(47) 我肚子疼。（私は腹が痛い）（木村英樹 1998）

(48) 我肚子饿。（私は腹がひもじい）（同上）

(47) と (48) から中国語も日本語と同様に感覚・知覚・感情などの心身における内的経験を表すタイプをもつが、上でも述べたように主体 X は情意や感覚を感じるという行為の主体として述語と関係するため、本章ではこのタイプの中国語が二重主語文ではないと考える。

第二類目は、人や事物についての形状や性質に関する状況を述べるタイプである。

(49) 小李眼睛大。（李君は目が大きい）（木村英樹 1998）

(50) 他说话很快。（彼は話すのがとても速い）（同上）

しかし、

(51) *小李玛玛病了。（李君はお母さんが病気だ）（同上）

はかなり不自然である。つまり、親族関係などいわゆる譲渡可能な関係はこの構文を起こさせない。(49) と (50) は譲渡不可能な関係で形成する。

ここで推測できるのは、中国語における二重主語文が課せられる制約は日本語よりきびしいということである。(49) と (50) のように、X と Y は譲渡不可能な関係を帯びなければならない。言い方を換えれば、(49) と (50) は X と Y が全体部分の關係に成り立つ文なのである。

主語言語において、例えば、英語の場合では中国語の (49) と (50) のような文を作るとすると、次のような文になる。

(52) a. (Talking about) John, his eyes are blue.

b. (Talking about) John, his speech is so fast.

(52) からは John を指す his という同一指示代名詞が確認できる。英語には中国語の (49) と (50) と同様の文がない。(52) のように作ろうと思えば、作れる文であるが、その場合、主題と後続命題の関連を示す同一指示代名詞 (his) が必要になってくる。それに対して中国語の場合は同一指示代名詞が不要である。次節でタイ語の二重主語文について述べる。

4.1 タイ語の二重主語文

タイ語における二重主語文は中国語の第二類の二重主語文に相当する文のみが存在すると考えられる。中国語の第一類に相当するタイ語は「XはYが述語」の形を取らず、他動詞構文で形成する ((53ab))。第二類に相当する文は、二重主語文の形を取る ((53c))。

(53) a. chán pùat thoɔŋ

私 痛む 腹

私はお腹が痛む。

b. chán kitthĩuŋ bāan

私 懐かしむ 故郷

私は故郷を懐かしむ。

c. dèk-khon- níi nāataa muan phoo

子供・CL-この 顔つき 同じだ 父

この子は顔つきがお父さんにそっくりだ。

タイ語において譲渡可能な関係の場合には基本的に中国語と同様、二重主語文を構成しないが、親族関係の場合は二重主語文を構成する。

(54) a. Maanii phoo pūai

マーニさん お父さん 病気

マーニさんはお父さんが病気だ。

b. khun-Yamada lūuksāao nĩiook càak bāan

山田さん 娘 家出した

山田さんは娘が家出した。

c. *khun-Yamada lûuksăao kamləŋ cà tɛɛŋpaan*

山田さん 娘 もうすぐ 結婚する

山田さんは娘がもうすぐ結婚する。

(54) の受け入れには個人差があるが、非文にはならない。ここで、タイ語において親族関係は二重主語文が構成できることで中国語とは異なるが、日本語と同じであると言える。(54) の X と Y の関係は所有格の「の」に当たる「*khooŋ*」で言い換えられるのである。

タイ語と日本語の二重主語文について述べるのに先立ち、通常の形容詞文を見ることにする。

(55) *ʔaahăanthai phèt*

タイ料理 辛い

タイ料理は辛い。

(56) *bāan-lăŋ-níi sūai*

家-CL-この 綺麗

この家は綺麗だ。

(55) と (56) には側面語の「味」と「色」を入れることができる。

(57) *ʔaahăanthai rôtchâat phèt*

料理 タイ 味 辛い

タイ料理は味が辛い。

(58) *bāan-lăŋ-níi sǐi sūai*

家-CL-この 色 綺麗

この家は色が綺麗だ。

(57) と (58) は (59) と (60) ように、三上 (1960) で指摘した「の」の文にすることも可能である。

(59) rôtchâat khooŋ ʔaahăanthai phèt

味 の 料理 タイ 辛い

タイ料理の味は辛い。

(60) sīi khooŋ bāan-lăŋ-nīi sūai

色 の 家-CL-この 綺麗

この家の色は綺麗だ。

(57) と (58) は形容詞文であるが、非対格自動詞でもこの構文が成り立つ。

(61) a. chán khăa hək

私 足 折れる

私は足が折れた (骨折した)。

b. khăa khooŋ chán hək

足 の 私 折れる

私の足は折れた (骨折した)。

以上のように、タイ語の二重主語文は日本語と同様、「の」に当たる「khooŋ」で言い換えられる文であるということが言える。

4.2 いわゆる二重主語文において日本語とタイ語の違い

日本語の二重主語文について、文の特徴から言うと「XはYがZ」に当たるこのタイプの文は、XとYの関係は全体関係や所有関係などのほかに、菊地 (1995) で指摘された従属節対応型がある。

(62) A 画伯は、書く絵がよく売れる。

(62) の X と Y は「A 画伯が書く絵」の従属節に由来する関係である。タイ語の場合は「X は Y が Z」のままの形では (62) のように言うためには、(63) のように同一指示代名詞が必要とされる。

(63) wɛɛnkó pháap thîi kháo wâat khăai dii

バンゴッホ 絵 RelPro 彼 描く 売る 良い

バンゴッホは彼の書く絵がよく売れる。

(63) は同一指示代名詞がないと、日本語の (62) のように作れない。つまり上でも述べたようにタイ語の場合、主題と後続命題の関係が不明なとき、同一指示代名詞が要求されることになる。日本語の (62) の場合、Y が「書く絵」であり、主題の X がその Y の主格であることを連想しやすい。さらに、親族関係の二重主語文の場合は上でも述べたように、タイ語の場合、容認性には個人差があるが、同一指示代名詞を入れると、容認性は高くなる。

(64) a. Maanii phoo (khooŋ) kháo pūai (= (54a))

マーニさん お父さん (の) 彼女 病気

マーニさんは彼女のお父さんが病気だ。

b. khun-Yamada lūuksāao (khooŋ)kháo nīiook càak bāan (= (54b))

山田さん 娘 (の) 彼 家出した

山田さんは彼の娘が家出した。

親族関係の二重主語文を容認しがたい人が「彼女」や「彼」のような同一指示代名詞を投入すると、容認するようになる。なぜ、同一指示代名詞を挿入すると、文が自然になるかという、それは上でも述べたように同一指示代名詞は、主題の「マーニさん」「山田さん」と「お父さんが病気だ」「娘が家出した」とを関係付ける役割を持つ成分であるからである。(62) と (63) の違いや、(64) から考えると、日本語において日本語母語話者は「X」をその後の「Y が Z」と関係付け、全体としての意味を理解していくが、タイ語においてタイ語母語話者は顕著な同一指示代名詞の「彼の」がなければ、文全体の意味が理解しにくくなる場合があることが分かる。

5. タイ語における話題設定の主題、状況主題、二重主題文について

本節では本稿の第2章で分析した話題設定の主題（純粹主題）、状況主題、二重主題文のもとで、タイ語の場合それらにどのように対応するのかを概観する。

5.1 話題設定の主題

本稿の第2章で述べた純粹主題はタイ語においてどのような文として扱うかについて本節で考えることにする。第2章の結論では日本語の純粹主題は後続命題にとって付加的存在で後続命題で語られる内容の範囲を限定する意味機能を持つと述べた。

(65) a. nǎpsuuphaasǎathai nǎpsuu-sawàtdii dii thǐisùt

タイ語の本 サワッディーという本 良い 一番

タイ語の本ではサワッディーが一番良い。

b. dǎokmái saakùrǎ sǔai

花 桜 綺麗

花は桜が綺麗。

c. sǎnǎambéetbɔɔn Khooshien kǎokɛɛ thǐisùt

野球場 甲子園 古い 一番

野球場は甲子園が一番古い。

d. lǎo lǎoyǐpùn ʔarɔi thǐisùt

酒 日本酒 おいしい 一番

酒は日本酒が一番おいしい。

(65) のようにタイ語においてもこのような日本語の「XはYがZ」のような構文が作られる。第2章で挙げた先行研究で分類されたようにXとYは類種関係または包摂関係にある。Xは上位概念で、Yは下位概念である。(65)はそれぞれ、上下概念で

「nǎpsuuphaasǎathai (タイ語の本) - nǎpsuu-sawàtdii (サワッディーという本)」、

「dǎokmái (花) - saakùrǎ (桜)」、「sǎnǎambéetbɔɔn (野球場) - Khooshien

(甲子園)」、「láo (酒) - láoyīpùn (日本酒)」になっている。このような上下概念の名詞であれば、タイ語においてもいくらでも作られる。しかし、タイ語の場合は、(65) ように言えるものの、やはり、言うときには「一について言えば」に相当する「thāa phūut thup-là koo (ถ้าพูดถึง - ละก็)」を入れたほうがもっとも自然になる。

(66) a. thāa phūut thup nāṅsuuphaasāathai là koo nāṅsuusawātdii dii thīsūt

について言えば タイ語の本 サワッディーという本 良い 一番
タイ語の本について言えば、サワッディーが一番良い。

b. thāa phūut thup dōokmái là koo saakūrá sūai

について言えば 花 桜 綺麗
花について言えば、桜が綺麗。

c. thāa phūut thup sanāambéetbōon là koo Khooshien kàokεε thīsūt

について言えば 野球場 甲子園 古い 一番
野球場について言えば、甲子園が一番古い。

d. thāa phūut thup láo là koo láoyīpùn ʔarōoi thīsūt

について言えば 酒 日本酒 おいしい 一番
酒について言えば日本酒が一番おいしい。

日本語の主題 - 解説の関係は「P について Q」の関係である。「について」は P と Q の関係を「関連付ける」という意味で示すことができる。タイ語においても同じことが言える。「一について言えば」は第 1 章の 2.2 節で挙げたように後続命題の内容の範囲を限定する要素として使われることから、タイ語のこれらの主題も話題設定の意味機能を持つと言える。(66) の場合、「thāa phūut thup-là koo (ถ้าพูดถึง - ละก็)」を入れることは今からこの話題について語るという前触れを示すこととなる。「thāa phūut thup-là koo (ถ้าพูดถึง - ละก็)」があることによって後続命題に現れる内容はその話題に限られる。

これら主題に「thāa phūut thup-là koo (ถ้าพูดถึง - ละก็)」があったほうが自然になってくるということは、この類の主題はそのままの形では後続命題との関連性が希薄であるということである。言い方を換えれば、(67) のように「Y が Z」に当たる部分は独立性を持ち、主題の X がなくても文として成立する。

- (67) a. nāpsuu-sawātdii dii thīisūt
 サワッディー 良い 一番
 サワッディーという本は一番良い。
- b. saakûrá sūai
 桜 綺麗
 桜は綺麗。
- c. Khooshien kàokεε thīisūt
 甲子園 古い 一番
 甲子園は一番古い。
- d. lāoyīpùn ʔaroi thīisūt
 日本酒 おいしい 一番
 日本酒は一番おいしい。

(67) で脱落した主題はタイ語においても付加的存在と言える。この点に関しては日本語とまったく同じである。以下の例文をみることにする。

- (68) a. thāa phūut thun nāpsuuphaasāathai là koo [nāpsuusawātdii(nà)
nuahāa dii thīisūt]
 について言えば タイ語の本 サワッディーという本 内容 良い一番
 タイ語の本について言えば、サワッディーは内容が一番良い。
- b. thāa phūut thun dookmái là koo [saakûrá(nà) sīi sūai]
 について言えば 花 桜 色 綺麗
 花について言えば、桜は色が綺麗。
- c. thāa phūut thun sanāambéetbōon là koo [Khooshien(nà)
prawāttisāat kàokεε thīisūt]
 について言えば 野球場 甲子園 歴史 古い 一番
 野球場について言えば、甲子園は歴史が一番古い。
- d. thāa phūut thun lāo là koo [lāoyīpùn(nà) rōtchāat ʔaroi thīisūt]
 酒 日本酒 味 おいしい 一番

酒について言えば、日本酒は味が一番おいしい。

タイ語において [] の中に下線を引いた別の名詞「内容、色、歴史、味」を入れることができる。それぞれの文はごく自然な言い回しである。(68) は 2 つの部分に分けられる。一つ目は「*thāa phūut thəŋ-là koo (ถ้าพูดถึง - ละก็)*」で表記する話題設定の主題、二つ目は [] の中の部分の二重主語文である。[] の中は通常の二重主語文である。その中に主題を示す *nā* を付けることができる。[] は「*thāa phūut thəŋ-là koo (ถ้าพูดถึง - ละก็)*」の話題設定の主題から独立する。従って、[] の中の主題と「*thāa phūut thəŋ-là koo (ถ้าพูดถึง - ละก็)*」で表記する主題は異質のものであることは (68) で示される。この点においては日本語の純粹主題と同じである。日本語の純粹主題は話題設定という意味機能を持ち、「主題 - 解説」の関係にある主題とは異質のものである。

5.2 状況主題

タイ語において時間と場所を示す状況成分は (69) のように通常 VP の後ろにある。

- (69) *fōn tòk nāk māk thīi-Chianmāi muawaannīi*

雨 降った 激しく 大変 で - チェンマイ 昨日

昨日、チェンマイで雨が大変激しく降った。

- (70) *thīi-Chianmāi fōn tòk nāk māk muawaannīi*

で - チェンマイ 雨 降った 激しく 大変 昨日

チェンマイでは昨日雨が大変激しく降った。

- (71) *muawaannīi fōn tòk nāk māk thīi-Chianmāi*

昨日 雨 降った 激しく 大変 で - チェンマイ

昨日雨はチェンマイで大変激しく降った。

(70) と (71) は、文頭にある状況成分が主題化した結果の位置である。以上で述べたように、タイ語の主題は基本的に語順で決まっており、文頭の位置が主題になるこ

とがある。状況成分の場合、元の位置から文頭に来る場合、それはタイ語の有標の主題として扱うことにする。

先述したように時間と場所の状況成分は両方とも文頭にくることができる。

(72) a. *thîi-Chiapmài muawaannîi fôn tòk nàk mâak* (= (4))

で - チェンマイ 昨日 雨 降った 激しく 大変
チェンマイで昨日雨が激しく降った。

b. *muawaannîi thîi-Chiapmài fôn tòk nàk mâak*

昨日 で - チェンマイ 雨 降った 激しく 大変
昨日チェンマイで雨が激しく降った。

(72) はそのままではどちらも対比の意味が読み取れず自然な主題文である。

(72) は会話を開始する文として使える。つまり、前の文脈なしで会話の一番最初に用いることができる文である。(72a)において *thîi-Chiapmài* (チェンマイで) は内容の出来事が起こる場所を限定する主題である。(72b)の *muawaannîi* (昨日) は出来事の時間を限定する主題である。

5.3 二重主題文

日本語で観察された二重主題文はタイ語にも存在することを述べる。本章の5.1節の(68)は二重主題文としても考えられる。それぞれの主題が持つ意味機能は異なるため、共存することは可能である。(68)において一つ目の主題は話題設定の主題で、今から話す範囲を定める主題のことであり、二つ目の主題は本稿において「主題 - 解説」の関係にある主題のことである。本稿の第2章では二つの主題の中の一つが状況主題であれば、二重主題文が構成しやすいと論じた。本節でタイ語において状況主題で構成される二重主題文について述べる。まず、(73)と(74)を見る。

(73) A: *Krupthêep fôn tòk mái*

バンコク 雨 降る QUES

バンコクは雨が降っていますか。

B: Krupthêep wannîi fôn tók loṇ maa læso khráp

バンコク 今日 雨 降る 出す 来る PERF GEN

バンコクは今日、雨がもう降り出しました。

(74) a. pii 2010 thiiwii yīpùn cà plian pen rabòpdícitṓon mòt

年 2010 テレビ 日本 FUT 変わる に デジタル式 全て

2010 年には日本のテレビは全てデジタル放送に変わる。

b. piināa sèetthakīt cà dii khun

来年 経済 FUT よい なる

来年には、経済はよくなる。

(73) はバンコクは雨が降っていますかという質問に対する応答の文である。

(73) の B は二つの主題があると考えられる。一つ目は「バンコク」であり、二つ目は「今日」である。(73) はもし (75) のように日本語の「で」に当たる前置詞「thīi」を「バンコク」の前に置けば、対比の意味が強くなる。

(75) thīi-Krupthêep wannîi fôn tók loṇ maa læso khráp

で - バンコク 今日 雨 降る 出す 来る PERF GEN

バンコクでは今日は雨がもう降り出しました。

(74) はどちらも主題として解釈できる。以上で述べたようにタイ語の状況成分は文末の位置にあるが、pii 2010 (2010 年) と piināa (来年) が文頭にあることで、有標の主題と考えられる。さらに、thiiwii yīpùn (日本のテレビ) と sèetthakīt (経済) は主題としても考えられる。thiiwii yīpùn (日本のテレビ) と sèetthakīt (経済) の後ろに nà を入れられる。

(76) A: (日本語能力試験の結果通知表について、A さんはチェンマイでは既に通知表が届いたと言った。次に B さんは以下のような文を言う)

B: dii caṇ, thīi-Chiangmāi reo dii nā thīi-Krupthêp wannîi thoo pai

良い とでも、で - チェンマイ 早い nā で - バンコク 今日 電話する

thīi SṓṇNṓṇYṓṇ, cāonāathīi bṓṇk wāa yaṇ māi sèt

に タイ国元留学生協会、職員 言う と まだ NEG 終わる
いいなあ。チェンマイでは早かったんだね。バンコクでは今日タイ国元
留学生協会に電話して尋ねたら職員さんが点数の採点がまだ終わってい
ないって。

(77) A: waap-phæen cà pai thīao sūan-nognút, fōn cà tòk mǎi khráp
予定する FUT 行く 遊ぶ ノンヌット 花菫、雨 FUT 降る QUES
GEN

ノンヌット花園に行く予定ですが、雨は降りますかね？

B: dāikhāao wāa phaayú càak ciin cà khāo. thīi-Krupthēep wannīi fōn
tòk prooiprooi

聞く と 台風 から 中国 FUT 接近する で -バンコク 今日 雨
降る パラパラ

中国から台風が接近していると聞きました。バンコクでは今日は雨がパ
ラパラ降っています。

(76) はチェンマイで試験の通知表が既に届いたことを聞いて、バンコクではどのよ
うな状態になっているかを述べる文で、対比の意味が読み取れる。通常では時間の状況
成分が場所の状況成分より先に現れるが、(76) は前の文の名詞「チェンマイ」に関連
する名詞「バンコク」を先に述べ立てる。

(77) のノンヌット花園はチョンブリー県にある場所である。A さんはそちらの天気
について聞いたが、B さんはそちらの天気がよく分からないから、直接答えられないが、
台風が接近していることと、バンコクの今日の天気情報という対照の情報を提供した。

(76) と (77) の対比の意味は第 2 章の 6 節で述べた談話上の制約によるものである。
すなわち、文頭のバンコクは前の文脈に出てきたもの(チョンブリー県)と対立する名詞
であり、対比の意味の主題である。

以上をもってタイ語においても (68) (73) (74) を根拠に日本語と同様、一文に
二つの主題が現れることが可能であることが分かる。(68) は明らかに、話題設定の主
題と「主題 - 解説」の関係にある主題という異なる主題が共存する文である。(75) は
どちらの主題も状況主題で、後続命題が成り立つ時間と場所が前提に立てられる。

6. タイ語の「の」形式の主題について

本節では本稿の第4章で分析した日本語の「の」形式の主題に対応するタイ語の文を取り上げる。第4章ですでに、感情形容詞文において「の」形式の主題は因果強化読みが優先的であると述べた。タイ語ではこのような構文がいかに関訳されるかに焦点を当て、第4章で分析した意味解釈がタイ語の観点から正当であることを主張する。まず、タイ語の感情語について述べる。

タイ語の感情語の中には動詞と形容詞がある。日本語のうれしい、かなしい、つまらない、こわいなどの感情形容詞は、タイ語の *diicai, siacai, bua, klua* などの動詞になる。

(78) a. *Naphaa siācai thîi phûucàtkaan cà tæŋŋaan*

人名 悲しむ COMP 部長 FUT 結婚

[นภาเสียใจที่ผู้จัดการจะแต่งงาน]

ナパーは部長が結婚すると知って悲しい。

b. *Tôm lə Tòn diicai thîi phrunnîi cà dāi pai thîao*

人名 と 人名 うれしい COMP 明日 FUT ことになる 遊びに行く

[ตอมและตันดีใจที่จะได้ไปเที่ยว]

トムとトンは明日遊びに行くことになって喜んでいる。

(78) は *siācai* と *diicai* の動詞で主体の感情を示す文である。これらの感情語は他の成分を修飾するとき、または、価値や状態、属性を表すとき *nāa* をつけて形容詞として用いられる。

<i>diicai</i> (喜ぶ)	⇒	<i>nāadiicai</i> (喜ばしい、うれしい)
<i>siacai</i> (悲しむ)	⇒	<i>nāasiacai</i> (悲しい)
<i>bua</i> (退屈する)	⇒	<i>nāabua</i> (つまらない)
<i>klua</i> (恐れる)	⇒	<i>nāaklua</i> (こわい)

(79) khàao thîi nâadiicai
 ニュース RalPro うれしい
 うれしいニュース

(80) wannîi nâabua
 今日 つまらない
 今日はつまらない。

タイ語において日本語の「の」形式の主題文が訳される場合、意味が異なれば、構文も違ってくるのである。以下のタイ語訳はほかのタイのネーティブの方によるものである。

(81) a. 極端に走ることは、簡単なのだ。

(การ)วิ่งสุดชีวิต ง่ายจะตาย

(kaan) wîŋ sùt chiiwít ɲâai cà tǎai

b. 現実的に考えれば、子供を増やすことは、難しい。

คิดตามความเป็นจริง (การ)เพิ่มจำนวนเด็ก ทำได้ยาก

khít taam khwaam pen cī (kaan) phəəm camnuan dèk tham dāi yāak

(82) a. 制度を変えるのは、一番簡単だ。

(การ)เปลี่ยนระบบ ง่ายสุด

(kaan) plian rabòp ɲâai sùt

b. 女性だけで死体を始末するのは、無理です。

(การ)ให้ผู้หญิงจัดการศพคนเดียว คงไม่ไหว

(kaan) hâi phūuyīŋ càtkaan sòp khondiao khoŋ mâi wǎi

c. その宝が偽物だと証明するのは、時に本物を探すより難しい。

การแสดงให้เห็นว่า สิ่งล้ำค่านั้นเป็นของปลอม บางที ยากยิ่งกว่า หาของแท้เสียอีก

kaan sadəŋ hâi hěn wǎa sīŋ lámkhâa nán pen khoŋ ploom baanthei

yāak yīŋ kwâa hǎa khoŋ theə sǎa iik

d. 自分に向いているものを探すのは、楽しい。

การค้นหาสิ่งที่เหมาะสมกับตัวเอง สนุก

kaan khónhǎa sīŋ thîi mǎ kâp tua nǎ sanúk

- (83) a. 言葉が必要ないときに、言葉を発するのは、悲しい。

การพูดในเวลาที่ไม่ต้องการคำพูด ข้างหน้าเศร้า

kaan phūut nai weelaa thīi mǎi tɔŋkaan khamphūut chāaŋnāasāo

- b. 真面目に生きるのは、つらい。

การใช้ชีวิตอย่างจริงจัง ข้างหน้าลำบาก

kaan chái chiiwít yàaŋ cɪŋcɔŋ chāaŋ nāa ramkhen

- c. 仕事しながら酒を飲むのは、たのしい。

การทำงานไป กังไป สนุกดี

kaan thamŋaan pai kɔŋ pai sanŭk dii

(81) は「こと」形式の主題文である。(82) と (83) は両方とも「の」形式の主題文である。(81) (82) および (83) は第4章では属性の文として解釈できる文であると述べた。タイ語の訳を見ると、属性を描写する文である。タイ語において日本語の形式名詞に当たるのが、名詞化接頭辞の kaan (การ) である。動詞の前に kaan (การ) を付けると、名詞化するが、kaan (การ) は省略されることが多い。例えば、(81) と (82ab) には kaan (การ) が顕現していないが、() の中のように kaan (การ) を入れようと思えば、入れることができる。(82cd) と (83) は自然に kaan (การ) が現れる文である。特に (83ab) のタイ語訳で用いられた感情語には nāa がついており、形容詞として主題の属性を描写しているのである。

それに対して、第4章で論じた因果強化読みのコト名詞句の主題に対応するタイ語訳を見る。

- (84) a. そういつてくれるのは、うれしい。

ดีใจ ที่บอกกันแบบนั้น

diicai thīi bɔɔk kan bæp nán

- b. このことをあなたに教えるのは、実に心苦しい。

ทำใจลำบากมาก ที่จะบอกเรื่องนี้กับเธอ

thamcai lambàak thīi cà bɔɔk ruəŋ níi kàp thəə

- c. 新入生歓迎会…。…ニューフェイスが増えるのは、うれしい。

งานรับน้องใหม่... ...ยินดี ที่มีสมาชิกเพิ่มขึ้น

naan ráp nɔɔŋ mǎi...yindii thii mii samaachík phəəm khən

d. 対象年齢がひろがるのは、うれしい。

ดีใจที่วัยของกลุ่มทาร์เก็ต ขยายวงขึ้น

diicai thii wai khɔɔŋ klùm thaakèt khayaai wɔŋ khən

(85) a. ちょっと神経質なゴリラだったが、いなくなるのは、さびしい。

ตอนอยู่ ก็กวนประสาทดีเหลือเกิน แต่ไม่อยู่แล้ว ก็ชวนให้เหงา(เหงา
ที่มันจะไม่อยู่)

toɔnyùu kɔɔ kuan prasàat dii luakəən tɛɛ mǎi yùu lɛɛo kɔɔ chuan hǎi
ŋǎo (ŋǎo thii man cà mǎi yùu)

b. 君たちと別れるのは、とても寂しい。

จากลากับพวกเธอ ทำให้เราเหงา (เหงา ที่จะต้องจากลากับพวกเธอ)

càak laa kàp pùak thəə tham hǎi rao ŋǎo (ŋǎo thii cà tɔŋ càak laa kàp
pùak thəə)

(84) または (85) の括弧⁴の中に共通して現れるのは下線を引いた thii である。タイ語の thii には複数の機能⁵がある。

(86) chán diicai thii kəət pen luuk chaao naa

[ฉันดีใจที่เกิดเป็นลูกชาวนา]

私 うれしい COMP 生まれる に 子供 農家

⁴ (85) の括弧の中の訳は筆者によるものである。

⁵ (1) nǎŋsuu thii chán suu maa

本 RelPro 私 買う 来る

私を買ってきた本。

(2) phǎm thamŋaan yùu thii roonphayaabaan

ぼく 働く いる で 病院

ぼくは病院で働いている。

(1) と (2) の thii は関係代名詞、場所を示す前置詞である。

私は農家の娘に生まれることができてうれしい。

(Bεεpfukʔàanphaasāathai P๑๑.3)

一つは (86) のような *thii* の機能である。本章では *thii* を含めた節を *thii* 節と呼ぶことにする。この *thii* 節は日本語のシテ形接によく似た働きを持つと言われる (田中 2004:633 - 636) が、(84) と (85) は原文の日本語はシテ形接ではないが、タイ語の訳では原因を表す *thii* 節で原文の日本語を翻訳した。(84) の原文の日本語は第 4 章では起因強化読みの文であると述べた。それに対して、タイ語にする場合も原因を示す表現を用いる形となった。それに続いて、(85) の原文の日本語も (84) と同様因果強化読みの文であるが、タイ語訳の方では、*thii* 節ではなく、*chuanhāi* (ชวนให้) と *thamhāi* (ทำให้) が用いられた。宮本 (2007:46) では *chuanhāi* (ชวนให้) について次のように説明している。

「A+ชวนให้+動詞 (句) B」において A は原因である事柄を表す語句、B は無意識のうちに A によって引き起こされる結果を表す語句または文である。

(宮本 2007:46)

(85b)、*thamhāi* (ทำให้) は「A+ทำให้+B (結果)」の構文をもち、A が B を引き起こす原因となる時の表現である。それゆえ、(85) のタイ語訳にも原文の日本語の意味、つまり因果強化読みがそのまま現れる形になる。さらに (85) は括弧の中のように *thii* 節を使って同意で訳されることも可能である。

上の (81) と (82) のように *kaan* (การ) は省略されることが多い。タイ語の日本語のこの構文に対してもう一度、代表の例文を取り上げて述べる。

(87) 仕事しながら酒を飲むのは、たのしい。

การทำงานไป กังไป(นะ)สนุกดี

kaan thamṇaan pai kóng pai (nà) sanùk

(88) 新入生歓迎会…。…ニューフェイスが増えるのは、うれしい。

งานรับน้องใหม่... ยินดี ที่มีสมาชิกเพิ่มขึ้น

ṇaan ráp nong mòi...yindii thii mii samaachík phœm khun

日本語においてどちらの文も主題の位置にあるが、第4章で述べたように日本語の(87)と(88)は意味の観点から異なる文を言わざるを得ない。タイ語訳も根拠として挙げられる。タイ語において主題であれば、つまり、タイ語訳の(87)のように主題-解説の関係が成り立つ文であれば、主題は文頭に立ち、解説はその後ろにあるという語順になる。これは語順という手段を用いて主題文であることを判断しているが、形態的手段、*nà*も(87)の主題の後ろに入れる。タイ語の(87)は属性描写文である。それに対して(88)は日本語の場合、主題文の形式であるが、タイ語訳は原因を表す *thii* 節で構成され、主題文の形式で成り立っていない。つまり、タイ語において文の持つ意味はそれを反映する形式で表されることになる。

7. まとめ

以上のように本章では日本語の主題の分析の中で分かったことをもとにタイ語の主題について振り返ってみた。前半ではタイ語の一般的な言語事実やタイ語の主題を表示する手段について考察を行った。タイ語の主題の存在は昔から認められていたが、主題を表示する手段についてはより詳細な研究が必要であるとする。本章では語順の手段のほかに、日本語「は」に似ている側面を持つ形態的手段の *nà* と *nfi* の存在や *nà* と *nfi* の現れる環境を確認した。本章の結論として *nà* と *nfi* は主題マーカーとして扱えることを提案した。

後半ではタイ語の主題を個別的に検討した。タイ語は日本語と同じ主題卓越型言語と言われることから推測できるように、主題においてタイ語と日本語の間には類似した点が多い。二重主語文や二重主題文はどちらもタイ語の中に存在する。タイ語では文が示す意味と文の形式が平行すると考えられる。それはコト名詞句の主題のタイ語訳から確認できた。さらに、それによって本稿の第4章で論じた因果強化読みの主題が間違っていないことを立証する形になる。二重主語文の構成において日本語より制約は厳しいが、XとYの間に同一指示代名詞が現れれば、文が成立しやすくなる。主題とその後続命題の関係はこの同一指示代名詞によって顕著に示される。日本語の純粹主題については、タイ語においては日本語と同様、今から話す内容の話題設定を果たしている。タイ

語では「thaa phūut thəŋ-là koo (ถ้ำพุดถึง - ละก็)」という表現でその機能が強化され
ると考えられる。

凡例

タイ語の表記については基本的に田中（2004）を参照した。

子音

	唇 音	唇歯音	歯 音	硬口蓋音	軟口蓋音	喉 音
無声有気閉鎖音	*p		*t	c	*k	*ʔ
無声無気閉鎖音	ph		th	ch	kh	
有声閉鎖音	*b		*d			
摩 擦 音		f	s			
鼻 音	*m		*n		*ŋ	
流 音			r,l			
半 母 音	*o/w			*i/y		

* は末子音にも使用される。

母音（基本母音）

	前 舌	中 舌	後 舌
狭母音	i,ii	ɯ,ɯɯ	o,oo
半広母音	e,ee	ə,əə	u,uu
広母音	ɛ,ɛɛ	a,aa	ɔ,ɔɔ

声調

	平 声	mid-tone
\	低 声	low-tone
∧	下 声	falling-tone
/	高 声	high-tone
∨	上 声	rising-tone

省略記号表

AdvP	=	Adverb
ASP	=	Aspect
AUX	=	Auxiliary
CL	=	Classsifier
COPU	=	Copular
COMP	=	Complementizer
FUT	=	Future
GEN	=	Gender
NEG	=	Negative
OBJ	=	Object
PARTI	=	Particle
PERF	=	Perfect
QUES	=	Question word
RelPro	=	Relative Pronoun
S	=	Subject
SPEC	=	Specifier
V	=	Verb

参考文献

日本語参考文献

- 青木怜子 (1992) 『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院 東京
- 天野みどり (1990) 「複主格文考—複主格文の意味と成立にかかわる意味的制約—」
『日本語学』9-5, 27-42 明治書院 東京
- 天野みどり (2002) 『文の理解と意味の創造』笠間書院 東京
- 有田節子 (1992) 「日本語の条件と主題の融和について—談話における setting 機能—」
『KLS』12, 110-119
- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク 東京
- 大河内康憲 (1982) 「中国語構文論の基礎」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編
『講座日本語学第10』, 31-52 明治書院 東京
- 小川芳男編 (1982) 『日本語教育事典』日本語教育学会 大修館書店 東京
- 奥田靖雄 (1984) 『ことばの研究・序説』むぎ書房 東京
- 奥律敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店 東京
- 尾上圭介 (1981) 「「は」の係助詞性と表現的機能」『国語と国文学』58-5, 102-118
- 尾上圭介 (2004) 「主語と述語をめぐる文法」北原保雄監修 尾上圭介編『朝倉日本語
講座6 文法Ⅱ』, 1-57 朝倉書店 東京
- 外池滋生 (1989) 「「は、が、も」の論理形式—文文法と談話文法のインターフェイス—」
『明治学院論叢』446, 51-75
- 影山太郎 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店 東京
- 川端善明 (1982) 「語と文」『日本語学』1-1, 109-113 明治書院 東京
- 川端善明 (1983) 「文の基本構造」『日本語学』2-2, 103-107 明治書院 東京
- 川端善明 (1983) 「文の構造と種類—形容詞—」『日本語学』2-5, 128-134 明治書院
東京
- 菊地康人 (1988) 「従属節中の語句の主題化と分析できる「XはYがZ」文について」
『東京大学言語論集』88, 203-227
- 菊地康人 (1995) 「「は」構文の概観」益岡隆志編『日本語の主題と取り立て』, 37-
69 くろしお出版 東京

- 菊地康人 (1996) 「『XがYがZ』文の整理—『XはYがZ』文との関連から—」『東京大学留学センター紀要』6, 1-46
- 菊地康人 (2000) 「タノシイとウレシイ」国広哲弥教授古希記念論文集『日本語：意味と文法の風景』, 143-159 ひつじ書房 東京
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界6 日本語の文法』中央公論社 東京
- 北原保雄 (1984) 『日本語文法の焦点』教育出版 東京
- 木村英樹 (1997) 「動詞接尾辞“了”の意味と表現機能」大河内康憲教授退官記念 大河内康憲教授退官記念論文集刊行会編『中国語学論文集』, 157-179 東方書店 東京
- 木村英樹・尾上圭介・西村義樹 (1998) 「二重主語とその周辺—日中英対照—」『言語』26-11, 90-108
- 金水敏 (1987) 「時制の表現」山口明穂編『国文法講座6 時代と文法 現代語』, 280-298 明治書院 東京
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 『時・否定と取り立て』仁田義雄・益岡隆志編 岩波書店 東京
- 工藤真由美 (1985) 「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学 解釈と鑑賞』50-3
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房 東京
- 工藤真由美 (2000) 「彼は風邪くらいでは休まないよ—否定のスコープと焦点—」『月刊言語』29, 38-44 大修館書店 東京
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』大修館書店 東京
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店 東京
- 言語研究会構文論グループ・新川忠 (1989) 「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」言語学研究会編『ことばの科学2』, 11-47 むぎ書房 東京
- 佐伯哲夫 (1975) 『現代日本語の語順』笠間書院 東京
- 佐伯哲夫 (1998) 『要説日本文の語順』佐伯哲夫編 くろしお出版 東京
- 坂本比奈子 (1985) 「タイ語の動詞下位分類について」『アジア・アフリカ言語文化研究』30, 177-192 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究
- 佐治圭三 (1973) 「題述文と存現文—主語・主格・主題・叙述(部)などに関して—」『大阪外国語大学学報』29, 63-79
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』ひつじ書房 東京

- 佐治圭三 (1993) 「「の」の本質—「こと」「もの」との対比から—」『日本語学』
12-11, 4-12 明治書院 東京
- 佐藤ちる子 (1976) 「主題化に関する主格名詞句の特性について」佐伯梅友博士喜寿記
念国語学論集刊行会編『国語学論集』, 929-970 表現社 東京
- 澤田浩子・中川正之 (2004) 「中国語における語順と主題化—主題化とその周辺の概念
を中心に—」益岡隆志編『主題の対照』, 19-42 くろしお出版 東京
- 柴谷方良 (1990) 「助詞の意味と機能について—「は」と「が」を中心に—」国広哲弥
教授還暦退官記念論文編『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集
—』, 281-301 くろしお出版 東京
- 杉本武 (1990) 「日本語の大主語と主題」『九州工業大学情報工学部紀要 人文社会科
学編』3, 165-182 九州工業大学
- スリヤウォンパイサーン サオワラック・サクンクルー パカーティップ・堂裏泰子
(1995) 『実用タイ語会話 2』泰日経済技術振興協会編 スリーエーネットワー
ク 東京
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103, 1-17
- 田窪行則 (1987) 「統語情報と文脈情報」『日本語学』6-5, 37-47 明治書院 東京
- タップティム ナッティラー (2005) 『タイ語の2種の主題文—日本語との対照—』大
阪外国語大学 修士論文
- 田中寛 (2004) 『統語構造を中心した日本語とタイ語の対照研究』ひつじ書房 東京
- 谷部弘子 (1986) 「話し手の評価を担う形容詞」『日本語学』5-111, 64-75 明治書院
東京
- 張威 (1998) 『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から—』くろしお
出版 東京
- 塚田浩恭 (2001) 『日英語の主題、主語そして省略』リーベル出版 東京
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版 東京
- 坪本篤朗 (1984) 「文の中に文を埋めるときコトとノはどこが違うのか」『国文学解釈
と教材の研究』29-6, 87-92
- 坪本篤朗 (1993) 「条件と時の連続性—時系列と背景化の諸相—」益岡隆志編『日本語
の条件表現』, 99-129 くろしお出版 東京

- 寺村秀夫 (1973) 「感情表現のシンタクスー「高次の文」による分析の一例ー」『言語』2-2, 98-106
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 東京
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集Ⅰー日本語文法編ー』くろしお出版 東京
- 中右実 (1980) 「テンス、アスペクトの比較」国広哲弥編『日英語比較講座 第2巻 文法』, 157-219 大修館書店 東京
- 中右実・西村義樹著 (1998) 『構文と事象構造』研究者出版 東京
- 中村順良・安井稔 (1984) 『現代の英文法 第10巻 代用表現』研究者出版 東京
- 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』くろしお出版 東京
- 西山祐司 (1985) 「措定文、指定文、同定文の区別をめぐって」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』17, 115-165
- 西山祐司 (1988) 「指定的名詞句と非指示的名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』20, 115-136
- 西山祐司 (1989) 「「象は鼻が長い」構文について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』21, 107-133
- 西山祐司 (1990) 「コンピュータにおける名詞句の解釈をめぐって」国広哲弥教授還暦退官記念論文編『文法と意味の間 国広哲弥教授還暦退官記念論文集』, 113-148 くろしお出版 東京
- 西山祐司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論ー指示的名詞句と非指示的名詞句ー』ひつじ書房 東京
- 仁田義雄 (1983) 「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10, 18-29 明治書院 東京
- 仁田義雄 (1983) 「動詞とアスペクトー語彙論的統語論の観点からー」『計量国語学』14-3, 113-128
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房 東京
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』, 1-38 くろしお出版 東京
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」仁田義雄編『複文の研究(上)』, 87-126 くろしお出版 東京
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』くろしお出版 東京

- 仁田義雄 (1998) 「日本語文法における形容詞」『月刊言語』27・3, 26-35 大修館書店 東京
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版 東京
- 丹羽哲也 (1989) 「無助詞格の機能—主題と格の語順—」『国語国文』58-10, 38-57
京都大学
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』和泉書院 東京
- 沼田善子 (2000) 「塩も入れないと、美味しくならない—とりたて詞と否定」『月刊言語』29, 46-51 大修館書店 東京
- 野田時寛 (1988) 「「名詞句+は」の用法—「主題」と「対照」について—」『日本語学校論集』15, 9-27 東京外国語大学
- 野田尚史 (1982) 「「カキ料理は広島が本番だ」構文について」『待兼山論叢日本学篇』15, 45-67 大阪大学文学部
- 野田尚史 (1988) 「「辞書は新しいのがいい」構文について」『文芸言語研究』13, 93-114 筑波大学
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版 東京
- 野田尚史 (2004) 「主題の対照に必要な視点」益岡隆志編『主題の対照』, 193-213
くろしお出版 東京
- 野田尚史 (2007) 「日本語の主題マーカー」『中日理論言語学研究会 第11回研究会発表論文集』, 1-8 同志社大学
- 野田春美 (1995) 「ノとコト—埋め込み節をつくる代表的形式—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類似表現の文法 (下) 』, 149-428 くろしお出版 東京
- 野村雅昭 (1977) 「造語法」大野晋・柴田武編『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』, 245-284 岩波書店 東京
- 橋本修 (1990) 「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163集, 101-112
- 橋本修 (1994) 「「の」補文の統語的・意味的性質」『文芸言語研究 言語編』, 151-166 筑波大学
- 原口庄輔・中村捷編 (1992) 『チョムスキー理論辞典』研究者出版 東京
- 樋口文彦 (1996) 「形容詞の文類—状態形容詞と質形容詞」言語学会編『ことばの科学 7』, 39-60 むぎ書房 東京

- ピティス・クラーク チッチャノック (2006) 『臨時一語における語構造的意味関係の研究』 大阪外国語大学 修士論文
- 細川英雄 (1989) 「現代日本語の形容詞分類について」 『国語学』 158 集, 91-103
- 堀川智也 (2005) 「「典型的な題目語」の意味的立場」 『日本語文法』 5-1, 39-54
- 堀川智也 (2006) 「モノとコトの関係認定による属性叙述文」 『日本語・日本文化研究』 16, 25-40 旧大阪外国語大学日本語講座
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』 くろしお出版 東京
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』 くろしお出版 東京
- 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」 益岡隆志編『日本語の条件表現』, 1-22 くろしお出版 東京
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版 東京
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」 益岡隆志編『シリーズ言語対照 5 主題の対照』, 3-17 くろしお出版 東京
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』 紀元社 東京
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』 中文館書店 東京
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』 くろしお出版 東京
- 三上章 (1963) 『日本語の構文』 くろしお出版 東京
- 三上章 (1970) 『文法小論集』 くろしお出版 東京
- 南不二男 (1974) 『現代の日本語の構造』 大修館書店 東京
- 南不二男 (1993) 『現代日本語の輪郭』 大修館書店 東京
- 三原健一 (1990) 「多重主語格構文をめぐって」 『日本語学』 9-8, 66-76 明治書院 東京
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』 松柏社 東京
- 三原健一 (1998) 『生成文法と比較統語論』, 21-36 くろしお出版 東京
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』 松柏社 東京
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』 松柏社 東京
- 三原健一 (2008) 「On the Cartographic View of Japanese—Topic を中心に—」 大阪大学大学院授業資料 (ハンドアウト)
- 三原健一 (2008) 『構造から見る日本語文法』 開拓社 東京
- 宮島達夫 (1962) 「カカリの位置」 『計量国語学』 23, 3-15

- 宮本マラシー (2007) 『タイ語上級講座読解と作文』 めこん 東京
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語の研究』 明治書院 東京
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院 東京
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞「思う」をめぐって一文の意味としての主観性・客観性」 『日本語学』 11-8, 105-116 明治書院 東京
- ヤコブセン、W.M. (1990) 「条件文における「関連性」について」 『日本語学』 9-4, 93-107 明治書院 東京
- 山岡政紀 (2000) 『日本語述語と文機能』 くろしお出版 東京
- 吉本啓 (1980) 「「は」と「が」—それぞれの機能するレベルの違いに注目して—」 『言語研究』 81, 1-17

英語とタイ語の参考文献

- Chomsky, Noam. (1977) On Wh-Movement. In P. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian (eds.). *Formal Syntax*, 71-132. Academic Press. New York.
- Cinque, Guglielmo. (1977) The Movement Nature of Left dislocation. In *Linguistic Inquiry* 8(2) : 397-412.
- Dik, Simon C. (1980) *Studies in Functional Grammar*. Academic Press. New York.
- George, Lakoff and Ross, John Robert. (1972) Why you can't DO SO into the sink. In McCawley (ed.). *Syntax and Semantics* 7 : 101-111. Academic Press. New York.
- Givon, Talmy. (1976) Topic, Pronoun, and Grammatical Agreement. In C. Li (ed.). *Subject and Topic*, 149-188. Academic Press. New York.
- Gundel, Jeanette K. (1988) The Role of Topic and Comment. In *Linguistic Theory*. Garland Publishing, Inc.
- Haiman, John. (1978) Conditionals are Topics. In *Language* 54 : 565-589.
- Hasegawa, Nobuko. (1985) On the so-called "Zero pronouns" in Japanese. In *The Linguistic Review* 4 (4) : 289-341.
- Higbie, James and Snea, Thinsan. (2002) *Thai Reference Grammar*. Orchid Press. Bangkok.

- Hinds, John V. (1973) Some remarks on *soo su*. In *Japanese Linguistics* 18 (2) : 18-30.
- Imai, Takashi. (1983) On the significance of Move- α and Empty categories. In Y.Otsu(ed.). *Studies in Generative Grammar and Language Acquisition*, 49-58. International Cristian University.
- Iwasaki, Shoichi. (1987) Identifiability, Scope-setting, and the Particle WA: A study of Japanese Spoken Expository Discourse. In Hinds (ed.). *Perspectives on Topicalization the Case of Japanese WA*, 83-141. John Benjamins Publishing Company. Amsterdam.
- Josephs, Lewis S. (1976) Complementation. In Shibatani, Masayoshi (ed.). *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, 307-369. Academic Press. New York.
- Kameshima, Nanako. (1990) On Aboutness Conditions. In Hoji, Hajime (eds.) *Japanese Korean Linguistics*, 255-267. SLA Stanford.
- Kikuchi, Akira and Takahashi, Daiko. (1991) Agreement and Small clause. In Nakajima, Heizo and Tonoke, Shigeo (eds.). *Topics in Small Clauses*, 75-101. Kurosio. Tokyo.
- Kitagawa, C. (1982) Topic constructions in Japanese. In *Lingua* 57 : 175-214.
- Kizu, Mika. (2005) *Cleft Constructions in Japanese Syntax*. Palgrave Macmillan. New York.
- Kuno, Susumu. (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge: MIT Press.
- Kuno, Susumu. (1976) Subject, theme, and speaker's empathy – a re-examination of relativization phenomena. In C. Li (ed.). *Subject and Topic*, 417-444. Academic Press. New York.
- Kuno, Susumu and Wongkhomthong, Preya. (1981) Characterizational and identificational sentences in Thai. In *Studies in Language* 5 (1) : 65-109.
- Kuroda, S.-Y. (1987) Movement of Noun Phrases in Japanese. In Imai and Saito (eds). *Issues in Japanese Linguistics*. Foris Publications. U.S.A.

- Kuroda, S.-Y. (1992) Whether we agree or not : A comparative syntax of English and Japanese. In *Japanese syntax and semantic*, 315-357 Collected Papers. Kluwer Academic Publishers. London.
- Li, Charles N. and Thompson, Sandra A. (1976) Subject and Topic : A New Typology of language. In C. Li (ed.). *Subject and Topic*, 457-490. Academic Press. New York.
- M.A.K, Halliday. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold.
- Naisap, Thipsuda. (1996) *Introduction to Linguistics*. Rajabhat Pibulsongkram University. Phitsanulok.
- Nishiyama, Kunio. (1999) Adjectives and the Copulas in Japanese. In C.-T James Huang and Mamoru Saito (eds.). *Journal of East Asian Linguistics*, 183-222. Kluwer. Academic Publishers. London.
- Ohso, Mieko. (1976) *A study of zero pronominalization in Japanese*. Michigan University Microfilms International.
- Pankhuenkhat, Ruengdet. (1998) *Thai Linguistics*. Mahachulalongkornrajavidyalaya Press. Bangkok.
- Panthumeethaa, Nawawan. (1996) *Rakphaasaa*. Chulalongkorn University Press. Bangkok.
- Prasitrathasin, Amara, Hunjamlong, Yapaapan and Sawetaman, Saranyaa. (2001) *Grammatical theories*. Chulalongkorn University Press. Bangkok.
- PrayaUppakitsinlapasan(Nim Kaanjanachiiwa). (1971) *Lak PhaasaaThai*. Thaiwatthanaaphaanit. Bangkok.
- Saito, Mamoru. (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. PhD Dissertation. MIT.
- Sakai, Hiromu. (1994) Complex NP constraint and Case-conversation in Japanese. In Nakamura, Masaru (ed.), 179-203. In *Current topic in English and Japanese*. Hituzishobo. Tokyo.
- Shibatani, Masayoshi. (1990) *The Language of Japan*. Cambridge University Press. New York.

Shibatabi, M. and C. Cotton. (1977) Remark on Double-Nominative Sentences.

In *Japanese Linguistics* 5 : 261-277.

Siihaumpai, Prapaasii. (1991) *Phaasaathai*. Aksonrapong. Waranan (ed.).

Chulalongkorn University Press. Bangkok.

Stowell, Tim. (1983) Subject Across Categories. In *The linguistic Review* 2 : 285-312.

Tateishi, Koichi. (1994) *The Syntax of Subject*. Standford/Tokyo: CSLI/ Kurosio.

Tsubomoto, Atsuro. (1982) Toward a unifying principle of complementation. In *English and Japanese*. KLS 2, 73-83.

Tsubomoto, Atsuro. (1989) Null Subject Phenomena in Japanese: Incorporation, Null Expletives, and Topic-Agreement. In *EnglishLinguistics* 6 : 130-149.

Yosio, Endo. (2007) *Locality and Information Structure.: a cartographic approach to Japnese*. John Benjamins Publishing Company. Amsterdam.

Yubun, Suziki. (1991) Small Clause as AgrP. In Nakajima, Heizo and Tonoke, Shigeo (eds.). *Topics in Small Clauses*, 27-37. Kurosio. Tokyo.

用例の出典

(血と薔薇) ジェームズ・パクーソン

(ダ・ヴィンチ・コード) ダン・ブラウン

(てんぐ) 柴田哲孝

(博士の愛した数式) 小川洋子

(富士・箱根殺人ルート) 西村京太郎

(Bεεbfuk?ànphaasāaThai) タイ語読解小学校3年生

CD-ROM 版『新潮文庫』

謝辞

本博士論文を完成させるためにあたり、まず、何よりも主指導教官である三原建一先生に感謝の意を申し上げたい。日本語学出身の私を拾ってくださり、今日に至るまでご指導、ご助言をくださいました。3年間は短い時間でしたが、先生のお優しい心が感じられました。私の体調不良のことで先生にご迷惑をかけたことなどもあり、この場を借りておわびも申し上げたいと思います。

副指導教官の仁田義雄先生には、研究生のときから先生の授業に参加させていただき、日本語学に対する考え方を聞かせていただきました。

堀川智也先生にも深く感謝の気持ちを申し上げたい。私を主題の研究に導き、修士論文の執筆のときから、ご指導、ご助言をいただけてきました。日本語文法学会第6回大会の応募の際に先生のご支援がなければ、学会での研究発表はなかった。

宮本マラシー先生には社会言語学の面白さを教えていただき、タイ語についてのご助言もいただきました。

長年の研究生活については、先生方だけではなく、日本語学や言語学と一緒に学んだ日本語講座の皆様にも感謝したい。特に、本博士論文を最後までチェックして下さった佐野裕子氏に最大の敬意と感謝を表したいと思います。日本語の確認だけではなく、博士論文の構成や内容についても佐野裕子氏にご助言をいただきました。そして浦木貴和氏にも、様々なご支援やアドバイスをいただきました。

次に、日本の方々に感謝したい。外国人である私に日本の教育を受ける機会を与えてくださり、学問の最高峰と言われるところまで支援していただきました。

2002年4月に日本に来たとき、英語学科出身の私にとって日本語学の知識は新しいものでした。2年間の研究生生活は、日本語学の知識を身につける2年間でした。そのとき学んだ知識は本博士論文に繋がりまして、その2年間に感謝したい。

最後に母国にいる母親に、感謝の意を申し上げたい。教育をほとんど受けていない母親に、子供が高い教育を受けられるという誇りを持たせたいという思

いが 7 年間の努力のすべてでした。

2008 年 12 月 タップティム ナッティラー

